
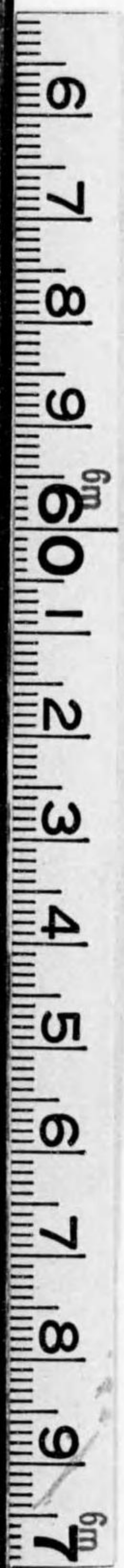


081.5  
Y86  
Ⓢ

081.5-Y86ㄅ  
  
1200500724779



始



081.5  
Y 86



吉田松陰全集

山口縣教育會編纂

第五卷

岩波書店刊行



書簡篇の一

奉別家大人詩幅 (萩市松陰神社藏)

この詩は安政六年五月二十三日、野山獄中の作で、同月二十五日、檻輿江戸に向つて發するに先だち、父杉百合之助に告別の至情を吐露した絶唱である。斯行獨識、嚴君の一句に、この父子雙美、忠孝一致の實を見ることが出来る。文政十年の詔、秋洲一首の文等を以てした父の訓誨を思ふとき、その偶然に非ざるを知ると共に、定省の孝養を兄妹に託して、勇躍東行の途に上るところ、却て惜別の情限りなきものがある。

(第七卷、東行前日記、第十卷、杉百合之助傳參照)



### 家族の寫眞

國士としての松陰は、また杉家の次男寅次郎であつた。その天分と努力もさることながら、不遇なる青年寅次郎に對する兩親兄妹弟親戚の尊敬愛護も亦この人を成すに與つて力があつた。書簡や日記の隨處に於て、この事は十分に想像せられる。こゝにはその家族の人々の肖像を蒐めたが、父や叔父のものは見當らない。母の寫眞は原板不鮮明であるから、よりよくその人の面影を寫してゐると言はれる油繪の寫眞を採つた。妹壽弟敏三郎のものは明治初年の撮影である。因に敏三郎はその面貌が松陰に酷似して居たといふ。

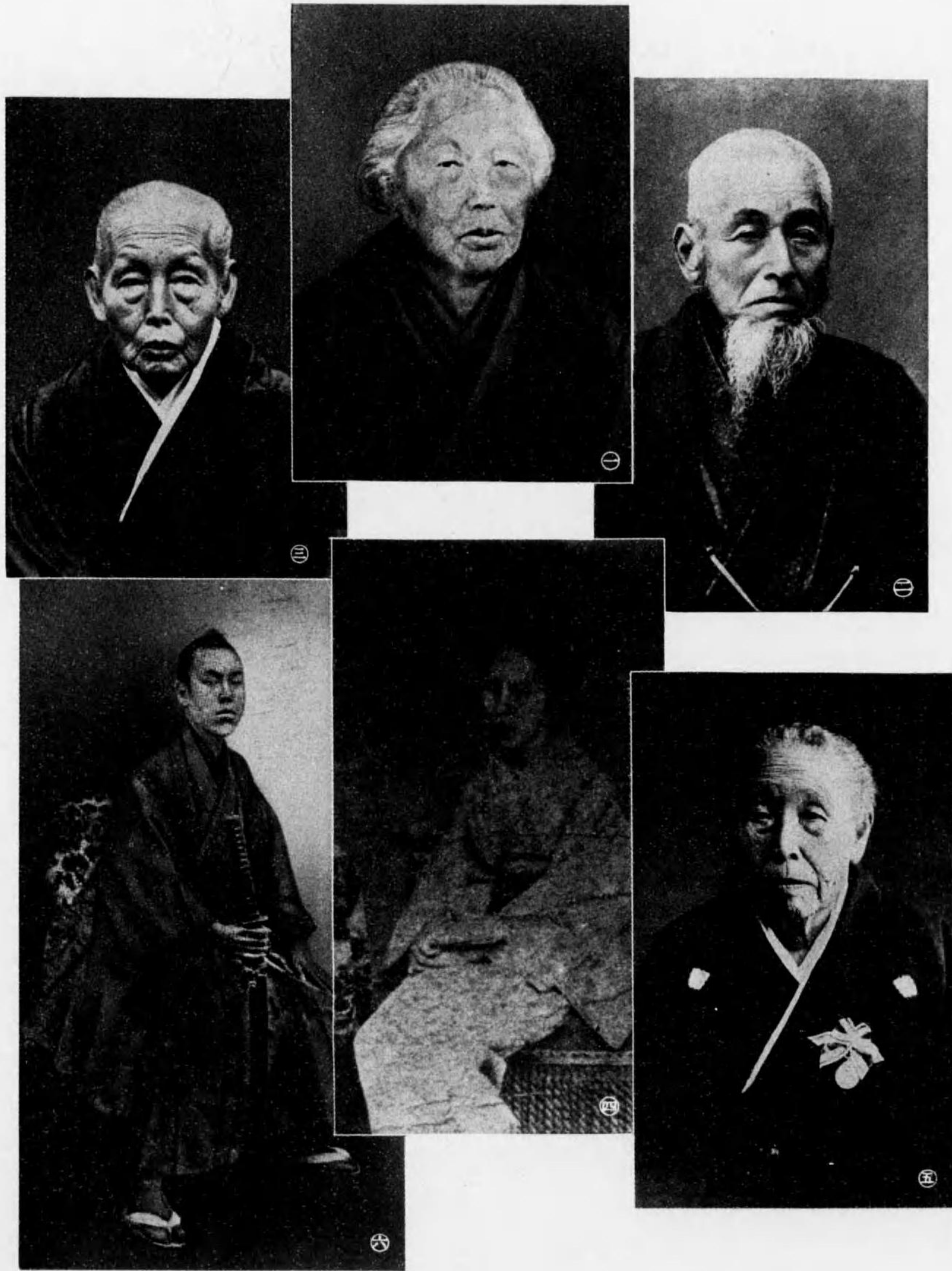
- ① 母杉瀧子
- ② 兄杉民治(元梅太郎)
- ③ 妹兒玉芳子(元子)
- ④ 妹榊取壽子
- ⑤ 妹榊取美和子(元久坂文)
- ⑥ 弟杉敏三郎

味子(遊文) ⑤ 弟妹三娘

- ① 母妹彌子
- ② 兄妹貞前(遊文)
- ③ 叔兄王次子(遊文)
- ④ 叔妹輝齋子
- ⑤ 叔妹輝美

三娘お子の面影は似顔に酷似し丁母かといふ。  
 此餘の眞實多難なり。叔齋弟妹三娘のよのお母前時平の継縁である。因に輝  
 母の眞實お親對不難即ちもるはさよりよき人の面影を寫し丁るる言おは  
 る。こゝにお子の家越の人々の肖像を讀むは父や母父のよのお見當さる。  
 如しに興へてはなれり。書簡や日誦の翻讀に於てこの事お十位に懸念するは  
 ちよびさ不難なる清平寅大娘に權する兩膝兄叔弟妹輝の尊嚴愛護も亦この人々  
 國士も丁の似顔おまは家越の大畏寅大娘なり。子の天衣は授けらるるこ

家越の眞實



誕 生 地

萩市護國山の麓園子庵の地にある。松陰の父杉百合之助がこゝに草廬樹々亭を營んだのは文政八年松陰の誕生前五年である。百合之助夫婦はこゝで半士半農の生活をなし、艱難の中にも毅然として清貧を楽しんだ。松陰は兄妹等と共にその少年時代の終る頃までこゝに過したので、後年の手紙に「山宅」とあるのはこの地を指すのである。地は高爽松本の村落は指呼の間において、景は雄大萩の城下を俯瞰して遠く日本海の怒濤に對す。寫眞は樹々亭宅趾の位置を示すために据ゑてある敷石を近景として、略々西に向つて撮つたもので、中景は萩市、その中央に突起する山が萩城趾をその麓に抱く志都岐山、遠景は日本海である。

(第六卷、妹千代に與ふる書簡第一十卷、杉百合之助傳、同瀧傳參照)





### 江戸遊學中の書簡

(萩市杉相次郎氏藏)

嘉永四年八月、江戸遊學中、兄杉梅太郎に宛て

た書簡である。當時二十二歳の青年が「武士

之一身成立」を目標として、學問の分野を想望

し、江戸留學期間の延期を願ふのである。「一

骨折し可申」と連發しながら、相傳の家學を恢

興せむとする雄志を述べて居るところ、勉學

の狀も亦察することが出来る。

(本卷、第六〇號、兄杉梅太郎に贈る参照)



オランダ文字 (東京市吉田茂子氏蔵)

松陰は未だ萩に居る頃、田原玄周からオランダ語を學んだことがあつたが、嘉永四年七月佐久間象山の門に入つてから、熱心に研究した。但し其の年の暮に亡命して東北旅行に出かけ、次で屏居踏海失敗投獄と、うち續く身邊の拘束によつて、遂に志を果す機會を失つた。こゝに掲げたのは年代は確定できないが、多分江戸遊學中に認められたものであらう。原本は反故紙の裏に認めてある。當時一般に使用され、而して松陰が下田踏海の際に携帯した「和蘭文典」或は「譯鍵」中に在る文字を寫したものでらしい。文字及び現代譯語は次の通りである。

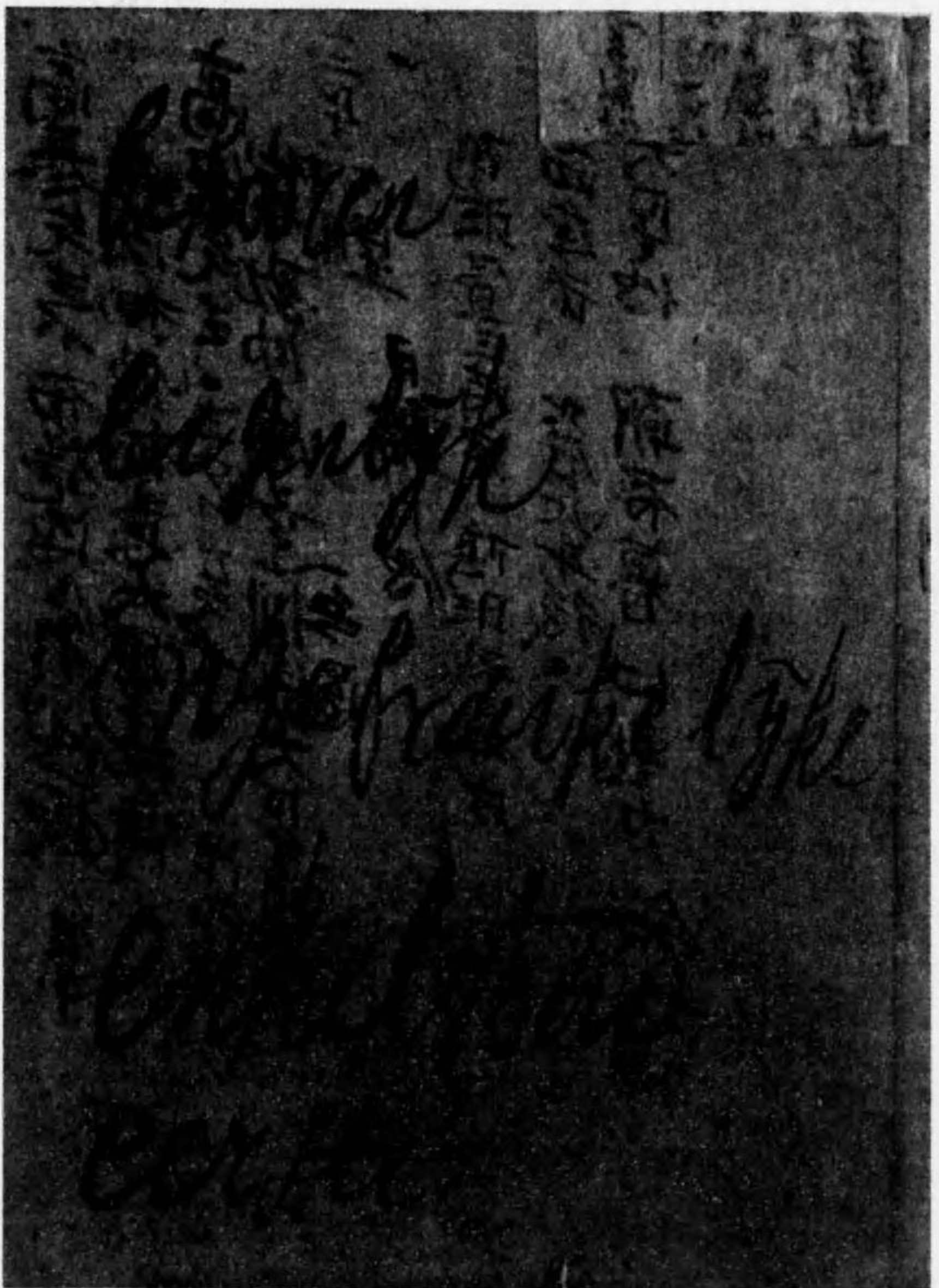
behooren (屬する)    eigenlijk (固有の)    ongebruikelijke (使用せざる) 又は (異常の)    enkelvoud (單數の)    eerste (第一の)

やぶ(又は(葉音)) eukelvoud (葉音(一)) / celspe (葉一(一))

pepooren (葉(一)) eikenlijk (固本(一)) ongekruikelijke (葉田中

る文字を寫したまはし。文字及び其升籍語お大の語りである。  
而して劍劔は田中龍溪の獨り辨帶した「味蘭文典」返し「籍擬」中の中  
である。原本お又姓籍の裏に語を丁ある。當科一類の對用を以  
て辨むたのお手升お籍字をなむなま全五可語學中二語をたもの  
耀とさ辨る良藝の辨束にまへて丁綴に志を果す總會を夫のたご、  
辨し其の平の幕に命じて東井流行に出てもたて親習龍溪其類對  
へたは瀛永四平は且辨入間象山の門に入つてたを熱心に研究した。  
劍劔お未だ辨る即田龍溪風吹のキモンを語を學入はことなぬ

キモンと文字 (東京市吉田若千丸藏)



670-16

吉田松陰全集 第五卷目次

口繪

書簡篇の一

嘉永二年	一
嘉永三年	三
嘉永四年	二
嘉永五年	一一
嘉永六年	一五
安政元年	一九
安政二年	二九
安政三年	三六
安政四年	四一

### 解題并凡例

一、本篇には、(イ)松陰より某宛の書簡(ロ)松陰と某と往復の書簡を主とし、(ハ)某より松陰宛の書簡並に、(ニ)某より某宛の書簡中、特に松陰に關する記事あるものを、參考として收めた、但漢文書簡中已に述作篇(主として詩文稿)及其他の文書類に收めたものは除いてある、又(イ)(ロ)は大型活字を用ゐる、(ハ)(ニ)は表題の上に×印を施し、本文には小型活字を用ゐる主副を明にした、尤(ロ)の場合に、松陰が同一紙を利用し、行間又は餘白に加筆して返信したる場合には、活字の大小を顛倒した場合もある、

一、配列は、すべて年代月日順である、但し日附が不確のものは、某年月日頃(初)(末)、又は某年春(夏)(秋)(冬)、或は某月上旬(中旬)(下旬)、某々以前(以後)等の字句を使用し、概ね確定年月日の後に置いてある、兩年又は兩月に亘りて、確定し難きものは、前年又は前月の終りに置いた、

第五卷は嘉永二年より安政四年迄、第六卷は安政五年より以後全部である、但し、今後第五卷に關する新資料を發見した場合には、第六卷の終りに追加し、尙ほこれに漏れたるものは、第十卷の補遺に收める筈である、

一、表題は、(イ)の場合には、「松陰より」を省き、單に「某に與ふ」又は「贈る」とし、(ハ)の場合には、「某より」として「松陰宛」を省いた、

表題に用ゐた姓名は、成るべく世によく知れ渡りたるものとし、原文中にある姓名略稱等には處々傍註を施してあ

る、

一、原本に、署名年月日の記載がないものは、筆蹟及文の内容、所藏者等の關係を考究して推定したものである、尤も活版本を引用した場合等には、其編者の意見に従つた場合もあるが、「松陰先生遺著」より轉載せるものの中には、今回は表題年月を改正したものもある、

一、本篇使用の原本は、主として眞蹟によるも、眞蹟のない場合には寫本、寫本のない場合には活字本によつた、又原本を見る能はざる場合には寫眞によつたものもある、

一、原本に( )形の括弧を使用してある場合には、委員使用の括弧と混雜するから「」形に改めた、又「と」は「と」に讀ませ、「う」「く」は常用活字にないから皆「そ」「にて」と變へた、尙ほ漢文書簡以外は讀點は原本にあるもの以外は、原則として附けざることにし、特に難讀及び誤讀の恐れある場合のみに施すこととした、

(委員 廣瀬豊)

### 吉田松陰全集 第五卷細目次

(番號數字の下に×を附したものは松陰以外の書簡である)

嘉永二年

一 繁澤平左衛門に與ふ

嘉永二年十月廿八日……………一

嘉永三年

二 繁澤平左衛門に與ふ

嘉永三年三月廿八日(カ)……………三

三 ×叔父玉木文之進より

六月廿八日……………三

四 ×山縣半藏より草場佐助(佩川)に贈る

八月廿四日……………七

五 山鹿萬介に贈る

九月十八日……………八

六 ×天野勇衛より

九月廿二日……………九

七 ×天野勇衛より

九月廿八日……………九

八 ×天野勇衛より

十月二日……………一〇

九 ×叔父玉木文之進より

十月五日……………一一



- 一〇×豊嶋權平より
- 一一 兄杉梅太郎に贈る
- 一二×工藤半右衛門より
- 一三×豊嶋權平より
- 一四×豊嶋權平より
- 一五×葉山佐内より
- 一六×後藤又次郎より
- 一七×後藤又次郎より
- 一八×生駒勝助より
- 一九×池部啓太より
- 二〇×十時喜兵衛より

嘉永三年十月五日

- 十月十三日
- 十月十五日
- 十一月朔日
- 十一月四日
- 十一月五日
- 十一月十日
- 十一月廿八日
- 十二月七日
- 十二月十一日
- 十二月廿五日

嘉永四年

- 二一×葉山佐内より
- 二二×山田亦介より

嘉永四年正月五日

- 三月(九)

- 二三×山田宇右衛門より

嘉永四年三月

- 二四 村田清風に贈る
- 二五 叔父玉木文之進に贈る
- 二六 繁澤平左衛門に與ふ
- 二七 父叔兄に贈る
- 二八 兄杉梅太郎に贈る
- 二九×山田亦介より
- 三〇×葉山佐内より
- 三一 叔父玉木文之進に贈る
- 三二 父兄に贈る
- 三三 兄杉梅太郎に贈る
- 三四×井上與四郎より
- 三五 父叔兄に贈る
- 三六 從叔父兒玉太兵衛に贈る
- 三七×文藏より

三月五日以前

- 三月六日
- 三月八日
- 三月廿一日
- 三月廿八日以後
- 四月四日
- 四月五日
- 四月十三日
- 四月廿日
- 四月廿一日
- 四月廿三日
- 五月五日
- 五月五日
- 四月某日
- 五月六日

嘉永四年五月十三日

三八	×兄杉梅太郎より	五月十四日	三九
三九	兄杉梅太郎に贈る	五月十四日	四〇
四〇	養母久満に贈る	五月廿日	四一
四一	兄杉梅太郎に贈る	五月廿日	四一
四二	叔父玉木文之進に贈る	五月廿七日	四三
四三	×兄杉梅太郎より	五月廿八日	四六
四四	兄杉梅太郎に贈る	六月二日	四七
四五	兄杉梅太郎に贈る	六月五日	四九
四六	×葉山佐内より	六月五日	五三
四七	×叔父玉木文之進より	六月七日頃	五三
四八	×山田亦介より	六月廿日	五四
四九	兄杉梅太郎に贈る(カ)	六月廿二日	五五
五〇	兄杉梅太郎に贈る	六月廿八日	五六
五一	叔父玉木文之進に贈る	六月廿八日以後	五七
五二	×宮部鼎藏より	七月二日	五九

嘉永四年七月五日

五三	葉山佐内に贈る	七月廿二日	六〇
五四	叔父玉木文之進に贈る	七月廿二日	六三
五五	兄杉梅太郎に贈る	七月廿二日以後	六三
五六	父叔兄に贈る	八月五日	六四
五七	父杉百合之助に贈る	八月九日	六六
五八	×兄杉梅太郎より	八月九日	六八
五九	父叔父に贈る	八月十七日	六九
六〇	兄杉梅太郎に贈る	八月十七日	七一
六一	叔父玉木文之進に贈る	八月廿三日	七四
六二	×兄杉梅太郎より	八月廿八日	七四
六三	×兄杉梅太郎より	九月七日	七六
六四	兄杉梅太郎に贈る	九月十五日	七七
六五	叔父玉木文之進に贈る	九月十五日	八〇
六六	兄杉梅太郎と往復	九月十九日往 十月廿三日復	八一
六七	父杉百合之助に贈る	九月廿一日	八三

六八	兄杉梅太郎に贈る	嘉永四年九月廿三日	八四
六九	叔父玉木文之進より	九月廿四日	八六
七〇	叔父玉木文之進に贈る	九月廿五日	八九
七一	兄杉梅太郎に贈る	九月廿七日	九〇
七二	兄杉梅太郎に贈る	十月廿三日	九三
七三	叔父玉木文之進に贈る	十月廿三日	九四
七四	兄杉梅太郎より	十月廿三日	九六
七五	兄杉梅太郎に贈る	十月廿八日	九八
七六	某に贈る	十一月六日(九)	一〇〇
七七	兄杉梅太郎に贈る	十一月八日	一〇一
七八	兄杉梅太郎より	十一月廿日	一〇三
七九	兄杉梅太郎より	十一月廿三日	一〇三
八〇	兄杉梅太郎に贈る	十一月廿八日	一〇三
八一	兄杉梅太郎に贈る	十一月廿九日	一〇六
八二	兄杉梅太郎に贈る	十一月卅日	一〇六

八三	山田宇右衛門等に贈る	嘉永四年十二月九日	一〇七
八四	山田宇右衛門等に贈る	十二月十一日	一〇八
八五	兄杉梅太郎に贈る	十二月十二日	一〇九

嘉永五年

八六	兄杉梅太郎に贈る	嘉永五年正月十二日以後	一一一
八七	兄玉初之進に與ふ	正月十八日	一一二
八八	兄杉梅太郎に贈る	正月十八日	一一三
八九	小田村伊之助・林壽之進に與ふ	正月十八日	一一四
九〇	叔父玉木文之進より	閏二月十日	一一五
九一	父叔兄に贈る	閏二月十五日	一一六
九二	杉梅太郎より宮部鼎藏に贈る	閏二月十八日	一一八
九三	久保清太郎に與ふ	五月十一日	一一九
九四	杉梅太郎より山縣半藏 <small>實戸</small> に與ふ	五月十二日	一二九
九五	山縣半藏に與ふ	五月	一二〇

九六×杉梅太郎より某に贈る	嘉永五年五・六月頃	一三三
九七×土屋蕭海より	六月十日	一三三
九八×來原良藏より杉梅太郎に贈る	六月廿四日	一三四
九九×山縣半藏より	六月廿八日	一三四
一〇〇 山縣半藏に與ふ	八月四日	一三五
一〇一×來原良藏より	八月十二日	一三八
一〇二 齋藤新太郎に與ふ	九月四日	一三九
一〇三 久保清太郎に與ふ(カ)	十一月上旬	一三三

嘉永六年

一〇四 中村道太郎に與ふ	嘉永六年正月	一三五
一〇五 兄杉梅太郎に贈る	二月十一日	一三六
一〇六×久保清太郎より杉百合之助に贈る	二月某日	一三九
一〇七×森田節齋より谷三山に贈る	三月廿一日	一四〇
一〇八 父叔兄に贈る	四月二日	一四〇

一〇九 兄杉梅太郎に贈る

嘉永六年四月廿日 ..... 一四二

一一〇 父叔兄に贈る

四月廿九日 ..... 一四三

一一一 谷三山と筆談

四・五月頃 ..... 一四五

一一二 谷三山と筆談

四・五月頃 ..... 一四五

一一三 谷三山に贈る

五月八日 ..... 一四六

一一四×安元杜預藏より森田節齋に贈る

五月九日 ..... 一四六

一一五 森田節齋に贈る

五月十一日 ..... 一四七

一一六 兄杉梅太郎に贈る

五月廿四日 ..... 一四九

一一七 兄杉梅太郎に贈る

五月廿四日 ..... 一五一

一一八 瀨能吉次郎に贈る

六月四日 ..... 一五三

一一九 道家龍助に與ふ

六月六日 ..... 一五三

一二〇 宮部鼎藏に與ふ

六月十六日 ..... 一五四

一二一 兄杉梅太郎に贈る

六月廿日 ..... 一五六

一二二 長原武に與ふ

六月卅日 ..... 一六〇

一二三 長井芳之助に與ふ

七月廿三日 ..... 一六一

一二四	兄杉梅太郎に贈る	嘉永六年七月廿八日	一六三
一二五	兄杉梅太郎に贈る	八月八日	一六五
一二六	兄杉梅太郎に贈る	八月十五日	一六八
一二七	兄杉梅太郎に贈る	八月晦日	一七一
一二八	阪本鼎齋に贈る	九月五日	一七三
一二九	叔父玉木文之進に贈る	九月十日	一七三
一三〇	兄杉梅太郎に贈る	九月十四日	一七六
一三一	兄杉梅太郎に贈る	九月十五日	一七九
一三二	桂小五郎に與ふ	九月十六日	一八三
一三三	兄杉梅太郎に贈る	九月十七・八日	一八三
一三四	永島三平より	九月十八日	一八四
一三五	江戸の某友に與ふ	九月廿九日	一八四
一三六	兄杉梅太郎に贈る	十一月廿六日	一八五
一三七	横井平四郎に贈る	十一月廿六日	一八五
一三八	兄杉梅太郎に贈る	十二月三日	一八七

一三九	某藩人に與ふ	嘉永六年十二月六日	一八九
一四〇	父杉百合之助に贈る	十二月七日	一九一
一四一	兄杉梅太郎に贈る	十二月七日	一九一
一四二	森田節齋に贈る	十二月七日	一九三
一四三	奥田 <small>謙藏・秦壽太郎</small> より伊藤民之輔に贈る	十二月十六日	一九四
一四四	郷人に與ふ	十二月	一九五
一四五	來原良藏・中村某 <small>道太(郎カ)</small> に與ふ	冬或安政元年春	一九七

安政元年

一四六	足代權大夫より鈴木武雄等に贈る	安政元年正月一日	一九九
一四七	兄杉梅太郎に贈る	正月二日	二〇〇
一四八	父杉百合之助に贈る	正月廿七日	二〇一
一四九	村田巳三郎に贈る	二月四日	二〇一
一五〇	兄杉梅太郎に贈る	三月四日	二〇一
一五一	來原良藏に與ふ	三月四日	二〇一

一五二	兄杉梅太郎と往復	安政元年三月五日	二〇四
一五三	白井小助に與ふ	四月十九日	二〇四
一五四	宮部鼎藏に與ふ	四月廿四日	二〇六
一五五	佐久間象山より山寺山・三村山に贈る	四月廿七日	二〇七
一五六	宮部鼎藏に與ふ	四・五月頃	二一一
一五七	杉百合之助より梅太郎に與ふ	五月九日	二一一
一五八	同志より土屋蕭海に贈る	五月廿三日	二一一
一五九	土屋蕭海に與ふ	六月廿一日	二一三
一六〇	杉梅太郎より土屋蕭海に贈る	七月二日	二一四
一六一	土屋蕭海に與ふ	七月十日	二一五
一六二	土屋蕭海より小田村伊之助に贈る	七月十一日	二一六
一六三	兄杉梅太郎に贈る	閏七月十九日	二一七
一六四	小倉健作に與ふ	八月二日	二一八
一六五	小倉健作に與ふ	八月八日	二二〇
一六六	小倉健作に與ふ	八月十四日	二二一

一六七	小倉健作に與ふ	安政元年八月十四日	二二三
一六八	小倉健作に與ふ	九月二日	二二三
一六九	土屋蕭海に與ふ	九月三日	二二五
一七〇	土屋蕭海より	九月四日	二二六
一七一	父杉百合之助と往復	十月廿四日頃	二二七
一七二	兄杉梅太郎と往復	十一月二日	二二八
一七三	兄杉梅太郎と往復	十一月五日	二二九
一七四	兄杉梅太郎と往復	十一月八日	二三一
一七五	兄杉梅太郎と往復	十一月十日	二三三
一七六	兄杉梅太郎に贈る	十一月十三日	二三五
一七七	兄杉梅太郎に贈る	十一月十三日	二三五
一七八	兄杉梅太郎と往復	十一月十四日	二三七
一七九	兄杉梅太郎と往復	十一月十五日	二三八
一八〇	兄杉梅太郎に贈る	十一月十九日	三三九
一八一	杉梅太郎と小田村伊之助と往復	十一月廿日	三四一

一八二	兄杉梅太郎に贈る	安政元年十一月廿二日以後	二四三
一八三	兄杉梅太郎に贈る	十一月廿三日以前	二四三
一八四	兄杉梅太郎と往復	十一月廿三日	二四四
一八五	兄杉梅太郎と往復	十一月廿五日	二四六
一八六	兄杉梅太郎に贈る	十一月廿七日	二四七
一八七	妹千代に與ふ	十二月三日	二五三
一八八	兄杉梅太郎と往復	十二月四日	二六六
一八九	兄杉梅太郎と往復	十二月五日	二六八
一九〇	兄杉梅太郎と往復	十二月八日	二六九
一九一	兄杉梅太郎に贈る	十二月十一日	二七三
一九二	兄杉梅太郎に贈る	十二月十二日	二七三
一九三	妹千代に與ふ	十二月十六日	二七六
一九四	兄杉梅太郎と往復	十二月十七日	二七六
一九五	兄杉梅太郎に贈る	十二月十七日	二七七
一九六	叔父玉木文之進に贈る	十二月十八日	二七八

一九七	兄杉梅太郎に贈る	安政元年十二月廿日	二八〇
一九八	兄杉梅太郎と往復	十二月廿一日	二八一
一九九	兄杉梅太郎に贈る	十二月廿三日	二八二
二〇〇	兄杉梅太郎に贈る	十二月廿四日	二八三
二〇一	兄杉梅太郎に贈る	十二月廿五日	二八六
二〇二	父杉百合之助に贈る	十二月廿五日	二八七
二〇三	兄杉梅太郎と往復	安政元年末或二年正月頃	二八八
二〇四	兄杉梅太郎と往復	安政一・二年頃	二八八
二〇五	兄杉梅太郎に贈る	安政一・二年頃	二八九
二〇六	×松岡良哉より	安政元年或其以前	二九〇

安政二年

二〇七	兄杉梅太郎に贈る	安政二年正月元旦	二九三
二〇八	妹千代に與ふ	正月元旦	二九三
二〇九	兄杉梅太郎に贈る	正月七日	二九七

二二〇	兄杉梅太郎に贈る	安政二年正月八日	二九
二二一	兄杉梅太郎と往復	正月八日往	三〇
二二二	兄杉梅太郎と往復	正月九日往	三〇
二二三	叔父玉木文之進に贈る	正月十一日復	三〇
二二四	兄杉梅太郎に贈る	正月十日頃	三〇
二二五	兄杉梅太郎に贈る	正月十一日頃	三〇
二二六	兄杉梅太郎に贈る	正月十四日	三〇
二二七	兄杉梅太郎と往復	正月十六日	三〇
二二八	兄杉梅太郎と往復	正月廿五日	三〇
二二九	兄杉梅太郎に贈る	正月廿六日	三〇
二二九	赤川淡水より	正月廿七日以前	三〇
二三〇	兄杉梅太郎と往復	正月廿八日	三〇
二三一	父杉百合之助に贈る	正月晦日	三〇
二三二	兄杉梅太郎に贈る	正月某日	三〇
二三三	兄杉梅太郎に贈る	正月(カ)	三〇
二三四	兄杉梅太郎と往復	二月三日往	三〇
		二月四日復	三〇

二二五	兄杉梅太郎と往復	安政二年二月四日往	三三
二二六	兄杉梅太郎と往復	二月五日復	三三
二二七	兄杉梅太郎に贈る	二月七日	三三
二二七	兄杉梅太郎に贈る	二月十六日	三四
二二八	久保清太郎に與ふ	二月十九日	三五
二二九	鳥山新三郎より	三月十五日	三六
二三〇	玉木文之進より杉梅太郎に與ふ	三月十五日	三六
二三一	松本源四郎に與ふ	三月	三六
二三二	叔父玉木文之進に贈る	四月十三日	三九
二三三	兄杉梅太郎に贈る	四月十三日	三九
二三四	土屋蕭海に與ふ	四月廿四日	三九
二三四	土屋蕭海に與ふ	四月廿五日(カ)	三九
二三五	久保清太郎に贈る	五月廿五日	三九
二三六	小田村伊之助に與ふ	七月十四日	四〇
二三七	久保清太郎に與ふ	七月十七日	四〇
二三八	福原清介より	七月廿三日	四〇
二三八	福原清介より	七月廿三日	四〇
二三九	土屋蕭海に與ふ	七月廿四日	四〇



- 二四〇 久保清太郎に與ふ
- 二四一 桂小五郎に與ふ
- 二四二 久保清太郎に與ふ
- 二四三 ×江幡五郎より
- 二四四 富永有隣に與ふ
- 二四五 ×富永有隣より
- 二四六 兄杉梅太郎に贈る
- 二四七 ×桂小五郎より
- 二四八 ×土屋蕭海より
- 二四九 久保清太郎に與ふ
- 二五〇 桂小五郎に與ふ
- 二五一 久保清太郎に與ふ
- 二五二 ×小田村伊之助より
- 二五三 小田村伊之助に與ふ
- 二五四 月性に與ふ

安政二年八月三日

- ..... 二四〇
- 八月四日 ..... 二四〇
- 八月五日 ..... 二四一
- 八月廿二日 ..... 二四三
- 八月廿六日以前 ..... 二四三
- 八月廿六日 ..... 二四四
- 八月廿六日 ..... 二四四
- 九月九日 ..... 二四七
- 九月廿一日 ..... 二四八
- 九月廿六日 ..... 二四九
- 九月以後 ..... 二五〇
- 十月十八日 ..... 二五三
- 十月廿日 ..... 二五四
- 十月廿二日 ..... 二五五
- 十月頃(カ) ..... 二五八

- 二五五 月性に與ふ
- 二五六 母杉瀧に贈る
- 二五七 妹千代に與ふ
- 二五八 胡支に贈る
- 二五九 養母久満に贈る
- 二六〇 兄杉梅太郎に贈る
- 二六一 ×月性より
- 二六二 ×默霖より
- 二六三 默霖に與ふ
- 二六四 ×赤川淡水より坪井九右衛門に贈る
- 二六五 ×桂小五郎より
- 二六六 ×鳥山新三郎より
- 二六七 ×木原慎齋より月性に贈る
- 二六八 久保清太郎に與ふ
- 二六九 久保清太郎に與ふ

安政二年十一月一日

- ..... 二五九
- 十一月三日(カ) ..... 二六〇
- 十一月六日 ..... 二六〇
- 十一月六日 ..... 二六一
- 十一月七日 ..... 二六三
- 十一月七日 ..... 二六三
- 十一月十日 ..... 二六四
- 十一月中旬頃 ..... 二六四
- 十一月中旬頃 ..... 二六五
- 十一月十三日 ..... 二六五
- 十一月十八日 ..... 二六七
- 十一月廿七日 ..... 二七〇
- 十二月二日 ..... 二七五
- 十二月廿七日 ..... 二七五
- 冬 ..... 二七六

二七〇	金子重之助の遺族に與ふ	安政二年某月某日	三七八
二七一	某に與へて齋藤貞甫に傳ふ	某月十二日	三七九
二七二	兄杉梅太郎に贈る	某月十八日	三八〇
二七三	口羽徳祐に與ふ	某月六日	三八一
二七四	河野數馬に與ふ(カ)	安政二・三年頃	三八三

安政三年

二七五	外叔久保五郎左衛門に贈る	安政三年正月廿一日	三八三
二七六	河野數馬に與ふ(カ)	三月十二日	三八四
二七七	山縣半藏に與ふ	三月十六日	三八四
二七八	杉梅太郎及松陰より小田村伊之助に與ふ	三月十六日	三八五
二七九	妻木士保を経て山縣半藏に與ふ	三月十七日	三八六
二八〇	妻木士保を経て山縣半藏に與ふ	三月廿一日	三八六
二八一	久保清太郎に與ふ	三月頃	三八七
二八二	小田村伊之助に與ふ	春	三八八

二八三×河野數馬より

安政三年四月十五日(カ) 三九一

二八四 久保清太郎に與ふ

四月十九日 三九二

二八五×小田村伊之助より

四月廿日 三九三

二八六×富永有隣より

五月七日(カ) 三九四

二八七×木原慎齋より月性に贈る

五月廿日 三九五

二八八 久保清太郎に與ふ

五月廿四日 三九六

二八九 土屋蕭海に與ふ

六月三日 三九七

二九〇 月性に與ふ

六月六日以前 三九八

二九一×月性より

六月六日 三九八

二九二 養母久満に贈る

六月十四日 三九九

二九三 久保清太郎に與ふ

七月五日 四〇〇

二九四 土屋蕭海に與ふ

七月六日 四〇一

二九五×土屋蕭海より

七月八日 四〇二

二九六 久保清太郎に與ふ

七月十九日 四〇三

二九七 梁川星巖に贈る(筈案)

七月廿四日頃 四〇四

二九八	土屋蕭海に與ふ	安政三年七月廿六日	四〇五
二九九	久保清太郎に與ふ	七月頃	四〇六
三〇〇	默霖に與ふ(草稿)	八月廿四日以前(カ)	四〇六
三〇一	×默霖より	八月廿四日(カ)	四〇七
三〇二	默霖との問答筆語	八月中下旬	四〇八
三〇三	默霖と往復	八月某日	四〇九
三〇四	×河野數馬より	八月頃	四一四
三〇五	×默霖より	八月頃(カ)	四一四
三〇六	默霖に與ふ	九月一日以前	四一九
三〇七	默霖に與ふ	九月一日	四二〇
三〇八	土屋蕭海に與ふ	九月十二日	四二三
三〇九	久保清太郎に與ふ	九月十七日	四三三
三一〇	小田村伊之助に與ふ	九月十七日	四三三
三一〇	小田村伊之助に與ふ	九月十八日	四三四
三一〇	久保清太郎に與ふ	九月十八日	四三四
三一一	久保清太郎に與ふ	九月十八日	四三四
三一二	益田彈正に贈る	九月廿七日	四三四

三一一	久保清太郎に與ふ	安政三年九月廿九日	四三五
三一二	×月性より	秋	四三六
三一二	×月性より	秋	四三六
三一三	吉村善作・河野數馬に與ふ	十月以前	四三六
三一四	×土屋蕭海より	十月四日	四三七
三一五	土屋蕭海と往復	十月九日	四三八
三一六	河野數馬に與ふ	十月十二日	四三九
三一七	×小田村伊之助より杉梅太郎に贈る	十月廿一日	四三九
三一八	小田村伊之助に與ふ	十月廿一日	四三九
三一九	月性に與ふ	十月廿一日	四三九
三二〇	中村道太郎に與ふ	十月廿二日	四三三
三二一	小田村伊之助と往復	十一月廿日	四三三
三二二	久保清太郎に與ふ	十一月廿四日	四三四
三二三	秋良敦之助に贈る	十二月十三日	四三五
三二四	増野徳民・吉田榮太郎に與ふ	十二月廿六日	四三六
三二五	秋良敦之助に贈る	十二月廿六日	四三六
三二六	秋良敦之助に贈る	十二月廿六日	四三六
三二七	秋良敦之助に贈る	十二月廿六日	四三七

三二八	月性に與ふ	安政三・四年頃	四六
三二九	某に與ふ	安政三年以後	四六
三三〇	某より	安政三年以後	四六

安政四年

三三一	久保清太郎に與ふ	安政四年正月十五日	四二
三三二	小田村伊之助に與ふ	正月廿六日	四三
三三三	久保清太郎に與ふ	正月廿六日	四三
三三四	月性に與ふ	正月廿六日	四四
三三五	益田丹下に贈る	二月一日	四六
三三六	叔父玉木文之進に贈る	三月九日(カ)	四六
三三七	久坂玄瑞に與ふ	三月十六日	四七
三三八	松田重助より	三月廿五日	四八
三三九	小田村伊之助に與ふ	四月六日	四九
三四〇	富永有隣より	四月十八日	四〇

安政四年五月廿日

三四一	土屋蕭海より	五月廿一日	四五
三四二	土屋蕭海より	五月下旬(カ)	四五
三四三	土屋蕭海より	五月廿三日	四五
三四四	月性より	閏五月上旬	四五
三四五	岸御園に與ふ(カ)	閏五月十一日	四六
三四六	岸御園より	閏五月十一日以後	四八
三四七	岸御園より	閏五月十八日	四九
三四八	山縣半藏に與ふ	閏五月廿八日	四九
三四九	月性より杉梅太郎に贈る	閏五月廿九日	四六〇
三五〇	吉田榮太郎より富永有隣に贈る(松陰の命に依り代筆)	六月六日	四六二
三五一	山縣半藏に與ふ	六月六日	四六三
三五二	富永有隣より	六月七日(カ)	四六五
三五三	富永有隣より	六月十一日(カ)	四六五
三五四	富永有隣より	六月廿一日(カ)	四六六
三五五	中村道太郎に與ふ		

三五六×岸御園より  
 三五七 中村道太郎に與ふ  
 三五八 富永有隣に與ふ  
 三五九 中村道太郎に與ふ  
 三六〇×伊藤靜齋より  
 三六一 岸御園に與ふ  
 三六二 岸御園に與ふ  
 三六三 吉田榮太郎より櫻井幸三郎に贈る(松陰)  
 三六四 岸御園に與ふ  
 三六五 吉田榮太郎に與ふ  
 三六六 月性に與ふ  
 三六七 吉田榮太郎に與ふ  
 三六八 長原武に與ふ  
 三六九 桂小五郎に與ふ  
 三七〇×吉田榮太郎より

安政四年六月晦日……………四六六  
 六月頃……………四六八  
 夏頃……………四六九  
 七月十三日……………四六九  
 七月廿六日(カ)……………四七〇  
 七月廿八日(カ)……………四七〇  
 七月廿八日頃(カ)……………四七一  
 八月三日……………四七三  
 八月四日……………四七三  
 八月十二日……………四七四  
 八月十五日……………四七四  
 八月廿八日……………四七五  
 九月二日……………四七五  
 九月二日……………四七六  
 九月六日……………四七八

三七一 伊藤靜齋に與ふ

安政四年九月上旬頃……………四七八

三七二×武田耕雲齋より秋良敦之助に贈る

十月十七日……………四七九

三七三×小國剛藏より

十月廿二日……………四八〇

三七四×伊藤靜齋より

十月廿三日……………四八〇

三七五×松浦松洞より

十月廿八日……………四八一

三七六 小田村伊之助に與ふ

十一月廿五日……………四八三

三七七×吉田榮太郎より

十一月廿六日……………四八四

三七八×木原愼齋より月性に贈る

十一月廿七日……………四八四

三七九×土屋蕭海より

十二月六日……………四八五

三八〇 叔父玉木文之進と往復

十二月十一日……………四八六

三八一×小國剛藏より

十二月十三日……………四八七

三八二×月性より

十二月廿四日……………四八八

三八三×吉田榮太郎より

十二月廿五日……………四八九

三八四×小國剛藏より

十二月廿六日……………四九〇

三八五 某に與ふ

安政四年頃……………四九一

三八六	岸御園に與ふ	安政四年頃(カ)	四九三
三八七	×岸御園より	同年頃(カ)	四九三
三八八	×岸御園より	同年頃(カ)	四九三
三八九	×岸御園より	同年頃(カ)	四九四
三九〇	×岸御園より	同年頃(カ)	四九四
三九一	×岸御園より	同年頃(カ)	四九五
三九二	×土屋蕭海より	同年頃(カ)	四九六
三九三	横山重五郎に與ふ	安政四・五年頃	四九七

嘉永二年

繁澤平左衛門に與ふ 嘉永二年十月廿八日 松陰在萩

九月念三之貴翁昨日到來難有拜誦仕候先以御勇堅被成御座候段恭賀仕候扱者先般御用達候書籍御返シ被成遣一槩  
 二致三落筆候陳ハ先頃明倫館御用所々別紙之通策問被差出勿論爰許之面々そ日限も有之事ニ付既ニ仕出仕候然處  
 在仕等ニカも心懸之面々そ追々指出様ことの御事ニ付貴君ニ及右對策被差出一度奉存候何分御引立之新政迎工藤・妻  
 亦其外雀躍ニ罷居候段萬々書外御推察可被成候先時氣御伺來翰御答勞如斯ニ御座候恐惶謹言



吉田大次郎 矩方

尙々幾回も時氣御自玉奉ニ專祈候且對策早々御調相成後便被差贈一度奉存候以上

繁澤平左衛門様

研北

別啓

策問之大主意ハ結末之整治激勵之四字ニ相範り居候様相見對策苦心之所と奉存候

(萩市安藤紀一氏藏 校合濟安)



嘉永三年

二 繁澤平左衛門に與ふ

嘉永三年三月廿八日(カ) 松陰在萩

暖氣之節彌御堅榮奉<sub>レ</sub>賀候扱者此間別紙之通授け相成候ニ付御名前致ニ付出一候差急候事ニ御乞合等も不<sub>レ</sub>得仕一候此段旁御承知可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成下一候爲<sub>レ</sub>其得<sub>レ</sub>御意一候以上

三月廿八日

吉田大次郎

繁澤平左衛門様

(萩市安藤紀一氏藏 校合濟)

三 ×叔父玉木文之進より

嘉永三年六月廿八日

玉木在奥阿武  
松陰在萩

嘉永庚戌歲奥阿武郡御代官在郡中之書(松陰筆)  
萩表暑氣いゝ、哉當境ハ涼キ處ニ至極仕合申候先以前守執も無事之由承<sub>レ</sub>之安心仕候拙者も帰萩之期今以難<sub>レ</sub>相決一罷在候間前守之儀何分宜御頼致候

此内被<sub>レ</sub>仰越<sub>レ</sub>候御狀に當ル御答

一忠藏事廿四日暮方出萩之由屋根ぬき人夫相相添廿五日六日七茶之守去藍取等之心遣仕廿七日より屋根之由此天氣相ニてハ相調申

嘉永三年

三

間哉(敷脱カ)存候間何分宜御指揮可被下候事

一 昌之事小豆大豆植付守護茶之守護迄も大半相濟候由安心之儀ニ御座候事

一 非常之儀略承り候驚人入る事ニて候

一 林梅太郎死去可憐之由被申越候処何其人柄之案し付無之平藏跡も梅と申候様覺申候へ共可被申越程之儀ニても有之之間

哉(敷脱カ)旁案し申候

一 治心氣齋主人快承之由出萩之節暇乞之間相も無之大無音其後も同断之趣宜御断之傳言致御頼候事

一 侍御史廻郡難有御事委細之儀帰萩之上可致御咄候事

一 富民難を過る之一事忠藏も申候由被申越候処此儀追々聞籍見候処當才判沿海之外ニて米商ハ一人羨無之由右ニ付貧民且夕之儲

無之者数多之儀ニ御座候処草取其外之日雇(カ)杯ニて且々も日を暮し候由之者大概米を日雇ニ貫候由ニ相聞候富民之儀羨餘分

儲ハ無之処當作方い々可有之哉と案し居其上米穀喰ひ延候様ニ之の御仰聞も有之事ニ付容易ニうり出し不仕ニても可

有之是以米商ニて無之事ニ候へ於被等ニ用意之心得ニても可有之部も御座候半存候何分詮儀六ヶ敷事御察し可被下候

只可憐貧民之事ニて候追々立寄見候処米壹升麥之三升も有之氣色ニてハ無之只日雇比其間相ニ自分之田畠耘り候位之事ニ

付彌以不作ニ相成作徳も有之之間敷候何名策有之之間敷哉と心氣をふらし候へ共用ニ乏キ拙者只出精を勤め申之外今ニて之施

爲無之様相考申候是以面談ふらるハ解兼申候現場之様子諸生ノ論ニ參り兼候儀も有之者ニて當惑仕居候事

一 蘇東波(坂カ)其外古人用意之儀御申越被下感銘致候此内以乍不及其心得ニ罷居候侍御史何より承知事ニ御座候事

是ハ私を營み候覺書

一 忠藏手明キ候ハ、ま、餘分刈取置度存候事

付り下木刈取之儀兼る彼に頼置候間い々仕吳候哉間相次第米藏共ニ申合取計仕吳候へ大仕合之事ニ付御申聞せ可被下候事

一生雲邊ニ灰燒齊有之候至極便利之者ニて調置度候間是以忠藏御申付新助ニ申合可被然候

圖

都合野竈之形高サハ四尺余り内經リ三尺餘り是等

ハ見合之事、上に丸木を渡し土にて上をぬり塞き

候事

愚按ニ後口之方に所々穴を明ヶ置可被然候事

右ハ畢竟くゞしを仕懸雨天ニ相成候もきへざる爲灰のぬまざるためニ候事場所ハ山家井土之際風呂場之後あり可被然哉と存

候御見合可被下候右之通之物ニ付火用心も宜敷候杉・佐々木之用も可相立ニ付杉に共御加勢之儀御願候も可被然哉もも催相

共ニ候ハ、隨分大キニ調置度候事生雲邊ニハ多くハ土手を便り調有之候へ共左様之場所之案し付無之候間御見合御思惟可被

下候事

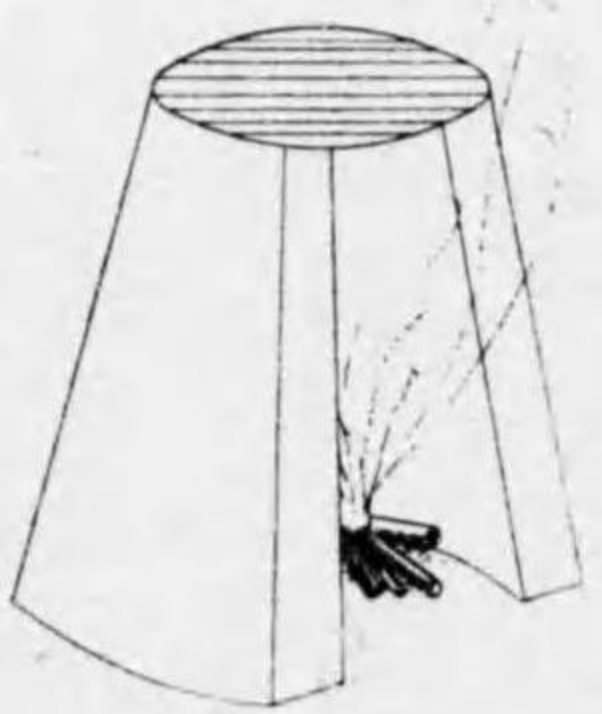
一 是等之便利之物生雲之外ニハ廻村之節も餘り見當不申在郷ニてハくゞし物表餘分有之候得共加様之心配も不仕由追々廣め度段

御申聞せ候事ニ御座候

一 僕数年農事ニ心を用ひ置候詮々今日ニて思ひ當り候縣令さる者此儀ニ練熟仕居不申候ハ勸農相勤り申間敷被ニ相考一申候其外下

役人逆も同様之事ニ御座候委細届萩之節御咄し可致候事

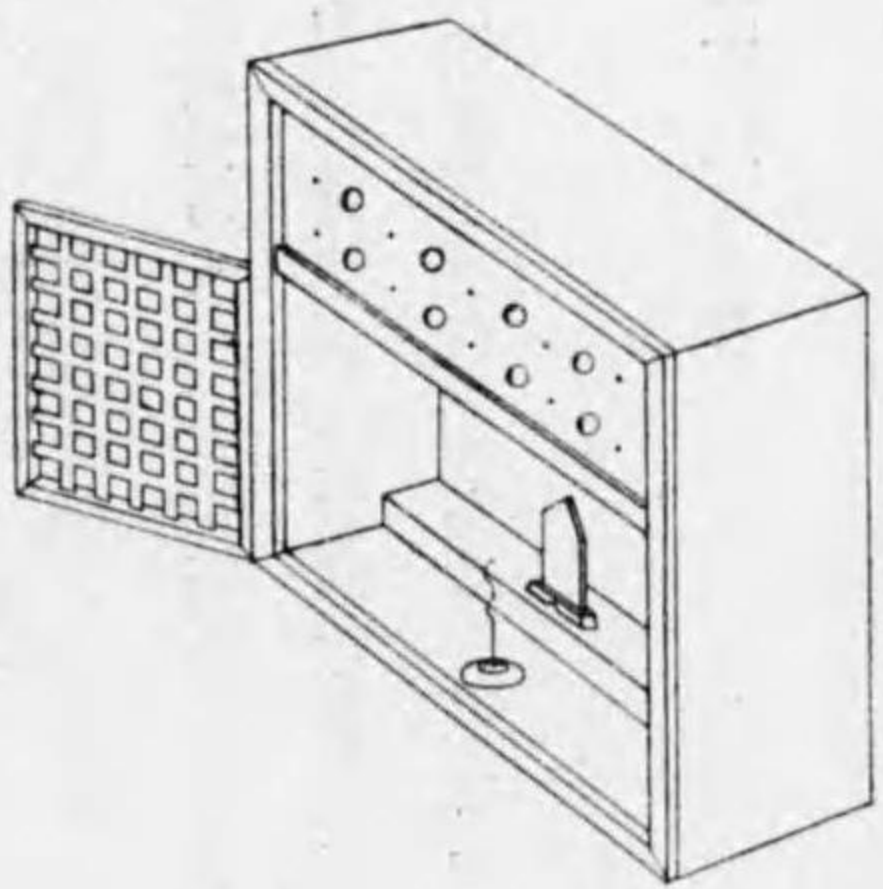
付り田畝之事ハ僕々僻ニて小器之程恥入候事御一笑可被下候事





一月に入候ハ、俸金持參可仕哉詰り能御受取置尙僕婢杯にぞ知せぬ様ニ仕ものニ御座候此段無疎事ニハ候へ共山妻に得と御申合可被下候遣拂之儀ハ万一盆前ニ歸萩不<sub>レ</sub>得仕候ハ、追可申遣存候事 是又小器御笑可被下候事

一佛壇仕調之儀年來氣ニ懸り申候間當盆迄ニ相調中間敷哉是又御心配可被下候事



圖

一幅只今有懸り之押入に出シ入且々相成候様仕調之事

一箱かほち之儀は梅檀之事

一惣廻り杉三分板かほち之上白木杉板に水玉之穴を如<sub>レ</sub>圖ぬき候事

一立、せうし兩開之事

右之通書調懸候へ共又々歸萩之上と案し<sub>ら</sub>へ仕候間御心配ニ不<sub>レ</sub>及候事

一木原・三宅・田北等に御相對之節書狀不<sub>レ</sub>得差越候趣を以御致意致<sub>レ</sub>御頼候事

付り御手當事い<sub>ら</sub>相成候哉御聞及之事も候ハ、御申越可被下候事

一同僚松原・伊藤にも右様之趣を以御致意宜致<sub>レ</sub>御頼候事

但万一右之衆中拙宅に參り候ハ、山妻かも其挨拶仕候様御申聞可被下候事

右之外爲<sub>レ</sub>指儀も無<sub>レ</sub>之何分御氣分御用心專一ニ存候晩涼之節共ニハ御運動可<sub>レ</sub>然存候山妻・直之進にも氣分用心之儀得と御申聞可被<sub>レ</sub>下候僕表明日かこ又々御普請所其外に可<sub>レ</sub>罷出<sub>レ</sub>存候尤勘場日々相通と可<sub>レ</sub>申存候親類内に無音之段宜敷御断山妻かも挨拶仕候様御申聞せ之事

右繁多中不<sub>レ</sub>入事書綴前後大混雜御推覽可被下候以上

六月廿八日調置

文之進

尙々幾えも御用心專一ニ存申候以上

大次郎様

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟藏)

四 ×山縣半藏より草場佐助(佩川)に贈る

嘉永三年八月廿四日

山縣在萩  
草場在佐賀

一翰呈上仕候日ニ増秋冷ニ赴候處老先生益御康健可被<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>御坐<sub>レ</sub>と欣喜之至ニ奉<sub>レ</sub>存候今春 貴地罷出候節と大ニ御世話被<sub>レ</sub>成遣御丁寧之段千々萬々難<sub>レ</sub>有奉<sub>レ</sub>存候其後早速御禮旁奉<sub>レ</sub>伺<sub>レ</sub>御氣色<sub>レ</sub>之處遠路爲便無<sub>レ</sub>之贖禮ニ打過其節拜受之御揮草貳葉徒朝暮欣仰仕候而已ニ御坐候

老先生江海之景萬々御容恕被<sub>レ</sub>成下<sub>レ</sub>度奉<sub>レ</sub>祈候家翁かも御禮旁鯉魚呈上仕答<sub>レ</sub>候へ共今年ハ既ニ七旬ニ罷成且事務繁多ニ罷居候故萬々御無禮申上候間其段ハ小生カ宜敷申上吳候様暮々申聞せ候先ハ御禮且御何旁如<sub>レ</sub>此ニ御坐候間時下千万玉體御自齊專要之御義と奉<sub>レ</sub>存候恐々謹言

嘉永三年

八月廿四日

草場佐助様 兩丈

二陳幾重も玉體御自萬千方是祈候此度弊邑之友生吉田大二郎と申者兵學修業旁 貴國邊龍越候處老先生へ拜謁仕度相願候間何卒  
宜様御頼申上候以上

山縣半藏(花押)

(東京市柴田正光氏藏 校合濟齋)

五 山鹿萬介に贈る

嘉永三年九月十八日

松陰山鹿  
在平戸

山康家の支流を汲むの長陽吉田矩方窃は先生を奉慕百里門下より來拜仕候旨趣を矩方が遠祖の浪人衆にて和漢流の  
兵學を唱罷在候處元祖友之允と申ものに至り藩の兵學師より召出され君命にても候哉東武に上り藤介先生諱高基は從ひ  
武教全書一部且城築秘事七條侍用武功秘事四條并大星傳三重傳其他附屬の書數部迄傳り歸り藩中にて其傳茂廣を候由  
爾後箕裘の業追々精研仕盡く之處不幸にして早世打續記僅々百年之間世次七八を後経報本之禮贖して豺獺は愧るの  
こゝらに流儀授受も書まのこ残り何共無覺束殊は矩方義六歳にて父茂喪ひ父執之行なる流儀は老たる人より便り相學  
候得とも稟性陋劣不才未得其要領間臆度あるも微を取る所無之是は於て 執事之門下より遊び大は本源茂究度存付  
候固其任は堪ざるをりらも本分之職逃るゝに所を遠く元祖を継度微志に候間伏祈執事藤介先生之意を体認被為在  
下学矩方如きもの忝も其道に親むるをらし免給は、矩方感佩如何ぞ哉伏て下情を左右に布く

山康萬介先生

執事

吉田矩方頓首再拜敬白

(第七卷口繪及び西遊日記九月十八日の條参照)

(長崎縣山鹿高三氏藏 寫眞校合濟齋)

六

×天野勇衛より

嘉永三年九月廿二日

天野松陰  
在平戸

口上

愈御安靜可被成御起居奉慕賀候然者山鹿万助方より申來候病氣全快被致候故講釋申上候に就る者九ツ時万助宅に御出被成  
候様との事ニ御座候芳三郎九ツ少前御誘引可申上二管ニ御座候此段得拜顔委曲可申上二管ニ候得共折節御出違故誠二年略義  
以紙面申上置候 以上

九月廿二日

(外封) 吉田大次郎様 申上置

天野勇衛

(本文の前にある) 二白委細之義を芳三郎ニ御閉合せ可被成候

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟齋)

(西遊日記九月廿二日の條参照)

七

×天野勇衛より

嘉永三年九月廿八日

天野松陰  
在平戸

口演

嘉永三年

九

連日不勝天氣御座候處愈御安奉奉<sub>ニ</sub>恭賀<sub>ニ</sub>候然<sub>レ</sub>昨日<sub>ニ</sub>遠隔之處御來臨被<sub>レ</sub>下大慶仕候其初廿九日<sub>ニ</sub>御光臨願置候得共指支出來八ツ時ならでは歸宅不<sub>レ</sub>仕候右刻限よりハ何モ支筋無<sub>ニ</sub>御座<sub>ニ</sub>候右之段申上置度草々不宣

九月廿八日

尙々亂筆不埒御宥恕可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候 以上

(外封)  
吉田大次郎様 指上置

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟齋)

天野勇衛

八

×天野勇衛より 嘉永三年十月二日

天野・松陰  
在平戸

賢章拜聞相違候處如<sub>ニ</sub>貴諭<sub>ニ</sub>快晴奉<sub>ニ</sub>恭賀<sub>ニ</sub>候然者昨日者參上得<sub>ニ</sub>御高話<sub>ニ</sub>忝、乍<sub>レ</sub>然折節御不快中長居却<sub>ル</sub>御養生相妨共ハ不<sub>レ</sub>致歟<sub>ニ</sub>掛念仕候扱今晩先生宅順講<sub>ニ</sub>御出無<sub>レ</sub>之段執事<sub>ニ</sub>申込候儀被<sub>ニ</sub>仰聞<sub>ニ</sub>致<sub>ニ</sub>敬諾<sub>ニ</sub>候隨分御容体可<sub>レ</sub>致<sub>ニ</sub>演述<sub>ニ</sub>候間御休意可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候且御旅先之病者御養生專一<sub>ニ</sub>奉<sub>レ</sub>存候何期<sub>ニ</sub>拜願<sub>ニ</sub>之時<sub>ニ</sub>御細話可<sub>ニ</sub>申上<sub>ニ</sub>候右指急貴報迄如<sub>レ</sub>斯御座候 不盡

十月二日

尙々指急走毫之段御宥恕且御養生奉<sub>レ</sub>祈候

(外封)  
吉田大次郎様 貴答机下

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟齋)

天野勇衛

九

×叔父玉木文之進より

嘉永三年十月五日

玉木在萩  
松陰在平戸

四五日前崎陽<sub>ノ</sub>飛脚到着之由光永織江傳言承<sub>レ</sub>之清水新三郎一昨三日之夜帰着間違候<sub>ル</sub>未相對不<sub>レ</sub>仕候得共御無異<sub>ニ</sub>て過ル九月十一日平戸<sub>ニ</sub>御出之由承<sub>レ</sub>之今日於<sub>ニ</sub>御城<sub>ニ</sub>道家龍<sub>ニ</sub>相對久松之手代西田守輔此内長崎<sub>ノ</sub>罷越居候由<sub>ニ</sub>て委細之御様子承<sub>レ</sub>之安心仕候守輔明後七日罷歸候由宜便を得呈<sub>ニ</sub>寸楮<sub>ニ</sub>候

一當地<sub>ニ</sub>て杉其外孰も御多祥被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>在候御安意候様存候事

一平戸<sub>ノ</sub>又々長崎<sub>ニ</sub>御歸<sub>リ</sub>郡司氏<sub>ニ</sub>御同伴列国御遊歴之御申合<sub>ル</sub>之様道家氏<sub>ノ</sub>承<sub>レ</sub>之国風旁御歸之節御咄可<sub>レ</sub>承<sub>レ</sub>待兼居候事

一先達<sub>ニ</sub>新介被<sub>ニ</sub>差返<sub>ニ</sub>其節も既<sub>ニ</sub>御無事之段承<sub>レ</sub>之候処馬関<sub>ニ</sub>て御風邪御滯留<sub>ニ</sub>て有<sub>レ</sub>之候由已後<sub>ニ</sub>共風邪等之節<sub>ニ</sub>手輕き事<sub>ニ</sub>ても其所之良醫<sub>ニ</sub>御見せ早速<sub>ニ</sub>御保養第一之段申も疎<sub>ニ</sub>御座候事

一新介當地歸着只様取<sub>ニ</sub>九月十七日<sub>ニ</sub>罷歸申候是も九州<sub>ノ</sub>相煩候由<sub>ニ</sub>て下ノ関<sub>ニ</sub>三夜止宿仕候由申分<sub>ニ</sub>御座候事

一九国表殊之外風水災<sub>ニ</sub>て凶荒之由新介見受之處承<sub>リ</sub>候御旅中御難澁共<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>之哉<sub>ニ</sub>案し申候御懐金乏しく共<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>之哉御遣ひ果し候<sub>ル</sub>と歸路之御入目い<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之哉日々御入目も不<sub>レ</sub>存事<sub>ニ</sub>候へとも年内中之<sub>ニ</sub>氣遣敷相考候無<sub>ニ</sub>御疎<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>ハ候へ共御勘考候様存候事

一御国凶荒噂共御承知候哉當節所国米黒四合八夕白四合四夕之由大豆七合小豆六合五夕蕎麥八合其外食物<sub>ニ</sub>相成分ハ日々高直<sub>ニ</sub>相成候由不<sub>レ</sub>安事<sub>ニ</sub>候諸士中總<sub>ル</sub>大儉約仕遊民等大困究之由噂仕候事

一井上<sub>ノ</sub>與先月十日退役嫡壯太事明木<sub>ニ</sub>て酒狂之体<sub>ニ</sub>付<sub>ル</sub>先達<sub>ニ</sub>之御断<sub>ニ</sub>直様引籠候事

一壯太等同道、藏田松・佐々木久米・湯淺十郎嫡子<sub>ノ</sub>上四人此節逼塞被<sub>ニ</sub>仰付<sub>ニ</sub>候事

一井與退役<sub>ニ</sub>誠<sub>ニ</sub>殘多<sub>ニ</sub>御座候事

- 一海防事例之通不<sub>レ</sub>ナミ之事
- 一字野久米三島檢使役ニ相成候事
- 一清水新三郎武庫頭人ニ轉役明日之被<sub>レ</sub>仰渡<sub>レ</sub>と相聞候事
- 一添役山中往來之由

一先達<sub>レ</sub>井與代リ蠅川四、同人代リ三須市、前田岩も吉田才判縣令被<sub>レ</sub>相成候事清新ハ右之後役<sub>ニ</sub>

是<sub>ガ</sub>不<sub>レ</sub>入事ハ除ク

一東潜夫論見度事ニ御座候事

一公臺ニ及兵學會御催被<sub>レ</sub>遊度 御思召有<sub>レ</sub>之哉之様承及候御手前御掃菽の上と歟是以慎成<sub>レ</sub>噂ニハ無<sub>レ</sub>之候へ共略耳ニふき候事も有

レ之候間何分兵學御研究專一ニ存候極秘事<sub>ニ</sub>

一公臺來春之 御出府御連登之噂も有<sub>レ</sub>之候勿論取<sub>レ</sub>苗候儀ニ無<sub>レ</sub>之事

一此度之宜便杉に申越へき暇も無<sub>レ</sub>之明日梅太に相對共仕候ハ、可<sub>ニ</sub>申聞<sub>ニ</sub>存候間違候ハ、杉よりハ書狀參る間敷被<sub>レ</sub>存候事

一便り少き所ニ付最早書狀ハ差越申間敷ニ付隨分御用心候<sub>ル</sub>御修行肝要存候餘り嚴寒ニ不<sub>ニ</sub>差向<sub>ニ</sub>内御掃郷待人候乍<sub>レ</sub>爾何も行懸り有

レ之事ニ付御隙取候<sub>ル</sub>も格別御氣遣ハ不<sub>レ</sub>仕候間少も御案し被<sub>レ</sub>下間敷候事

一家内尙佐々小<sub>ガ</sub>宜敷致意之儀相頼申候佐小不斷苗宿前日之通ニ御座候事

一幾重も御用心專一存申候恐惶謹言

十月五日之夜認

文之進(花押)

大次郎様

不<sub>レ</sub>入事前後不次第平安之二字御覽にて直様御火中位之事ニ御座候以上

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟囑)

一〇 × 豐嶋權平より

嘉永三年十月五日

豐島<sub>・</sub>松陰  
在平戸

拜誦仕候少々御風邪之由折角御保養奉<sub>レ</sub>祈候必讀書爲<sub>ニ</sub>御持<sub>レ</sub>慥<sub>ニ</sub>落手、跡五册御吏ニ相渡指出申候取込早々御略答御海恕可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候

以上

十月五日

(外封)  
吉田大次郎様 奉後書物五册添

豐嶋權平

(西遊日記十月五日の條參照)

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟囑)

一一 兄杉梅太郎に贈る

嘉永三年十月十三日

松陰在平戸  
杉在藏

寸翰拜啓仕候寒氣次第ニ相催候へ共椿靈萱瑞欣悅仕候尙兄弟親戚朋友孰<sub>モ</sub>別條有<sub>ニ</sub>御座<sub>ニ</sub>間敷奉<sub>レ</sub>存候 小弟頑鈍碌々仍  
レ舊<sub>ル</sub>英氣勃々然<sub>ニ</sub>御座候此節も近時海國必讀書とやら申<sub>レ</sub>の卒業仕候一齋愛日樓文詩杯時<sub>ヲ</sub>してハ讀申候乍<sub>レ</sub>憚尊慮  
安被<sub>ニ</sub>思召<sub>ニ</sub>候様奉<sub>レ</sub>祈候扱別封御内用懸り<sub>ハ</sub>之一通ハ初の約束<sub>ガ</sub>日數延候ニ付<sub>ル</sub>之書狀ニ御座候玉木丈人<sub>ノ</sub>方<sub>ニ</sub>なり  
共御頼奉<sub>レ</sub>冀候山鹿<sub>ノ</sub>も毎度參り候間平戸人<sub>ノ</sub>武教全書を讀<sub>ハ</sub>扱も精密なるものに御座候來月上旬之頃長崎<sub>ニ</sub>出<sub>テ</sub>郡  
司覺<sub>レ</sub>同道<sub>ニ</sub>る肥後<sub>ニ</sub>廻り清正公<sub>ニ</sub>參り爲<sub>ニ</sub>弟敏<sub>ニ</sub>物言事共祈り候<sub>ル</sub>歸り候積り<sub>ニ</sub>御座候併此儀<sub>ハ</sub>追<sub>ル</sub>又々可<sub>ニ</sub>申上<sub>ニ</sub>  
と奉<sub>レ</sub>存候論語會決<sub>ル</sub>盛<sub>ニ</sub>なる事<sub>ニ</sub>候半と奉<sub>レ</sub>察候此度ハ玉木丈人<sub>ハ</sub>ハ書翰不<sub>ニ</sub>差出<sub>ニ</sub>候間可<sub>レ</sub>然被<sub>ニ</sub>仰上<sub>ニ</sub>候様奉<sub>レ</sub>頼候

申も疎に奉<sub>レ</sub>存候へ共温清定省<sub>（妹）</sub>壽等迄へも可<sub>レ</sub>然御致聲奉<sub>ニ</sub>冀上<sub>一</sub>候恐惶謹言

十月十二夜認

大次郎

家大兄座下

（萩市松陰神社藏 校合濟慶）

一一 ×工藤半右衛門より 嘉永三年十月十五日

工藤在江戸  
松陰在平戸

乱筆高許

九月二日御飛脚參着御投書到來拜見仕候彌御清榮被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>入奉<sub>ニ</sub>欣然候小弟且々之仕<sub>（不明）</sub>御坐候其後鎮西御渡海之御様子承<sub>レ</sub>之連々御輝名思召立御許命有<sub>レ</sub>之嘸々御満悦之段乍<sub>レ</sub>恐奉<sub>ニ</sub>御同慶候被<sub>ニ</sub>仰越候廉々内傳書藏板差越候歳内御帰萩之程難<sub>レ</sub>計奉<sub>レ</sub>察候へ共幸便故差上置候海外新話之儀ハ都下<sub>ニ</sub>ハ絶板之命有<sub>レ</sub>之候旨趣ハ釣人丹後<sub>（田邊侯御用人俗稱官許無<sub>レ</sub>之内上梓之罪ニ依て主家<sub>ニ</sub>禁獄紛<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>之候素水先生之宿所と海賊橋近所故先生も能存<sub>ニ</sub>候事ニ御坐候姓名承<sub>レ</sub>ら只今失念其余之廉々來春帰宿御直答可<sub>ニ</sub>申上<sub>一</sub>候書餘御帰萩之御様子承<sub>レ</sub>候上可<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>貴意候頓首</sub>

十月十五日

半右衛門

二陳寒冷中御氣分御大事ニ奉<sub>レ</sub>存候

先生様 玉机下

（東京市吉田茂子氏藏 校合濟慶）

一三 ×豊嶋權平より 嘉永三年十一月初日

豊島・松陰  
在平戸

口仲

過刻<sub>ニ</sub>草々之仕合御坐候然<sub>ニ</sub>別紙式通相達候<sub>ニ</sub>付爲<sub>レ</sub>持上<sub>ケ</sub>候御落手可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候此段申上度急キ勿々閣筆候 已上

十一月初日

（外封）  
浦ノ町紙屋<sub>ニ</sub>在

吉田大次郎様 書狀二通在中

豊嶋權平

（東京市吉田茂子氏藏 校合濟慶）

一四 ×豊嶋權平より 嘉永三年十一月四日

豊島・松陰  
在平戸

先刻<sub>ニ</sub>拜顔大慶仕候其節相願候道家氏并鉄砲師へ之書爲<sub>レ</sub>持指出候間乍<sub>レ</sub>憚宜奉<sub>ニ</sub>頼上<sub>一</sub>候且拜借之地球圖返璧仕御落手可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候此天氣合<sub>ニ</sub>候ハ、多分明日<sub>ニ</sub>御帰帆<sub>ニ</sub>相成可<sub>レ</sub>申次第寒氣之候<sub>ニ</sub>も相成候間萬々御自玉速<sub>ニ</sub>御帰郷之程奉<sub>レ</sub>祈候早々不悉

十一月四日

（外封）  
吉田大次郎様 風呂敷包相添

豊嶋權平

（東京市吉田茂子氏藏 校合濟慶）

一五 ×葉山佐内より 嘉永三年十一月五日

葉山・松陰  
在平戸

寒冷相増候處愈御安泰可<sub>レ</sub>成<sub>ニ</sub>御帰裝<sub>一</sub>奉<sub>ニ</sub>恭拵<sub>一</sub>候昨日入<sub>ニ</sub>貴覽<sub>一</sub>置候拙作録上仕候御笑正奉<sub>レ</sub>希候外<sub>ニ</sub>一齋子墨蹟二葉敬呈仕候外<sub>ニ</sub>一小品附上仕候右ハ國産之品<sub>ニ</sub>御途中も輕<sub>ク</sub>爲<sub>ニ</sub>御持<sub>一</sub>御都合可<sub>レ</sub>宜相考候御叱留奉<sub>レ</sub>希候且又毎度被<sub>レ</sub>命候尊軸へ拙作を相汚候義甚以

恐懼仕候得共遠路御携之上深く被<sub>レ</sub>囑候義峻拒仕候も如何敷熟覽仕候へハ他日御再装之節御取離しニ及可<sub>二</sub>相成<sub>一</sub>御仕立故御一笑迄ニ  
録上仕候印文見誤リ相用候得共其儘仕置候外無<sub>レ</sub>之却る敬之意ニ相叶可<sub>レ</sub>申哉と奉<sub>レ</sub>存候今朝御出船前參上御暇乞申上候合ニ御坐候  
得共先此段草々拜啓仕候頓首

十一月五日

(西遊日記十一月五日の條參照)

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟齋)

一六

×後藤又次郎より

嘉永三年十一月十日

後藤・松陰  
在長崎

昨日<sub>レ</sub>御責臨被<sub>レ</sub>下候得とも少々取混中御茶さへもまゝとさし上<sub>レ</sub>申まかし一面如<sub>レ</sub>舊御高話拜聽本懷之至奉<sub>レ</sub>存候今日御閑暇ニ被<sub>レ</sub>  
成<sub>二</sub>御座<sub>一</sub>候ハ、七ツ頃より御枉顧被<sub>レ</sub>下度奉<sub>レ</sub>待候餘<sub>二</sub>拜顔<sub>一</sub>萬々頓首

十一月十日

邊防摘案其外御携之珍本不<sub>レ</sub>苦候ハ、此奴ニ<sub>二</sub>拜借<sub>一</sub>被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>度候

中村忠亮君宅ニ

吉田大次郎様

後藤又次郎

(西遊日記十一月十日の條參照)

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟齋)

一七

×後藤又次郎より

嘉永三年十一月廿八日

後藤・松陰  
在長崎

過刻<sub>二</sub>御責臨被<sub>一</sub>下候處草卒之御事奉<sub>レ</sub>存候相願置候<sub>(藤田原玄周)</sub>田原君へ之一封少し手太キ品奉<sub>二</sub>恐入<sub>一</sub>候得共御都合よろ敷候ハ、御届被<sub>レ</sub>下度爲  
レ持さし上申候邊備摘案古賀封事いづも寛々拜借以<sub>二</sub>御陰<sub>一</sub>發蒙不<sub>レ</sub>少完壁仕候間御落手可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候田中生へ御逢被<sub>レ</sub>成度趣一書認候  
故附上誠ニ度々之御枉顧御高論承り本懷此事御座候へ共いづも殺風景不堪<sub>二</sub>愧汗<sub>一</sub>一別千里風霜御自愛奉<sub>レ</sub>祈候いづも御寓居拜趨萬々  
可<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>候得ともまづハ右品々さし上致度 草々不<sub>二</sub>申盡<sub>一</sub>頓首

霜月廿八日

外封  
吉田大次郎様

後藤又次郎

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟齋)

一八

×生駒勝助より

嘉永三年十二月七日

生駒・松陰  
在鳴原

此間ハ初<sub>二</sub>拜<sub>一</sub>尊顔<sub>二</sub>難<sub>一</sub>有奉<sub>レ</sub>存候就<sub>二</sub>一昨夕<sub>一</sub>御書面ニ<sub>二</sub>御旅館<sub>一</sub>に可<sub>二</sub>罷出<sub>一</sub>之旨ニ御坐候處折惡出違罷在御請不<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>不本意之至  
汗顔之仕合ニ御坐候乍<sub>二</sub>延引<sub>一</sub>昨朝喜左衛門<sub>(豐島)</sub>に御模様尋遣候處温泉山御登之思召最早定<sub>二</sub>御登山<sub>一</sub>之跡申候ニ付差扣へ罷在候嘸々  
御疲勞奉<sub>二</sub>推察<sub>一</sub>候私義昨今風邪氣ニ<sub>二</sub>難<sub>一</sub>澁仕候<sub>(遠カ)</sub>逗留中何之風情も不<sub>レ</sub>仕旁不實之至御用捨被<sub>二</sub>下玉<sub>一</sub>候様奉<sub>レ</sub>希候右<sub>二</sub>御報迄<sub>一</sub>文略仕候  
不具

十二月七日

吉田先生 机下

生駒勝助拜

(西遊日記十二月四・五・六・七日の條參照)

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟齋)

一九

×池部啓太より 嘉永三年十二月十一日

池部・松陰  
在藤本

彌御平安奉<sub>レ</sub>賀候就<sub>テ</sub>昨日<sub>ニ</sub>御出被<sub>レ</sub>下忝<sub>ク</sub>奉<sub>レ</sub>存候併初<sub>ル</sub>之御出何<sub>キ</sub>御構不<sub>レ</sub>申候早々儀<sub>ニ</sub>奉<sub>レ</sub>存候扱御噺申置候宮部罪藏今朝差支  
無<sub>ニ</sub>御座<sub>ニ</sub>候間御入來相待居候由<sub>ニ</sub>此<sub>カ</sub>僕出遣候間則御旅宿<sub>ニ</sub>上申候間右之者御案内可<sub>レ</sub>申候間御出浮可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候右之段迄早略仕候已上

十二月十一日

(外封)

三丁目湊屋<sub>ニ</sub>在

吉田大次郎様

池部啓太

(西遊日記十二月九・十・十一日の條参照)

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟)

二〇

×十時喜兵衛より 嘉永三年十二月廿五日

十時・松陰  
在柳川

花管拜見仕候嚴寒之節<sub>ニ</sub>御坐候得共彌御萬福昨夜當地<sub>ニ</sub>御越御坐候由奉<sub>ニ</sub>欣喜<sub>ニ</sub>候如<sub>ニ</sub>貴命<sub>ニ</sub>過日<sub>ハ</sub>於<sub>ニ</sub>崎陽<sub>ニ</sub>初<sub>ル</sub>接<sub>ニ</sub>風眉<sub>ニ</sub>論談未<sub>レ</sub>深  
早々及<sub>ニ</sub>御離別<sub>ニ</sub>残念奉<sub>レ</sub>存候其末當地<sub>ニ</sub>御越御坐候処小生未<sub>レ</sub>歸郷不<sub>レ</sub>仕候<sub>ニ</sub>付石橋・町野<sub>ニ</sub>も一兩度御面會御坐候得共其御風邪<sub>ニ</sub>在  
寛々御談話も被<sub>レ</sub>成かね候由扱<sub>カ</sub>生<sub>カ</sub>狀通<sub>ニ</sub>今晝<sub>ハ</sub>當地御發足之由被<sub>レ</sub>御早々之御時<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>小生も歸後官事多く御發足前拜顔も不<sub>ニ</sub>相  
任<sub>ニ</sub>甚<sub>ニ</sub>以残念之至奉<sub>レ</sub>存候併如<sub>ニ</sub>貴命<sub>ニ</sub>御儀も御坐候<sub>ハ</sub>又々把袂高談仕度其迄<sub>ハ</sub>追々以<sub>ニ</sub>書信<sub>ニ</sub>相伺可<sub>レ</sub>申候折節甚取紛亂筆麤報御高免  
可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候時分寒威之節御旅行御自愛專<sub>ニ</sub>奉<sub>レ</sub>頼候且又高作拜見仕候御旅情想像仕候 頓首拜

巳刻

(西遊日記十一月廿三廿四日及十二月十四・十八十九・廿四・廿五日の條参照)

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟)

嘉永四年

一一一 ×葉山佐内より 嘉永四年正月五日

葉山在平戸  
松陰在萩松本

兩翰拜啓先以新年之御慶遠近一般并賀無量奉<sub>レ</sub>存候餘寒強御坐候處彌御安泰可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>御超歳<sub>一</sub>日出度御儀奉<sub>レ</sub>存候於<sub>二</sub>爰許弊舎<sub>一</sub>大小無<sub>レ</sub>恙加<sub>二</sub>高齡<sub>一</sub>申候乍<sub>レ</sub>憚御消念被<sub>二</sub>成下<sub>一</sub>度候誠<sub>二</sub>去冬<sub>一</sub>遠路被<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>枉<sub>一</sub>玉趾<sub>一</sub>御滯留中<sub>二</sub>御懇篤被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>感幸不<sub>レ</sub>齊乍<sub>レ</sub>去邊鄙寒郷萬不<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>意失敬相盡恐懼遺憾交々深御坐候御着時後<sub>二</sub>早速御芳翰も被<sub>二</sub>成下<sub>一</sub>難<sub>レ</sub>有拜見仕候御船中御都合宜敷御早着之由安心仕候爾後小册御返却被<sub>二</sub>成下<sub>一</sub>憾<sub>二</sub>ニ落手仕候尊體々々御丁寧被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>難<sub>レ</sub>有敬承仕候彼地方熊本等に<sub>二</sub>表御經歷被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>在候由御壯遊之御事御羨敷奉<sub>レ</sub>存候名山大川等<sub>二</sub>御英氣を被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>養候<sub>一</sub>御家學之御爲彼是恐并仕候返々<sub>二</sub>表弊藩御訪尋之儀何之御益<sub>一</sub>も相成申間敷老輩<sub>二</sub>表物故後<sub>一</sub>の遺憾此事<sub>二</sub>御坐候元來其人ハ在不在難<sub>レ</sub>斗候故書留秘記等<sub>一</sub>の<sub>二</sub>ニ托<sub>一</sub>し有<sub>レ</sub>之候由其秘記も深淺其品も有<sub>レ</sub>之候由之處暫時之御事<sub>二</sub>御殘多奉<sub>レ</sub>存候將又奉<sub>レ</sub>送候小詩<sub>一</sub>亂<sub>二</sub>詞相成居候由右<sub>一</sub>御出立前日朝<sub>二</sub>草卒相綴<sub>一</sub>詞書等も改不<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>失誤汗背仕候何必辛勤<sub>一</sub>叩<sub>二</sub>我藩<sub>一</sub>と相認直し可<sub>二</sub>指上<sub>一</sub>哉とも奉<sub>レ</sub>存候得共認直候迄も無<sub>レ</sub>之其儘御燒却被<sub>レ</sub>下候様奉<sub>レ</sub>煩候光陰迅速御別後平光一新不<sub>レ</sub>勝<sub>レ</sub>想儀候御近狀奉<sub>レ</sub>承知<sub>二</sub>度年頭御祝詞旁御責臨中御親話等之御厚禮申上度奉<sub>レ</sub>呈<sub>二</sub>兩楮<sub>一</sub>候萬期<sub>二</sub>後喜之時<sub>一</sub>候恐惶謹言

正月初五

葉山佐内高行(花押)

吉田大次郎様 御侍員

猶以春寒料峭隨分御自玉專要奉<sub>レ</sub>祈候自然爰許相應之御用向も被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>在候ハ、無<sub>レ</sub>御遠慮<sub>一</sub>被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>候様奉<sub>レ</sub>存候首春慶禮間多冗乱筆御高免奉<sub>レ</sub>願候以上

嘉永四年

一一一



（原本には本文の前にある）  
三百兩稿之御高評等被<sub>レ</sub>成下<sub>二</sub>御別後毎々取出し拜讀仕拜接<sub>二</sub>代へ幾久敷珍饈仕候爾來文詩廢棄仕候へ共少々宛ハ草稿出來候<sub>二</sub>付寫呈仕度候處今度ハ届兼赤間關伊藤氏迄草稿之儘一篇遣し置申候轉致被<sub>レ</sub>致候ハ、御心付之處無<sub>レ</sub>御遠慮被<sub>レ</sub>仰示<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>下候様奉<sub>レ</sub>頼上<sub>二</sub>候

御青年之御一知己を得候<sub>レ</sub>老後之大幸と毎々親友共へも申聞候義ニ御坐候萬後鴻可<sub>二</sub>申上<sub>二</sub>候草々不乙

（東京市吉田茂子氏藏 校合濟廣）

二三 ×山田亦介より

嘉永四年三月（カ）

山田・松陰  
在裁

凡有<sub>二</sub>軍旅之寄<sub>二</sub>者、誠能儲<sub>二</sub>蓄於平時、教<sub>二</sub>演於無事、更能因<sub>レ</sub>時因<sub>レ</sub>地、因<sub>レ</sub>我因<sub>レ</sub>人、因<sub>レ</sub>衆因<sub>レ</sub>寡、因<sub>レ</sub>動因<sub>レ</sub>靜、險<sub>レ</sub>勢短<sub>レ</sub>節、閭闔張弛、實々虚々、端倪莫測、然後攻<sub>二</sub>人之守<sub>一</sub>、々<sub>二</sub>人之攻<sub>一</sub>、振<sub>二</sub>揚國家<sub>一</sub>、神武保<sub>二</sub>衛邊庭蒼赤<sub>一</sub>、是又在<sub>二</sub>大人長子<sub>一</sub>、爲<sub>レ</sub>國忠、猷<sub>二</sub>用兵方略<sub>一</sub>何如<sub>レ</sub>乎、

源公章（印）

（東京市吉田茂子氏藏 校合濟廣）

二三 ×山田宇右衛門より

嘉永四年三月

山田・松陰  
在裁

後漢光武謂<sub>二</sub>耿弇<sub>一</sub>曰、將軍前在<sub>二</sub>南陽<sub>一</sub>建<sub>二</sub>大策<sub>一</sub>、以爲<sub>レ</sub>落々難<sub>レ</sub>合、有志者事竟成、耿弇者戰國之豪傑也、故以下爲<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>除<sub>二</sub>殘賊<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>志、固其宜矣、先生欲<sub>レ</sub>發<sub>二</sub>孫吳之蘊<sub>一</sub>、窮<sub>二</sub>韜鈴之奧<sub>一</sub>、而生<sub>二</sub>於盛治之時<sub>一</sub>、則其立<sub>二</sub>志果何如也、范希文曰、居<sub>二</sub>廟堂之高<sub>一</sub>、則憂<sub>二</sub>其民<sub>一</sub>、

處<sub>二</sub>江湖之遠<sub>一</sub>、則憂<sub>二</sub>其君<sub>一</sub>、憂<sub>一</sub>也、而所<sub>レ</sub>憂<sub>レ</sub>不同者、其所<sub>レ</sub>處<sub>レ</sub>異也、蓋賢人君子、立志之遠大、不<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>出處窮達<sub>一</sub>而變<sub>レ</sub>也如此、因<sub>レ</sub>是言<sub>レ</sub>之、則先生之事、雖<sub>レ</sub>與<sub>二</sub>耿弇<sub>一</sub>異、而先生之志、豈謂<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>與<sub>二</sub>耿弇<sub>一</sub>同<sub>レ</sub>乎、然使<sub>二</sub>先生當<sub>二</sub>光武之時<sub>一</sub>、則得<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>除<sub>二</sub>殘賊<sub>一</sub>、以垂<sub>二</sub>功名於竹帛<sub>一</sub>、猶<sub>レ</sub>耿弇<sub>レ</sub>否、未<sub>レ</sub>可知也、然使<sub>二</sub>耿弇<sub>レ</sub>當<sub>二</sub>今之時<sub>一</sub>、則不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>論<sub>レ</sub>歷代之成敗<sub>一</sub>、議<sub>二</sub>古人之得失<sub>一</sub>、以泄<sub>二</sub>其所<sub>レ</sub>蘊蓄<sub>一</sub>、亦猶<sub>二</sub>先生<sub>一</sub>耳、故事有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>同、而志無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>同、夫事有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>同者、時之異也、志無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>同者、道之同也、時者無<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>之如<sub>レ</sub>、而道者不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>盡也、當<sub>二</sub>今之時<sub>一</sub>、曰精<sub>二</sub>兵士<sub>一</sub>、曰利<sub>二</sub>器械<sub>一</sub>、曰便<sub>二</sub>調發<sub>一</sub>、曰習<sub>二</sub>分合<sub>一</sub>、俗吏腐儒、以爲<sub>二</sub>迂濶<sub>一</sub>、而置<sub>二</sub>之度外<sub>一</sub>、彼其志在<sub>二</sub>飽暖之間<sub>一</sub>者、固不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>議也、司馬法曰、天下雖<sub>レ</sub>安、忘<sub>レ</sub>戰必危、孟軻氏曰、無<sub>二</sub>敵國外患<sub>一</sub>者國常亡、然則當<sub>二</sub>今之時<sub>一</sub>談<sub>二</sub>韜鈴<sub>一</sub>、所謂盡<sub>レ</sub>道者也、近年外夷猖獗、竊抱<sub>二</sub>覬覦之心<sub>一</sub>、廟堂之上、深慮<sub>二</sub>邊防<sub>一</sub>、則以<sub>二</sub>耿弇之志<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>志、可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>迂濶<sub>一</sub>乎、先生去年之秋、遊<sub>二</sub>於鎮西<sub>一</sub>、益以發憤、今春又將<sub>レ</sub>至<sub>二</sub>於關左<sub>一</sub>、會有<sub>二</sub>公命<sub>一</sub>、遂得<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>其志<sub>一</sub>、臨<sub>レ</sub>發乃謀<sub>二</sub>於衆<sub>一</sub>曰、東都天下之要區、而人情世態、可<sub>レ</sub>觀可<sub>レ</sub>鑒、則將<sub>二</sub>潛心以求<sub>二</sub>博聞之資<sub>一</sub>邪、抑亦多讀<sub>レ</sub>書以廣<sub>二</sub>知識<sub>一</sub>邪、余謂、不<sub>レ</sub>若<sub>二</sub>多讀<sub>レ</sub>書也、多讀<sub>レ</sub>書則可<sub>レ</sub>以得<sub>二</sub>固<sub>二</sub>其根本<sub>一</sub>、深<sub>二</sub>其淵源<sub>一</sub>、譬<sub>レ</sub>之謀<sub>二</sub>強敵<sub>一</sub>、奇出百端、雖<sub>レ</sub>倖<sub>二</sub>一勝<sub>一</sub>、而非<sub>二</sub>占<sub>レ</sub>地以資<sub>レ</sub>食<sub>一</sub>、則竟不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>突<sub>二</sub>其根據<sub>一</sub>也、若夫世之遊學者、徒求<sub>二</sub>博於外<sub>一</sub>、以爲<sub>二</sub>談柄<sub>一</sub>、所謂奇出百端、倖<sub>二</sub>一勝<sub>一</sub>者耳、一時之權、雖<sub>レ</sub>能服<sub>レ</sub>人、而遭<sub>二</sub>堂堂之陣<sub>一</sub>、則窮蹙矣、當時耿弇輩、其所<sub>レ</sub>學蓋不<sub>レ</sub>如此之淺近、後諸葛亮亦在<sub>二</sub>南陽<sub>一</sub>、讀<sub>二</sub>書於草廬<sub>一</sub>、而胸中既建<sub>二</sub>大策<sub>一</sub>、及<sub>レ</sub>經<sub>二</sub>劉玄德之三顧<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>愧<sub>二</sub>於值遇<sub>一</sub>者、以固<sub>二</sub>其根本<sub>一</sub>、深<sub>二</sub>其淵源<sub>一</sub>也、今先生欲<sub>レ</sub>與<sub>二</sub>古人<sub>一</sub>同志、而反<sub>二</sub>古人之所<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>則可<sub>レ</sub>乎、勿<sub>レ</sub>惑、遂書<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>贖、

嘉永辛亥三月 日

山田毅再拜

（別紙）

奉<sub>二</sub>呈吉田先生<sub>一</sub>

先生慷慨氣衝<sub>レ</sub>天、好談<sub>二</sub>韜鈴<sub>一</sub>勢無<sub>レ</sub>前、舌鋒勇猛如<sub>二</sub>風雨<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>制<sub>二</sub>常山之率然<sub>一</sub>、去秋行李擔<sub>二</sub>書籍<sub>一</sub>、漫遊擬<sub>レ</sub>覽<sub>二</sub>輿廢迹<sub>一</sub>、轉關屢當<sub>二</sub>鎮西豪<sub>一</sub>、定知<sub>二</sub>方寸增<sub>二</sub>籌畫<sub>一</sub>、千載正教獨有<sub>レ</sub>孫、古人戰略青史存、世間碌々張<sub>二</sub>門戶<sub>一</sub>、布陣劉營一何

煩、尾境連案故示利、河越撰將却爲餌、猿郎投し箸擲し夜叉、太助坐兵推し銃騎、專分倒置招し覆亡、攻城下策損威強、拙速理暗勝還敗、險短思粗器恃し長、歴々得失親可見、先生討評又忘し倦、此裡着實積し工夫、運用應し生し無窮變、即今四海絶し喉烽、安取し旗鼓し試し銳鋒、只願驅し逐多少趙家狗、直進加し鞭獨眼龍、

山田毅再拜

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟廣)

二四 村田清風に贈る

嘉永四年三月五日以前

松陰在款 村田在大津郡三隅

先日者登し龍門し御教諭縷々承し之本懐奉し存候扱又尊語一葉御惠投被し仰付し欽領且服膺仕候芳翰中時乎不可失之一語頂門之一針と厚忝奉し存候發程前塵事紛冗仕拜謝迄奉し草畧し候尙奉し期し後音し候情事多緒禿毫之能盡を所し無し御座し御炳亮奉し万祈し候

矩方再拜

尙々申上も疎之御儀奉し存候得共爲し道御保重奉し祈候以上

村田松齋先生帳下

(山口縣立教育博物館藏 校合濟廣)

(左に掲げたるものは、東京市吉田茂子氏所藏の村田清風眞蹟の一幅にして、嘉永四年春松陰先生(生江戸遊學の時翁の書して贈られたるもの)に附記してある、多分右書中の尊語一葉であらう)

不達し砲技勿し以論し兵、不し通し孫吳勿し以譚し砲、辛亥二月 (清風印章)

二五

叔父玉木文之進に贈る

嘉永四年三月六日

松陰東遊途中在三田尻 玉木在款

一翰呈上仕候 殿様益御機嫌克今日八時半時三田尻被し遊し御著し恐悅至極奉し存候二に私儀無異到着仕候乍し憚被し成し御放慮し候様奉し祈候新山翁の草鞋至て工相宜足痛も無し之實に軍陣の要需と奉し存候先は平安の二字申上度迄如し斯に御座候餘は逐々可し申上し候勿々拜頓

六日

大次郎

尙し叔母様御病氣逐々御快復と奉し存候御保重奉し祈候時節御厭ひ肝要の御事に御座候事

玉叔父様 玉机下

尙し杉其外へ別段不し申上し候間平安無異の段可し然御致聲奉し頼候

(松陰先生遺著所載 校合濟廣)

二六

繁澤平左衛門に與ふ

嘉永四年三月八日

松陰東遊途 中在高森

一翰呈上仕候 殿様益御機嫌好今朝花岡被し遊し御發駕し恐悅至極奉し存候先以貴公様御多祥奉し賀候私儀此度軍學爲し稽古し江戸被し差登し御發駕當日中谷忠兵衛の同道相頼出立仕今日ハ御先にて御當地到着仕候折角御尋仕度奉し存候得共少シ足痛にて自愛仕居候右爲し可し申上し如し斯に御座候申も疎之御事御座候得共時候御自尙奉し祈候以上

三月八日

尚々幾重も時候御保愛奉<sub>レ</sub>祈候

從<sub>二</sub>旅館<sub>一</sub>  
吉田大次郎

繁澤平左衛門様

平安要事

(萩市池田常吉氏藏 校合濟<sup>㊟</sup>)

二七 父叔兄に贈る

嘉永四年三月廿一日

松陰東遊途中在伏見  
父叔兄在藏

一 翰拜具 殿様益御機嫌好昨日伏見驛被<sub>レ</sub>遊<sub>二</sub>御着<sub>一</sub>恐悅至極奉<sub>レ</sub>存候先以闔門御安寧可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>在奉<sub>二</sub>恭賀<sub>一</sub>候二二矩方儀道中無異當驛着仕候初五發程已來足痛も餘り病不<sub>レ</sub>申竹笨車ニ乗り候事僅ニ兩度耳ニ御座候且中谷翁起居飲食之微ニに至る迄毎々配意仕吳候故大ニ仕合申候乍<sub>レ</sub>憚御放意奉<sub>レ</sub>願候道中所詮雨勝ニ御座候間御國杯い<sub>ら</sub>哉と懸念仕候るし菜麥之模様何國もよろしく米價も下落と<sub>ら</sub>哉一段之事ト奉<sub>レ</sub>存候次第ニ暖氣ニ御座候へ共御氣体御保重奉<sub>二</sub>專祈<sub>一</sub>候餘奉<sub>レ</sub>期<sub>二</sub>後鴻<sub>一</sub>候 恐惶謹言

三月廿一日

吉田大次郎矩方拜具

一 殿様御癩痛之由にて過ル十八日兵庫御晝休に直様御留り被<sub>レ</sub>遊私共<sub>也</sub>(兵庫ト五里ヲ隔ツ)西ノ宮に參り居其様子承<sub>レ</sub>之大ニ危疑仕候處早速被<sub>レ</sub>遊<sub>二</sub>御折合<sub>一</sub>十九日兵庫御發駕有<sub>レ</sub>之候已後彌以御快キ由恐悅至極奉<sub>レ</sub>存候事

一 湊川ニる楠公之墓を拜し壹歩々、り候る舜水之撰ふ所之贊碑面之嗚呼忠臣云々之石摺共買得仕候歸國之節懸<sub>二</sub>貴覽<sub>一</sub>(現に吉田家に所藏)

可<sub>レ</sub>申候事

一 別紙明石之大砲安置ニ付る之覚る所を記し候之の御披覽奉<sub>レ</sub>祈候事

一 別紙防藝界詩是亦同斷の事(東遊日記三月九日の條參照)

一 大番之儀今月三日浪華に到着之由追々相聞へ可<sub>レ</sub>申候得共乍<sub>レ</sub>筆末ニ承り合候る御聞せ仕候事

杉殿君様

(叔父玉木文之進)  
玉丈人様

杉阿兄様

尙<sub>レ</sub>今日一日當驛御滞り被<sub>レ</sub>遊候事

(萩市杉相次郎氏藏 校合濟<sup>㊟</sup>)

二八 兄杉梅太郎に贈る

嘉永四年三月廿八日以後

松陰東遊途中  
兄在藏

岡崎御泊り之節御供中の御酒頂戴被<sub>レ</sub>仰付<sub>二</sub>候段旧格之由にて三月廿七日彼地御泊り今年も右様被<sub>レ</sub>仰付<sub>二</sub>候其砌武藝稽古人数井中村勘助私儀も御本陣被<sub>レ</sub>召出<sub>二</sub>奥番頭<sub>一</sub>御主意有<sub>レ</sub>之御酒頂戴被<sub>レ</sub>仰付<sub>二</sub>候段相授候窃カニ案をるニ武藝人数を御供張<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>召加事ニ候得<sub>レ</sub>勿論之事ニも可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之歟私輩へ及び候<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>有御事と奉<sub>レ</sub>存候故此手紙書中に封し込み入<sub>二</sub>御覽<sub>一</sub>候

大二郎

(全紙) 今日御酒頂戴被<sub>レ</sub>仰付<sub>二</sub>候御様子ニ付御本陣<sub>一</sub>只今御出勤可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候以上

三月廿七日

尚々委細之儀ニ付御出勤之上可<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>御意<sub>一</sub>候以上

西 錄藏

(外封) 吉田大次郎様

(小裏)

中村喜作  
大かし間や  
増吉

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟慶)

二九 × 山田亦介より

嘉永四年四月四日

山田在藏  
松陰東遊途中

一翰啓呈仕候 君臺萬福恭喜々々扱又先生益御安履長途之旅行無<sub>レ</sub>御滞<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成<sub>一</sub>御着府<sub>一</sub>賀井不<sub>レ</sub>勢候奉<sub>レ</sub>存候定<sub>二</sub>御跋涉中御修行有<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>さる儀<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>察候御様子委敷奉<sub>レ</sub>承度候猶又先達<sub>二</sub>聖武記之活版江戸<sub>一</sub>ニ相調候分御覽被<sub>レ</sub>成候由有<sub>レ</sub>之候ハ、早々一部御買下シ奉<sub>レ</sub>願候右活字版<sub>二</sub>聖武記之原序有<sub>レ</sub>之候得<sub>一</sub>夫<sub>レ</sub>て宜敷候<sub>レ</sub>し無<sub>レ</sub>之候ハ、御寫取之上御送り被<sub>レ</sub>下候様奉<sub>レ</sub>願候海防臆測活版やうやう出来<sub>二</sub>相成候間後便差上可<sub>レ</sub>申候

一郡司覺之進事西洋流兼學之願相濟於<sub>二</sub>明倫官<sub>一</sub>稽古始い<sub>二</sub>懸候<sub>一</sub>所他流之門人兼學相願候者多く夫<sub>レ</sub>而せ<sub>レ</sub>候氣味も有<sub>レ</sub>之於<sub>二</sub>御用所<sub>一</sub>も御詮義半途<sub>二</sub>此度其御地へ伺<sub>二</sub>参り候様承候覺之進も折角<sub>一</sub>つ<sub>二</sub>居候所少シ氣をくらし候<sub>一</sub>ニ<sub>レ</sub>段々<sub>レ</sub>立來ル九日<sub>一</sub>か三

田尻皆傳之稽古ニ参らせ候都合ニ仕候其内<sub>二</sub>御何も濟可<sub>レ</sub>申候間<sub>一</sub>そ<sub>レ</sub>稽古も<sub>レ</sub>しめさせ候半と存候勿論他流門人と申候も道を明け候上<sub>レ</sub>らて<sub>二</sub>此方<sub>一</sub>も引受ハ不<sub>レ</sub>仕候得共惣師家中ハ門人を<sub>レ</sub>みふとら<sub>レ</sub>候半かと恐<sub>レ</sub>候様子<sub>二</sub>類ニ浸潤膚訴<sub>一</sub>を行候様子<sub>二</sub>御座候<sub>一</sub>は<sub>レ</sub>り可<sub>レ</sub>憐事<sub>二</sub>此段御斟酌を以中忠<sub>一</sub>御嘶可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候美事<sub>二</sub>候得<sub>一</sub>一國中舉る信し候<sub>一</sub>も不<sub>レ</sub>苦事<sub>二</sub>候得共<sub>一</sub>争ひ等起させ候様之儀ハ致させ不<sub>レ</sub>申候間速<sub>二</sub>稽古始い<sub>一</sub>とし成立様御嘶奉<sub>レ</sub>願候何も逐々可<sub>レ</sub>申上<sub>二</sub>候得共<sub>一</sub>其内珍事も御坐候ハ、御聞可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候先爲<sub>二</sub>御着御歡<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>御意<sub>一</sub>旁呈<sub>二</sub>愚毫<sub>一</sub>候猶期<sub>二</sub>後致<sub>一</sub>候恐惶謹言

四月四日

亦介(花押)

尙々雨<sub>一</sub>御自玉專一之事ニ奉<sub>レ</sub>存候

大次郎様人々御中

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟慶)

三〇 × 葉山佐内より

嘉永四年四月五日

葉山在平戸  
松陰在江戸

二月朔日御認之貴翰御追書共ニ三月三日相達拜誦仕候陽和之時節愈御萬祥被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>在候旨奉<sub>二</sub>恭賀<sub>一</sub>候次ニ小生無<sub>レ</sub>恙送光仕居候御放念奉<sub>レ</sub>冀候扱客歲ハ御滞寓蒙<sub>二</sub>御懇篤<sub>一</sub>難<sub>レ</sub>有奉<sub>レ</sub>存候多病荒廢之身分失敬而已相盡恐懼此事ニ奉<sub>レ</sub>存候處却<sub>レ</sub>御丁寧之御番上甚以奉<sub>二</sub>痛却<sub>一</sub>候弊地御出立後天草島原熊本柳河佐賀等御遊歴臘末念九無<sub>二</sub>御滞<sub>一</sub>御歸館被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>成爾後御家學爲<sub>二</sub>御修行<sub>一</sub>御東遊被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>蒙<sub>レ</sub>命候段重疊目出度御儀奉<sub>レ</sub>存候二月末御發輒之御合之由就<sub>レ</sub>東都留學中<sub>二</sub>御閑暇も少々被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>出来<sub>一</sub>御文通も却<sub>レ</sub>御都合可<sub>レ</sub>宜御細論大慶之至ニ奉<sub>レ</sub>存候弊邸<sub>二</sub>賤息義も在勤罷在候間追々相伺候様可<sub>レ</sub>申遣<sub>一</sub>自然御出會も被<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>候ハ、御策勵被<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>下<sub>一</sub>候様深く奉<sub>二</sub>憑上<sub>一</sub>候將又弊藩御出立後之御文詩一卷應<sub>レ</sub>御録跡被<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>下<sub>一</sub>御多用之中御至情奉<sub>二</sub>感心<sub>一</sub>候殊更國史纂論壹部御惠贈被<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>下<sub>一</sub>望外之大惠何共恐入候儀ニ奉<sub>レ</sub>存候早速通讀仕候處ニ千餘字之治亂盛衰之機關昭<sub>二</sub>論述相成居且善之可<sub>レ</sub>師惡之可<sub>レ</sub>戒事等如<sub>レ</sub>視<sub>一</sub>諸掌上ニ<sub>レ</sub>誠ニ

士林可珍重之佳軼ニ御座候陋僻之境以御蔭始得鴻寶御禮難盡筆帛候不取敢一應之御謝辭而已申上置候御文詩も再三展誦仕候處御中情之發露いゝ候自然と文と成り詩と成り候もの故別の人を感し、先御識見之卓越超雋凡夫之辱眷如愚もの、非所敢評と刮目之嘆亦不<sub>レ</sub>少奉<sub>レ</sub>存候管見申上候様ニ被<sub>レ</sub>仰下<sub>レ</sub>候得共此節之御稿本ハ御熟用之文字其外聊以贊<sub>レ</sub>一辭<sub>レ</sub>候義出來不<sub>レ</sub>仕候せえて陋評ころも別記返完可<sub>レ</sub>仕候處此節と出來不<sub>レ</sub>仕候御歸郷御多用中意との御跡被<sub>レ</sub>下候御盛意ニ難<sub>レ</sub>酬夫耳恐怖仕候いつせ後便如何と歎可<sub>レ</sub>申上<sub>レ</sub>候五絶五首不<sub>レ</sub>取敢<sub>レ</sub>相續先便賤息迄草稿爲<sub>レ</sub>見置候得共右ハ全く未定ものニ付再稿作り添候る認上候覺悟ニ罷在候左様思召可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候以來ハ東都の方へ呈書可<sub>レ</sub>仕候へ共此節ハ伊藤氏迄草稿拜復轉致頼遣候萬奉<sub>レ</sub>期<sub>レ</sub>後鴻<sub>レ</sub>候恐惶謹言

四月五日

葉山佐内

高行

吉田大次郎様

玉案下

二白逐日薄暑之候相成候御自玉御精業を萬祈候山鹿氏にも御一封早速相届ヶ置申候且又御端書御厚情之至り奉<sub>レ</sub>感謝<sub>レ</sub>候多病老廢萬事付浩歎候而已ニ御座候文詩等ハ少々宛草稿仕候へ共俗紛難<sub>レ</sub>抛却<sub>レ</sub>錄呈之無<sub>レ</sub>暇遺憾此事ニ御座候御一咲可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成下<sub>レ</sub>候餘ハ追々可<sub>レ</sub>申上<sub>レ</sub>候也

(萩市松陰神社藏 校合濟藏)

三一 叔父玉木文之進に贈る

嘉永四年四月十三日

松陰在江戸 玉木在萩

一翰拜具仕候 殿様益御機嫌克過<sub>レ</sub>九日被<sub>レ</sub>遊<sub>レ</sub>御著邸<sub>レ</sub>恐悅至極奉<sub>レ</sub>存候先以御満堂様御清福可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>在奉<sub>レ</sub>欽慰<sub>レ</sub>候次ニ矩方無異到着仕候乍<sub>レ</sub>憚御休意奉<sub>レ</sub>祈候二百里之遠程古戰跡なども多く經歷仕諸藩之城下多々過候得共生質愚魯

加<sub>レ</sub>之官程有<sub>レ</sub>期何歎心せし<sub>レ</sub>候る感慨之作も無<sub>レ</sub>御座<sub>レ</sub>報愧の至奉<sub>レ</sub>存候去月十八日之芳翰本月五日豆州三島驛にて追及乃開拆仕候處書中ニ近頃御氣を起サセラ<sub>レ</sub>候御事有<sub>レ</sub>之段追々承度奉<sub>レ</sub>存候兒初も康寧無異ニ御座候交替以來御著府當分至極繁劇之趣ニ御座候

一居住未<sub>レ</sub>定今以中谷方世話ニ罷成居候事

一井上壯太至る氣を起し居每度中谷方<sub>ニ</sub>參り候中谷松も中々心懸申候其外着當分諸向煩冗にて未<sub>レ</sub>タ業を始<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>申候

得共宍道恒太・小田村亥<sub>ノ</sub>助等学者衆幾輩も有<sub>レ</sub>之都合可<sub>レ</sub>宜哉と奉<sub>レ</sub>存候惣<sub>レ</sub>當御番手冷飯株之内江戸之繁劇を見候爲耳ニ來候人ハ少き哉ニ相聞候第一大番人數之内にも有志多く相見候事

五月十二日

大次郎矩方拜

尙<sub>レ</sub>時氣御自重奉<sub>レ</sub>專祈<sub>レ</sub>候令息追々御出精と奉<sub>レ</sub>察候乍<sub>レ</sub>憚可<sub>レ</sub>然御傳聲奉<sub>レ</sub>頼候以上

玉木叔父様座右

又申上候杉<sub>ノ</sub>奉り候書中先考忌辰之詩御評騰奉<sub>レ</sub>冀候勿論詩ニ可<sub>レ</sub>相成<sub>レ</sub>とも不<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>存候得共言<sub>レ</sub>志之意ニおるてい<sub>レ</sub>哉と奉<sub>レ</sub>存候事

(日附五月十三日は書簡内容より見て四月十三日の誤である、第七卷東遊日記参照)

(萩市杉相次郎氏藏 校合濟藏)

三二 父兄に贈る

嘉永四年四月廿日 松陰在江戸 父兄在萩

家嚴君大兄四月四日之二書今日開拆仕候別紙既ニ相認候付追啓拜復仕候

一 皆々様御無事之由一段之事奉レ存候事

一 田原玄周、(暗弟三郎)敏を療むる段承知仕候とふそ物言まろしと御同様に奉レ存候

一 浚河一件嘸々愉快之衷ならんと奉レ察候事

一 御高作妙

一 (未笑稱、與小島某書參照)小島六郎・中原喜八賞典御同慶奉レ存候

一 (松陰の妹婿見玉初之進、後兵衛門詰之改む)兒初無異之衷矩方亦同斷に御座候

四月廿日

大次郎拜復

尙、此度ハ玉木の終ニ書得出不レ申候宜様奉レ頼候

杉様

別啓

一村上仲亮ハ之一書聞役長崎出張之節藤田作右衛門ハあり共御頼奉レ希候宅之儀作右承知にてハ可有レ之と奉レ存候北馬町諏訪社之真脇ニ御座候私儀彼方寓居仕候義は御屋代吉村年三郎も委細承知之衷ニ付彼方ニても宅ヲ知レ申候此段乍ニ御面倒ニ作右ハ宜しく奉レ頼候尙又作右ハ出足前参り候得共折節内居不レ仕候間相思之情可レ然御演述奉レ希候

一 尺牘之言其理も可有レ之被ニ思召ニ候ハ、一同ハも御見せ奉レ祈候此節モ何人も御國ハ之書四五通乃至十通計りも認め何事も廢し居候人多く候處実ニ無益之事にて遊學モ左様ニ參り申間敷哉と奉レ存候

大次郎

(萩市杉相次郎氏藏 校合濟)

三三 兄杉梅太郎に贈る

嘉永四年四月廿一日 松陰在江戸 兄在萩

有レ所志而遊、不レ遠ニ千里、去レ國而來、荏苒四十五日、未レ有レ講奇策ニ發ニ雄論、可ニ以聞ニ家庭ニ者、所レ志蔽乎、豈果消滅而盡乎、羞耻之事、孰甚焉、其在レ行也、官程有レ期、道雖レ近、心則急、加以ニ軟脚弱體、不レ能ニ跋ニ涉名山川、經ニ歷古戰場、慷慨悲愴、發爲ニ詩文、以奮ニ吾勃々焉者、其來レ邸也、居處未レ奠、假ニ寓他局、人皆有ニ官守、此局冗劇、吾輩遊學書生、事雖レ簡、心則動、且所ニ交俗士胥徒而耳、所ニ讀陳編腐文而已、不レ能ニ讀ニ放縱豪蕩之文、交ニ卓犖慷慨之士、豪談劇論、以養ニ吾浩々然者、夫心急而動者、涵養無レ素、志氣有レ時餒而然耳、則何疑ニ乎無レ奇策雄論、頃居處初奠、欲ニ讀ニ文交ニ士、償ニ初所ニ志、矩方於レ是有レ私謀ニ於阿兄ニ者、夫去レ國ニ千、平日之所ニ交遊往來、師之友之寤寐不レ能ニ忘ニ于懷ニ者、人之情也、既不レ能ニ忘ニ于懷、修レ書以通ニ問問、亦所ニ以行ニ情也、情而不レ行、離ニ人類ニ而陷ニ禽獸、以獲ニ罪於師友ニ矣、嗚呼、奇策雄論、舉以質ニ示師友、則善矣、不レ可レ不レ爲也、苟徒通ニ問問ニ而取ニ于免ニ罪焉耳、爲與レ不レ爲、豈大庭徑哉、費ニ不レ可レ輕ニ之光陰、役ニ不レ可ニ用ニ之精神、並厄ニ楮與ニ墨筆ニ而無レ一ニ益于彼此、不ニ亦迂ニ哉、夫平安之報、於ニ家庭ニ則足、自餘尋常問問、寧獲レ罪斷不レ爲、不レ知於ニ道之權一何如、且使ニ矩

方碌々無狀、依然舊態、死生天壽、固不足言焉、幸而少有所得、期滿而歸、訪舊尋盟、未晚也、誠如是、而後事可省、事省而志可專、志專則奇策雄論、往將有所得焉、不知卓識以爲何如、伏乞高教、若以爲不大非、冀致此意於治心氣齋先生及同社諸賢、求其以所得不吝指示、以問聞不致責、幸甚幸甚、矩方再拜、

四月念一

家伯教兄梧下

(この書に對する家兄の答書別掲四三號參照)

(松陰先生遺著所載 校合濟)

三四

×井上與四郎より

嘉永四年四月廿三日

井上在藏  
松陰在江戸

一筆致啓達候薄暮之節 殿様益御機嫌好長途無御滞可被遊御着府恐悅至極ニ奉存候將亦御同様愈御多福順々御旅行可被成御着欣然之至奉存候次ニ私無事御放念可被下候御留守御稽古場及盛ニ日毎ニ會業其外披も入申候扱も御出足之節と豚兒御供仕候由長路々々共ニ御坐候哉伯父公承り候得て伏見迄と別御達者ニ御坐候由追々御著御折合先生家共御尋被成候哉毎々御噂已仕候御暇乞之節委曲希置候様ニ豚兒身上何分無御倦御叱正追々御面會被成下諸者不策之次第御承知之處誠汗顔至極ニ奉存候決其地ハ無心ニ成困學練業無覺東遺之候及左計哉と愚父之樂御賢察を以御教示吳々奉希候申上候及却私々耻ケ敷候得共伏見書狀も不差越一程之者時々深く御警可被成下奉頼候文學に劍術等差添修行勿論之夏候處廿餘通例之心掛るに劍術是上之相通も當節見請候處兢克出情ニ多人教立會候故追着事出来兼可申と被察申候彼は私語長文却る御妨申迄及無レ之隨分御機體御厭爲ニ國家御勤學專一ニ奉存候余二期後音候 恐惶謹言

四月廿三日

井上與四郎勝行(花押)

尙々文之進様日々於三明倫官御出會仕御盛ニ御坐候幾回及御厭專一ニ奉存候

吉田大次郎様 人々御中

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟)

三五

父叔兄に贈る

嘉永四年五月五日

松陰在江戸  
父叔兄在藏

薄暮之節ニ御座候得共益以御滿家様并闔族御安寧可被為在と奉拵賀候次ニ矩方無異消日仕候乍憚御休意奉祈候

一 去月廿五日良齋翁の入門仕候五ノ日易經、八ノ日論語輪講討論、一ノ日書經講釋ニ御座候討論會等も至る切實にて益  
二 相成可申被相考候中村百合・勘介・宍道恒太孰も入門仕り會の出席仕候二ノ日有備館の良齋參り講釋仕候是亦面白く御座候

一 馬場にも不絶出申候御馬多く候ニ付馬之稽古も十分ニ御座候  
一 宍道恒太私小屋に來り申候井上壯太、中谷の參り申候  
一 氣候之事御國といかゝに候哉此地中々今日衣替と相成兼申候所詮雨勝にて今日廻勤丈々衣込あしに仕候得共固屋の歸り候ると矢張襦半ニ拾ニ御座候御屋敷中孰の固屋に參り候ると皆右之振合ニ御座候就るも御國之豐歎之事耳氣遣はし申候



一節儉之事御國彌以相固はり候半と奉<sub>レ</sub>存候中谷翁なとハ御著府已來毎朝粥を給<sub>レ</sub>申候料理等も殊ノ外省略ニ御座候矩方も固屋かへ已來飯耳隣固屋にて炊かせ料理を金山寺梅實類ニ限り式日と鯉魚と制度を定免且外出仕り少々刻限食時ニ後き候るも飯未<sub>レ</sub>夕外にてハ給<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>申候兎角國を出候るは御國にての儉約氣を早晩となく捨たり候ものも相見候得共御國之金錢を御國ニ遺<sub>レ</sub>潰し候は<sub>レ</sub>江戸之濱は<sub>レ</sub>き候儀ハ一人奉<sub>レ</sub>恐入<sub>レ</sub>候事にて苟も御國恩を考へ候人其心得あるへき事と奉<sub>レ</sub>存候

一兒初無異ニ御座候

一三井善右衛門・藤井太吉・田上宇平太當月中頃出足にて御國歸着之由ニ御座候三人共追々當地にて付合候ニ付彼人歸り候ハ、弊況逐一御承知奉<sub>レ</sub>祈候

一東遊日記一本録呈仕候<sub>レ</sub>ノ記は意ニ滿さる所多く御座候得共着邸の上逐々改竄仕候るは却る實意ニ相叶不<sub>レ</sub>申事ニ付日を逐る記し候儘ニは<sub>レ</sub>たし候外無<sub>レ</sub>之候間慚愧之至ニ御座候御電覽奉<sub>レ</sub>祈候

一佐々木生平田塾にて追々出精にて可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候間近況いり、ニ候哉尙館中兵學場といり、哉工藤素水流を説候哉當地にて有備館にて三ノ日を卜し兵學會始免申候過三日發會是未<sub>レ</sub>夕事定り兼申候御會も毎月十二日二十三日之御日取被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>既ニ今月相始り候由ニ御座候

一天文臺にも此内參り申候松本父子毎々來り申候

一良師友も未<sub>レ</sub>夕得不<sub>レ</sub>申良齋ノ外孰へも參り不<sub>レ</sub>申候山鹿素水に<sub>レ</sub>林家同道之約速故同人所詮差問ひ未<sub>レ</sub>夕得行不<sub>レ</sub>申候

此節ハ通鑑共閱し居申候

一伊助翁に頼み中庸會初免候様相決シ居候是<sub>レ</sub>御屋敷中之讀書人を皆會し候積りニ御座候來原良藏・福原孫右・坪井竹等も相加り候筈にてハスミ居候得共其如何<sub>レ</sub>翁之情、是等と筆端ニ難<sub>レ</sub>盡御賢察奉<sub>レ</sub>祈候外ニ大學會始メ是<sub>レ</sub>兩三度も仕候其人數は中谷松・井上壯・馬來小五郎等あり益田孫も加り申候是<sub>レ</sub>愚陋を顧みズ誘掖仕候心得ニ御座候

五月五日賀

矩方百拜

尙々氣候不順共ニ候ハ、別る御自重奉<sub>レ</sub>祈候以上

家嚴君様

玉丈人様

家伯教兄様

黒川・佐々木・大藤・宇野其外孰にも失禮のみニ御座候宜しく奉<sub>レ</sub>頼候事

(黒川は松陰の養母が黒川村森田家に寄寓せるを云ふのである、佐々木は父の妹、大藤・宇野は實母の姉に當る)

(萩市松陰神社藏 校合濟)

另啓

一歸期之事先達中谷翁が其意を相尋候ニ付支出度歸支度道中とも二日數百日計りも費へ候事ニ候得と一年にてハ實ニ何の事業を成ス間も無<sub>レ</sub>之由相對候處翁も實に然り就る<sub>レ</sub>兩三年ハ滯り稽古有<sub>レ</sub>之可<sub>レ</sub>然由申候中村勘介も右之心得



嘉永四年

三八

之由ニ付旁心ニ決し居申候右之趣片楮申上候事

五日

大次郎

(右の別啓は本文なきも、その文意より見て、歸期に關する事は別掲五一號玉本宛書にあるから、書簡往復日數から考へて、それより少くも約二ヶ月以前の事に相違ない、即ち五月五日の別啓ニ判斷した所以である)

(萩市杉相次郎氏藏 校合濟)

三六 從叔父兒玉太兵衛に贈る

嘉永四年五月五日

松陰在江戸 兒玉在萩

一筆啓上仕候薄暑之節御座候得共 殿様益御機嫌克被遊御座ニ恐悅至極ニ奉存候且又御満家様彌御安全可被成ニ御起居ニ珍重奉存候萬吉様逐々生長にて可有之と奉察候於ニ爰許も初之進様彌御勇健毎々御世話ニ相成仕合申候次ニ私儀都合相替儀無御座候間乍憚御休意奉希候申も疎ニ奉存候得共氣候御用心專一ニ奉存候先御見舞旁如斯ニ御座候猶期ニ後音之辰候 恐惶謹言

五月五日賀

吉田大次郎矩方(花押)

尚々幾重も御用心專一ニ奉存候乍筆末ニ赤穴姥様にも宜様御傳聞奉頼候以上

兒玉太兵衛様 人々御中

(東京市兒玉秀雄氏藏 校合濟)

三七

×文藏より

嘉永四年 四月某日

五月六日 松陰在江戸

覺

一銀六拾七匁四分七厘

此金壹両ト

錢五百四拾七文

但明キ荷壹箇、此懸目拾五貫八百目之賃

右之通御中荷達持登リ仕候分ニ御座候已上

(嘉永四年 亥四月)

大到來方

文藏

吉田大二郎様

御取次中様

(裏面)

面書之通請取申候

五月六日

文藏(判)

(此書は、嘉永四年江戸行の際荷物運賃の領收證であらう)

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟)

三八

×兄杉梅太郎より

嘉永四年五月十三日

兄在萩 松陰在江戸

(本文關)

嘉永四年

三九

嘉永四年

四〇

二白

\* 去年足下鎮西ニ在リシ時愚ニ望ニ士新を以し自ら斯(期カ)るニ士朗を以セラレ夢寐之間亦是ヲ見ラレ候ニ至る由之処書々忙シ夜々眠

タシ且々左傳會ともポト々々取統候位之事ニる怠惰打過愧報之至ニ候只今ニる足下ノ自ら許を所如何を哉

一江戸表々日々繁華ニ相成り候由俗輩ハ時節追々直リ可申と競ひ居申候愚々効カニ案ニ幕府ニ在リテハ諸藩士風ノ振ひ兵威

ノ盛ん事を畏る之事とも々と存候高論いらん

一不レ入事ふら佐藤寛作郡方筆者役御内用懸リト被ニ差出ニ候事

竹辭日

修道

\* (西遊日記十月十八日及同廿五日の條参照)

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟(○))

三九 兄杉梅太郎に贈る

嘉永四年五月十四日

松陰在江戸  
兄在萩

前書東遊日記(記)之事申上候得共書中ニ封し込不レ申候烏有之御疑可レ被レ為レ在奉ニ恭察ニ候実ハ其節牛莊翁(中村)ニ鳥渡示し候所  
只様手間取書狀仕出之間ニ合不レ申書狀も其儘ニ仕置書改候間無レ之無レ據失敬ニ相成申候多罪々々恐縮之至奉レ存候尙  
又高山彦九郎傳武士たるもの之龜鑑此事と奉レ存候故さし送申候即水府會澤常藏之著ス所ニ御座候本藩義勇之衆にも  
示し候ハ、必感激發勵をる所可レ有レ之歟と奉レ存候此度藤井多太御國罷歸り候付日記・傳共相頼差送申候弊况碌々在ニ  
前書今不レ復及ニ焉

五月十四日

頑弟大百拜

家賢兄 案下

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟(○))

四〇 養母久満に贈る

嘉永四年五月廿日

松陰在江戸  
養母在萩郊外黒川村

一筆申上候おつさ之節ニ御さ候得共彌御無事めてたくそんし上り私儀も道中相りたる儀無ニ御座ニ御當地ニ参り此頃  
ハ大分おり合申候御あんしん成被レ遣候様奉レ存候扱又出立のみぎりニモ大きい御心はいをりけりりぐさくきんし奉り  
候尙又何よりの品つりこされ忝奉レ存候しよせんけぬ大事ニ寸くも無レ之手番をも得さし上不レ申御無礼之至おせれ入  
り候先ハ御見舞旁申上り  
らしく

五月廿日

大次郎

わらゝさほ

ほるる

(大津郡依山村藤井勝一氏藏 校合濟(○))

四一 兄杉梅太郎に贈る

嘉永四年五月廿日

松陰在江戸  
兄在萩

四月廿八夜之芳誨今月十五日開拆右ニ當ル答書

嘉永四年

四一

一家嚴君北堂其外闔族御安寧之由奉<sub>レ</sub>拵候且吏務御紛冗之由定<sub>ル</sub>浚河之一儀快事と奉<sub>レ</sub>想像<sub>二</sub>候

一 小田吉三郎寫本料一行二十字真片假名二十九枚<sub>ヲ</sub>每枚五厘と覺居申候楠流第五冊め<sub>ニ</sub>御座候尤必しも遣<sub>サ</sub>しても可  
ならん歟御勵合奉<sub>レ</sub>祈候

一 黒川北堂<sub>ノ</sub>漸呈<sub>二</sub>書<sub>ニ</sub>候書翰認<sub>ニ</sub>ま<sub>ニ</sub>不容易<sub>一</sub>晷をさへ且女狀別<sub>ル</sub>閉口<sub>ニ</sub>御座候死候得<sub>テ</sub>相聞可<sub>レ</sub>申夫迄ハ相斷置  
候間諸向<sub>ニ</sub>よろしく奉<sub>レ</sub>頼候

一 小倉健作<sub>ニ</sub>失禮之至<sub>ニ</sub>打過汗背仕候嘸々痛心仕居候<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之奉<sub>レ</sub>存候小田村生<sub>ナ</sub>ト時々相逢老母之様子每度承  
り申候

一 馬術始免候事

付、劔も折々遣ひ申候

一 會事之多き<sub>ニ</sub>當惑仕候

一 一ノ日良齋書經洪範口義聽聞

三ノ日武教全書初ノ方御屋敷内之部有備館<sub>ニ</sub>て

四ノ日中庸前初ノ方

五ノ日朝良齋易會繫辭上傳 午後莊原文助中庸會中程

九ノ日良齋論語鄉黨篇

一家嚴君北堂其外闔族御安寧之由奉<sub>レ</sub>拵候且吏務御紛冗之由定<sub>ル</sub>浚河之一儀快事と奉<sub>レ</sub>想像<sub>二</sub>候

一 小田吉三郎寫本料一行二十字真片假名二十九枚<sub>ヲ</sub>每枚五厘と覺居申候楠流第五冊め<sub>ニ</sub>御座候尤必しも遣<sub>サ</sub>しても可  
ならん歟御勵合奉<sub>レ</sub>祈候

一 黒川北堂<sub>ノ</sub>漸呈<sub>二</sub>書<sub>ニ</sub>候書翰認<sub>ニ</sub>ま<sub>ニ</sub>不容易<sub>一</sub>晷をさへ且女狀別<sub>ル</sub>閉口<sub>ニ</sub>御座候死候得<sub>テ</sub>相聞可<sub>レ</sub>申夫迄ハ相斷置  
候間諸向<sub>ニ</sub>よろしく奉<sub>レ</sub>頼候

一 小倉健作<sub>ニ</sub>失禮之至<sub>ニ</sub>打過汗背仕候嘸々痛心仕居候<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之奉<sub>レ</sub>存候小田村生<sub>ナ</sub>ト時々相逢老母之様子每度承  
り申候

一 馬術始免候事

付、劔も折々遣ひ申候

一 會事之多き<sub>ニ</sub>當惑仕候

一 一ノ日良齋書經洪範口義聽聞

三ノ日武教全書初ノ方御屋敷内之部有備館<sub>ニ</sub>て

四ノ日中庸前初ノ方

五ノ日朝良齋易會繫辭上傳 午後莊原文助中庸會中程

九ノ日良齋論語鄉黨篇

七ノ日吳子 (林壽之進・藤井熊之進)  
林壽・藤熊と

外

十二日廿三日 御前會、過ル十二日作戰篇スム

二日隔三日隔位大學會 中谷松<sub>(松三郎)</sub>・馬來小五郎・井上壯太

過る十七日<sub>ノ</sub>官官會初ル是ハ太宗問對講、非番之面々不<sub>レ</sub>殘罷出聽聞仕候巨田<sub>(香川惣右衛門)</sub>・深栖<sub>(多門)</sub>其外大分論もひたし候右之通一

月三十度計<sub>リ</sub>之會<sub>ニ</sub>御座候古賀謹一郎<sub>ノ</sub>も參り候是は質問耳あり折角明日<sub>ノ</sub>山鹿素水<sub>ノ</sub>も可<sub>レ</sub>參様林家申合置候是

亦會可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之奉<sub>レ</sub>存候何分會を減し候<sub>ハ</sub>はサバケ不<sub>レ</sub>申候且假初<sub>ニ</sub>も御當地之會は委しく候<sub>ニ</sub>付集註計<sub>リ</sub>之下見<sub>ニ</sub>

てハ不意慮多く御座候又々模様も御座候<sub>ハ</sub>、奉<sub>ニ</sub>申上<sub>二</sub>候

一 九州圖落掌仕候高洲<sub>(松陰伯母の婿家)</sub>に宜しく御致聲奉<sub>レ</sub>頼候

五月廿日

大次郎拜具

尙、時下御自玉奉<sub>レ</sub>祈候

阿兄様

(萩市松陰神社藏 校合濟安)

四二 叔父玉本文之進に贈る

嘉永四年五月廿七日

松陰在江戸  
玉木在萩

五月廿七日雨天是夜九つ時本月九日并十四日御認之書到來欽讀仕候事即御答相認候事

一 圖族御無異何々の安悦之事奉<sub>レ</sub>存候矩方も碌々あから別條無<sub>ニ</sub>御座<sub>ニ</sub>候御放念奉<sub>レ</sub>祈候此節毎早朝々武藝稽古初り候迄  
 論語註會讀仕候人數馬來小五郎<sub>（井上壯太郎）</sub>・井壯<sub>ニ</sub>御座候是<sub>ニ</sub>实用<sub>ニ</sub>引當切実<sub>ニ</sub>論<sub>シ</sub>候積り<sub>ニ</sub>御座候既<sub>ニ</sub>今朝父母唯其疾之憂  
 之章<sub>ニ</sub>至り遊学之身ハ取分テ此事<sub>ニ</sub>切なる由を論<sub>シ</sub>孰も書を廢<sub>シ</sub>る三嘆息仕候事<sub>ニ</sub>御座候何<sub>トゾ</sub>御懸念被<sub>レ</sub>成間<sub>シ</sub>  
 奉<sub>レ</sub>存候此<sub>ニ</sub>居候間ハ決<sub>シ</sub>る病氣<sub>ヲ</sub>付申間敷被<sub>レ</sub>考候何<sub>トナレ</sub>ハ飯ハ四合一勺、放飯度<sub>ヲ</sub>失ふ心遣無<sub>レ</sub>之運動<sub>ヲ</sub>馬場  
 天氣<sub>カ</sub>れハ隔日<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>之擊劍<sub>モ</sub>トボ<sub>ク</sub>仕又安積・古賀・山鹿<sub>ナ</sub>ト孰<sub>レ</sub>行候<sub>ル</sub>も一里許之所<sub>ニ</sub>テ相應<sub>ニ</sub>運動<sub>ニ</sub>なり申  
 候然れ<sub>ト</sub>病氣<sub>ヲ</sub>附<sub>サ</sub>る<sub>ル</sub>當然<sub>ニ</sub>御座候<sub>ト</sub>或<sub>レ</sub>曰<sub>ク</sub>御仁惠<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>同風<sub>ニ</sub>被<sub>レ</sub>仰付<sub>ニ</sub>候其風  
 一 近時海國必讀書・阿芙蓉彙間共目錄<sub>ヲ</sub>私<sub>ガ</sub>西遊日記<sub>中</sub>ニ記<sub>シ</sub>置候<sub>ル</sub>ノ記<sub>ハ</sub>押入<sub>ノ</sub>白木櫃<sub>ニ</sub>打込置候<sub>ル</sub>ト覺申候御閑  
 暇之節櫃<sub>ヲ</sub>ハ<sub>テ</sub>返<sub>シ</sub>御點檢奉<sub>レ</sub>頼候筆工代之儀<sub>ハ</sub>追<sub>テ</sub>聽<sub>ル</sub>可<sub>レ</sub>申上<sub>ニ</sub>候<sub>ト</sub>哀  
 一 井壯<sub>ニ</sub>学業之衰<sub>ニ</sub>近日文学 上聽被<sub>レ</sub>仰付<sub>ニ</sub>候由<sub>ニ</sub>付壯儀<sub>ニ</sub>大学科之付<sub>出</sub>ニ相成申候右<sub>ハ</sub>此内迄<sub>ニ</sub>會證申候夫<sub>ガ</sub>段々<sub>ト</sub>四書  
 ナシ<sub>ラ</sub>ハ申候其他業本<sub>ハ</sub>十八史畧<sub>カ</sub>り福原孫右衛門<sub>ニ</sub>も參<sub>リ</sub>候由<sub>ニ</sub>至極相勵間斷<sub>ハ</sub>無<sub>レ</sub>之候<sub>ト</sub>尤<sub>右</sub>学業<sub>ニ</sub>付<sub>ル</sub>一之案<sub>シ</sub>付御  
 座候激勵<sub>セ</sub>し免候儀<sub>ヲ</sub>勿論肝要<sub>ニ</sub>御座候得共彼既<sub>ニ</sub>激勵仕居候事<sub>ニ</sub>候得<sub>ト</sub>却<sub>ル</sub>助<sub>ケ</sub>長<sub>モ</sub>る之弊<sub>ニ</sub>至<sub>リ</sub>可<sub>レ</sub>申奉<sub>レ</sub>存候  
 私共学業も先<sub>ハ</sub>其憂甚<sub>シク</sub>哉<sub>ニ</sub>奉<sub>レ</sub>存候今朝爲政之内<sub>ニ</sub>十有五而志<sub>レ</sub>学之章、胡氏之說<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>以示<sub>下</sub>学者當<sub>ニ</sub>優游涵泳<sub>ニ</sub>不<sub>上</sub>  
 可<sub>レ</sub>躡<sub>レ</sub>等而進<sub>ニ</sub>、一<sub>ニ</sub>以示<sub>下</sub>学者當<sub>ニ</sub>日就月將<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>半塗而廢<sub>ニ</sub>也之所<sub>ニ</sub>ても其論仕候事<sub>ニ</sub>御座候壯太<sub>ト</sub>勿論與<sub>四</sub>ニ<sub>テ</sub>  
 可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之就<sub>ル</sub>壯<sub>ニ</sub>説<sub>モ</sub>る<sub>モ</sub>の優游涵泳少の間斷無<sub>レ</sub>之様<sub>ニ</sub>と誘掖仕候段<sub>（俄カニ成切を責免候様相成<sub>ル</sub>と甚宜<sub>ル</sub>）</sub>

るほしく奉<sub>レ</sub>存候是即對症之藥<sub>リ</sub>と管見<sub>ニ</sub>ハ相考居候間<sub>イ</sub>ら、可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之哉御覽<sub>モ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>在候間蠻語箋之序<sub>ニ</sub>西洋  
 學を<sub>ハ</sub>し候心得相見候漢學<sub>ニ</sub>ても志先<sub>ニ</sub>チ候仁<sub>ハ</sub>同一理<sub>ト</sub>奉<sub>レ</sub>存候先<sub>日</sub>復<sub>ニ</sub>井上父執<sub>ニ</sub>書畧<sub>言</sub>ニ其意<sub>ハ</sub>文曖昧<sub>ニ</sub>候  
 得<sub>ハ</sub>能<sub>レ</sub>其意<sub>ニ</sub>通<sub>シ</sub>候哉否哉尙<sub>又</sub> 御高論御座候<sub>ハ</sub>、後鴻奉<sub>レ</sub>待候  
 一 火事笠之事奉<sub>ニ</sub>敬承<sub>ニ</sub>候<sub>ト</sub>哀  
 一 治心氣齋弄璋可<sub>レ</sub>賀之至奉<sub>レ</sub>存候重陽節新幟<sub>ノ</sub>儀奇特の處置共無<sub>ニ</sub>御座<sub>ニ</sub>哉之事  
 一 旅中之拙吟經<sub>ニ</sub>御高覽<sub>ニ</sub>合作<sub>オ</sub>ト之御評奉<sub>ニ</sub>恐入<sub>ニ</sub>候<sub>ト</sub>旅中<sub>ハ</sub>却<sub>ル</sub>志氣奔逸<sub>ニ</sub>て讀書<sub>ニ</sub>泥み<sub>不<sub>レ</sub>申候故吟案を構<sub>ヘ</sub>  
 候事も時として<sub>ハ</sub>御座候得共當地著仕候<sub>ル</sub>會<sub>ノ</sub>下見業本等<sub>ニ</sub>日々逐<sub>レ</sub>中々詩文も出來<sub>不<sub>レ</sub>申候<sub>ト</sub>チサキダンナ、ア  
 トニトモカナイ<sub>レ</sub>之段深く奉<sub>ニ</sub>慙愧<sub>ニ</sub>候  
 一 武教全書<sub>ハ</sub>何分縱横自在<sub>ニ</sub>解申候  
 一 山鹿素水<sub>ハ</sub>入門仕彼人文筆之拙<sub>ハ</sub>無<sub>ニ</sub>此上<sub>ニ</sub>候處一種之才物<sub>ニ</sub>て時名を得候人<sub>ナリ</sub>著述も甚多<sub>シ</sub>中<sub>ニ</sub>も海備全  
 策<sub>ト</sub>良齋翁之序御座候<sub>至</sub>る<sub>有<sub>レ</sub>之</sub>良齋<sub>・</sub>古賀<sub>ナ</sub>ト當時之兵家<sub>ニ</sub>も其右<sub>ニ</sub>出<sub>ル</sub>もの<sub>ハ</sub>し<sub>ト</sub>被<sub>レ</sub>稱候如何様左様可<sub>レ</sub>  
 有<sub>レ</sub>之候方<sub>今</sub>江都文学兵学之事<sub>ニ</sub>等<sub>ニ</sub>分<sub>レ</sub>居候哉<sub>ニ</sub>相見候一<sub>ハ</sub>林家<sub>・</sub>佐藤一齋<sub>等</sub>ハ至<sub>ル</sub>兵事をいふ事をいみ殊<sub>ニ</sub>西  
 洋邊之事共申候得<sub>ト</sub>老佛之害<sub>ヨリ</sub>も甚<sub>シ</sub>とやら被<sub>レ</sub>申由<sub>ニ</sub>ハ安積良齋<sub>・</sub>山鹿素水<sub>等</sub>西洋事<sub>ニ</sub>ハ強<sub>ル</sub>取<sub>ル</sub>へき事<sub>ハ</sub>あ<sub>し</sub>  
 只防禦之論<sub>ハ</sub>無<sub>レ</sub>之<sub>ハ</sub>と鍛鍊ス<sub>ニ</sub>ハ古賀謹一郎<sub>・</sub>佐久間修理<sub>（眞田信濃守様藩人田上宇平太<sub>リ</sub>紹介<sub>ニ</sub>て途申候尤古賀<sub>・</sub>作<sub>マ</sub>、間知言<sub>ニ</sub>てハ無<sub>レ</sub>之）</sub>西洋之事發明精  
 竅取<sub>ル</sub>へき事多<sub>シ</sub>と<sub>ル</sub>頗<sub>ニ</sub>研究<sub>ス</sub>矩方按<sub>モ</sub>る<sub>ニ</sub>一<sub>ノ</sub>説<sub>ハ</sub>勿論取<sub>ニ</sub>足<sub>ラ</sub>ズ<sub>ニ</sub>三<sub>ノ</sub>説<sub>ヲ</sub>湊合<sub>シ</sub>る習練仕候<sub>ハ</sub>、少々面目  
 を開<sub>ク</sub>事可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之<sub>ト</sub>存奉候</sub></sub>

一何時之飛脚便り得とも覺不<sub>(中村)</sub>申候間伊助隣りに移り飯を西隣<sub>(四郎兵衛壽之進)</sub>佐々木・林固屋の頼み候趣委曲書中相認差出候間未々達  
(せ脱カ)さるゝ如何之間違哉と奉<sub>(世脱カ)</sub>懸念<sub>(世脱カ)</sub>候吏

但利害得失ニある事にては無<sub>(中村)</sub>之故何方に違ふも構ひ不<sub>(中村)</sub>申候吏

頑姪大百拜具復

玉丈人座下

一乍浦集詠抄 二冊 上木

(萩市杉相次郎氏藏 校合濟<sup>⑧</sup>)

四三

×兄杉梅太郎より

嘉永四年五月廿八日

兄在萩  
松陰在江戸

復<sub>(弟)</sub>義卿

杉修道

本月望、領<sub>(客)</sub>客月念一日之手書、忙手開封、一閱始審<sub>(高)</sub>高況無恙、欣并雀躍、懽喜無已、所<sub>(添)</sub>添漢文書牘一通、反覆誦讀、慷慨之志氣、洋溢於言外、使<sub>(讀)</sub>讀者不覺拍案扼腕、而問<sub>(愚)</sub>愚以<sub>(道)</sub>道之權如何、言<sub>(晉)</sub>晉何辨何辨、竊惟今春 明公閣下殊旨、擢少壯有<sub>(力)</sub>力、文藝武技、往將<sub>(有)</sub>有所<sub>(進)</sub>進益者十數員、東遊<sub>(於)</sub>於江都、實本藩古未<sub>(嘗)</sub>嘗聞<sub>(之)</sub>之盛事也、而汝幸當<sub>(其)</sub>其撰、苟當<sub>(古)</sub>古未<sub>(嘗)</sub>嘗聞<sub>(之)</sub>之事者、不<sub>(可)</sub>不<sub>(成)</sub>成<sub>(古)</sub>古未<sub>(嘗)</sub>嘗聞<sub>(之)</sub>之効也、汝思哉思哉、是以內則親戚兄弟、外則朋友故舊、莫<sub>(不)</sub>不<sub>(冀)</sub>冀<sub>(下)</sub>望<sub>(推)</sub>推<sub>(究)</sub>究道義、講<sub>(明)</sub>明家學、通<sub>(經)</sub>經世濟民之用、定<sub>(攻)</sub>攻取守堅之策、進<sub>(足)</sub>足補<sub>(助)</sub>助廟謀、退則鑄<sub>(治)</sub>治學士、少<sub>(有)</sub>有<sub>(報)</sub>報<sub>(以下別本あり)</sub> 明公閣下之殊旨、豈<sub>(有)</sub>有<sub>(下)</sub>以<sub>(瑣)</sub>瑣屑聞問<sub>(爲)</sub>爲<sub>(責)</sub>責者乎、汝所<sub>(論)</sub>論固當也、冀<sub>(無)</sub>無<sub>(以)</sub>以<sub>(世)</sub>世故<sub>(介)</sub>介<sub>(胸)</sub>胸懷、而省<sub>(事)</sub>事專<sub>(志)</sub>志、償<sub>(汝)</sub>汝初志、使<sub>(親)</sub>親戚朋友無<sub>(失)</sub>失望<sub>(矣)</sub>、若或有<sub>(下)</sub>以<sub>(問)</sub>問不<sub>(致)</sub>致、問<sub>(罪)</sub>罪者、請<sub>(歸)</sub>歸<sub>(咎)</sub>咎於愚、愚將<sub>(東)</sub>東奔西走、家至人謝、而不<sub>(致)</sub>致<sub>(煩)</sub>煩汝、汝勉哉勉哉、來書所謂、若<sub>(奇)</sub>奇策雄論、質<sub>(而)</sub>取<sub>(正)</sub>正、則愚固不<sub>(敢)</sub>敢當、然浩々勃々之志

氣、發爲<sub>(詩)</sub>詩爲<sub>(文)</sub>文者、有<sub>(得)</sub>得<sub>(以)</sub>以誦讀諷詠、則以<sub>(愚)</sub>愚之怠惰放恣、或將<sub>(有)</sub>有<sub>(奮)</sub>奮激興起、少<sub>(立)</sub>立志、冀<sub>(傾)</sub>傾倒見<sub>(示)</sub>示、引<sub>(首)</sub>首傾<sub>(耳)</sub>耳以俟矣、  
(以下別本) 五月念八夜  
(萩市杉相次郎氏藏 校合濟<sup>⑧</sup>)

義卿硯右

偶閱<sub>(精)</sub>精里集、先生戒<sub>(某)</sub>某生<sub>(曰)</sub>曰、欲<sub>(遠)</sub>遠到<sub>(一)</sub>者、必資<sub>(養)</sub>養生、愚懸<sub>(々)</sub>於汝<sub>(者)</sub>、亦不<sub>(能)</sub>能<sub>(外)</sub>外<sub>(於)</sub>於此、憤哉々々、  
(東京市吉田茂子氏藏 校合濟<sup>⑧</sup>)

四四

兄杉梅太郎に贈る

嘉永四年六月二日

松陰在江戸  
兄在萩

此書を作るハ六月二夜あり

家伯教大兄五月十三日之芳誨に當る答書

一江戸ニる兵學者と申ものハ尊程無<sub>(之)</sub>之様相聞候事

付り新論<sub>(有)</sub>有<sub>(之)</sub>之候得共未<sub>(タ)</sub>手<sub>(入)</sub>入<sub>(不)</sub>不<sub>(申)</sub>申候官許無<sub>(之)</sub>之書故書肆<sub>(に)</sub>と顯れ不<sub>(申)</sub>申候

一五月廿七日平戸邸罷越葉山野内相對仕候野内<sub>(左内の副子)</sub>詩數篇を見申候孰<sub>(凡)</sub>凡作<sub>(ニ)</sub>ノ且瑕疵多く御座候其中一首意味面白き

やう成分左方ニ錄上仕候

素飡空荷聖恩深、慚懼回<sub>(頭)</sub>頭轉切<sub>(心)</sub>心、退食今朝先解<sub>(佩)</sub>佩、點檢東宮座右箴、  
矩方案、聖字可<sub>(レ)</sub>議

一海外新話拾遺一本御買入相成候由未<sub>(タ)</sub>拜見不<sub>(申)</sub>申候<sub>(ま)</sub>らし今帝氣を起し候事有<sub>(之)</sub>之哉不<sub>(信)</sub>信

一肥後人宮部鼎藏五月九日江府罷出候是も稽古のため之に二出候由山鹿にて毎付合申候同志人にて客冬之尋<sup>ニ</sup>舊<sup>ニ</sup>鼎<sup>一</sup>大悦仕居候近日<sup>ノ</sup>同人同道にて浦賀邊巡視仕候様申談置候昨日願書さし出置候六日七日之頃出足之覺悟御座候万<sup>一</sup>右留守ニ飛脚出達も可<sup>レ</sup>仕哉と奉<sup>レ</sup>存候故此書相認置候委細之儀歸着後委曲可<sup>ニ</sup>申上<sup>一</sup>候尤御暇日數十五日ニ御座候扱又素水會日一二六八あり嗟多哉<sup>ア、オ、イ、カ</sup>御國武教全書讀方粗陋舊年<sup>ノ</sup>も逐々御話仕候通の事にて張註<sup>張久右衛門の註</sup>にて<sup>レ</sup>他所人<sup>ニ</sup>と勝<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>申候明倫官出精之衆<sup>ノ</sup>も御會面被<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>在候ハ、右之段可<sup>レ</sup>然被<sup>レ</sup>仰可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>遣候<sup>レ</sup>淺野<sup>・</sup>齋藤<sup>・</sup>久保<sup>・</sup>佐々木諸子逐々學問進み候と奉<sup>ニ</sup>遠察<sup>一</sup>候御國之讀書何共都下之風ニ比し候へ<sup>ト</sup>粗陋ニ御座候此段御致聲奉<sup>レ</sup>頼候新見も有<sup>レ</sup>之候ハ、承り度段是亦よろしく被<sup>レ</sup>仰候様奉<sup>レ</sup>頼候此方所詮學事多緒鯉魚ヲ廢候段慙愧仕居候實と舊態錄々可<sup>レ</sup>言事無<sup>レ</sup>之<sup>ノ</sup>起る事ニ御座候事

愚弟大矩方再拜復

家伯教大兄  
玉案下

尙愚態仍<sup>レ</sup>舊候段言<sup>ニ</sup>上于膝下<sup>一</sup>并羣弟妹などへ可<sup>レ</sup>然御致聲且又佐孫六翁<sup>右カ</sup>も先便書來候自然留守中飛脚立候得<sup>ト</sup>失敬之至候段是亦宜敷様御演述奉<sup>ニ</sup>万祈<sup>一</sup>候尙又林壽<sup>林壽之進、佐々木四郎兵衛</sup>・左四郎兵衛家<sup>ノ</sup>御相對之節世話ニ相成候儀御頼申上候万縷奉<sup>レ</sup>期<sup>ニ</sup>後信<sup>一</sup>候 \*佐々木孫左衛門、その妻は松陰の叔母である。  
(萩市國重政亮氏藏 校合濟<sup>②</sup>)

四五 兄杉梅太郎に贈る

嘉永四年六月五日 松陰在江戶  
八日 兄在萩

一葉山カ邊備摘案治心氣齋<sup>ノ</sup>遣し置候間評共相調候ハ、早速御送り奉<sup>レ</sup>頼候<sup>ト</sup>一坤輿圖識圖共ニ便り有<sup>レ</sup>之候節御送り越奉<sup>レ</sup>頼候是もさしる急<sup>ニ</sup>候儀ハ無<sup>レ</sup>之候<sup>ト</sup>一熊本藩横井平四郎あるもの諸國遊學ニ出候由御國にも來り候積りにて宮部鼎藏<sup>テ</sup>矩方<sup>ノ</sup>添書仕候由鼎藏申候事

六月五日

一去年以來御話仕候上杉・細川之内談之書此節手入候故草々<sup>ら</sup>別紙寫差上申候爰許<sup>ニ</sup>ても中谷<sup>ノ</sup>見せ候處伊豆殿<sup>ノ</sup>見候様と巨田<sup>ノ</sup>見せ候間決る上聽<sup>ニ</sup>達し可<sup>レ</sup>申哉と奉<sup>レ</sup>察候事  
一中谷翁此間ハ劇病にて致<sup>ニ</sup>懸念<sup>一</sup>候處此節ハ追々快復にて役所にも出勤<sup>ハ</sup>し候事  
一御早下り之評判と今九月<sup>ニ</sup>ても有<sup>レ</sup>之<sup>ノ</sup>愈々様ニ申候間果して然り哉浮説ニ御座候事

八日

一上聽之事來ル十日之御日取<sup>ニ</sup>御座候 (實は十一日上聽があり、十三日出發)  
一浦河<sup>實</sup>行之事早速願之通被<sup>レ</sup>遂<sup>ニ</sup>御許容<sup>一</sup>候來ル十二日<sup>ノ</sup>出足之申合<sup>ニ</sup>御座候事  
一熊本藩御家老有吉市郎兵衛嫡子市郎左衛門儀同道仕吳候様相頼候事  
此追啓<sup>ト</sup>紛冗<sup>ニ</sup>取紛<sup>レ</sup>思<sup>ヒ</sup>出し次第書續<sup>ケ</sup>候間<sup>玉大人</sup>家大兄<sup>ノ</sup>申上候事取雜り候間各當る所御取奉<sup>レ</sup>祈候多罪々々御海容奉<sup>レ</sup>頼候  
(東京市吉田茂子氏藏 校合濟<sup>②</sup>)

一平岡先生(劍術師平岡彌三兵衛)之書彼方へ入門之事申越候付申下不レ及事ニ候得共早々御達奉レ頼候孰き兼常巨人・小笠原太郎兵衛

先生家申越候由ニ付大ニ不レ後様彼方へ落手仕り度氣味も有レ之候事

一世木生(熊太郎)之書過ル十五日來ル但見舞之趣ノミ述有レ之不レ及ニ其甚缺望ニ御座候同人学業近狀いり、哉と懸念仕居

候出足前之仕組等追々行レ候哉無益之見舞狀差越候ハ右等之哀被ニ申越ニ候様有レ之度事ニ御座候間矢張俗習之

見を免られざる所有レ之候尤一概ニ斯様申候ハ、人之親切ヲ無ニせるも可レ至歎乍併是等之處提醒ひらさむして

ハ学問の進益有レ之間敷候畢竟為レ学の氣力光燄ニ乏しく世味ニ濃ヤカニシテ滔々乎やして俗輩ニ陥らん耳、思召次

第御一論被レ成候る決定之處承知仕心得ニ可レ致候事付此論先日之さし上候尺牘と相連り居候様覺申候

八日

愚物大拜具

尙、亂筆と御互断り切らレ不レ申候眞平御海容奉レ祈候

黒川・宇乃・井上之三書御序之節御投込奉レ願候佐々木・大藤・岡田あさり皆閉口三拜御頼申上候死ハゆゑし不レ申候段

宜しく御演述奉レ頼候書翰ハ十二鎌滑稽にて擱筆

賢伯教兄 案下

(萩市杉相次郎氏藏 校合濟園)

(別紙)(別紙の原本は紛失し、當時兄杉梅太郎の手寫したものが存して居る)

御内談之大旨

一此方勝手向不如意ニ付嚴敷省略相用格別之仕來を以取續ケ罷在候故萬事質素節儉を執守奥向も右ニ準し御察外甚手狭ニ万端御

不自由之御事ニ可レ被レ成ニ御座ニ候へ共御入奥之上ニ都る此方家風ニ御隨被ニ成下ニ度尤被レ召ニ連女中ニ之儀も此段と兼被ニ相心得ニ候様仕度候事

一女中向之儀此方ニる國元諸士之妻子共之内老女始役女等被ニ召仕ニ候処至る人少ニる次女中迄漸拾二三人ニ御座候間仕之通御附被レ進可レ被レ申候事(來脱カ)

但新召連女中ニ御入奥之日ハ此方ニる扶持方擬等被レ遣候事

一男子向之御附人ニ無レ之様御心得被レ下度尤此方ハ男子向御傳役御用人御醫師共外家風仕來之通御附被レ進可レ被レ申候事

一前々表奥共平常着服上着之分ニ綿衣着用之家風ニ御座候間後年御入奥之上ハ奉ニ恐入ニ候得共御上召ニ御綿衣差上可レ申候尤被ニ

召連ニ女中向之儀尤以ニ綿衣着用ニ此方女中同様ニ仕度候事

一御平常三時御膳之儀も右ニ準し一汁一菜ニ差上候是又同様御心得被レ下度候事

但御祝儀等之節臨時取量差上候事

一御熟談相濟候上ハ表立家老使者を以御所望可レ仕ニ付右爲ニ御挨拶ニ御同様被ニ仰入ニ可レ被レ下哉猶委細と追御懸合可レ仕候事

一右相濟候上ハ來月中ニ願書進達之方御差支有ニ御座ニ間敷哉之事

一御願濟之上ニ御双方御幼年之御事ニ付御引移御婚姻迄數年御間も御座候間其内廉立候御附届向等無レ之都る御手輕ニ仕度候事

一御仕向之儀是迄何方様より後五包ツ、御差廻ニ相成尤御土産等一切不申受ニ候事

右之趣委細之儀追表立御懸合可レ仕候へ共先打明一通り御内談相及候事

右書面ニ細川様上杉様御取組ニ付上杉様御用人ハ細川様御用人に遣し候由にて辛亥六月五日熊本藩宮部鼎藏ハ借用寫取候事

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟園)

四六

×葉山佐内より 嘉永四年六月五日

葉山在平戸 松陰在江戸

一筆啓上仕候梅雨之節御座候處益御萬祥可被<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>御勤仕<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>恭賀<sub>ニ</sub>候西睡相變義無<sub>レ</sub>御坐<sub>ニ</sub>下走義も無<sub>レ</sub>恙送光仕居候乍<sub>レ</sub>憚御放念被<sub>ニ</sub>成<sub>下</sub>度候今般 尊藩<sub>ハ</sub>弊地より劍術なる遊歴仕候もの罷出候處御丁寧之御取扱被<sub>ニ</sub>下置<sub>ニ</sub>候由<sub>ニ</sub>る殊之外難<sub>レ</sub>有<sub>リ</sub>罷掃且 貴兄様御親類様より下走<sub>ニ</sub>被<sub>レ</sub>御傳聲被<sub>ニ</sub>成<sub>下</sub>奉<sub>ニ</sub>感謝<sub>ニ</sub>候右御便<sub>ニ</sub>承<sub>レ</sub>候得共 御供<sub>ニ</sub>る御東行被<sub>レ</sub>成候由重疊目出度奉<sub>レ</sub>存候此頃ハ御家學御脩行向<sub>ニ</sub>も御精勵被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>在候御事<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>遠想<sub>ニ</sub>候扱先般御惠賜之<sub>山縣太華著國史纂論</sub>纂論展開仕候處編述<sub>ニ</sub>深く御心を被<sub>レ</sub>用候ものと相見候取舍程ヲ得候事ハ勿論本邦治亂興衰之機關一讀<sub>ニ</sub>然<sub>ニ</sub>相分<sub>リ</sub>第一世道之責<sub>ニ</sub>る人坐右不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>欠之佳帙と奉<sub>レ</sub>存候尊信日<sub>ニ</sub>深く相成候間連々藩内にも弘<sub>レ</sub>度示讀仕居候先書一應拜受仕候事<sub>ニ</sub>申上置候間再御禮旁此段申上候御文詩御草稿も再三熟讀仕候處御立言御趣意超絶其上御熟用之文字邊迄聊淺學輩之所<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>議無<sub>レ</sub>之感心仕候直<sub>ニ</sub>拜受仕置候其砌小詩數首出來得<sub>レ</sub>改訂仕候可<sub>レ</sub>奉<sub>ニ</sub>寄贈<sub>ニ</sub>心得之處色々事紛冗屬稿之儘打過仕此節御境地之御便承知仕幸便も有<sub>レ</sub>之候故不<sub>ニ</sub>取敢<sub>ニ</sub>錄上仕候御叱正奉<sub>レ</sub>希候纂論之評<sub>ニ</sub>代<sub>リ</sub>候様他日追作も出來仕候ハ<sub>レ</sub>尙又錄上可<sub>レ</sub>仕先々屬稿御一覽迄寄上仕候萬在<sub>ニ</sub>後鴻<sub>ニ</sub>恐惶謹言

六月五日

葉山佐内

吉田大次郎様 帳下

二白此書相達候頃ハ炎歎と奉<sub>レ</sub>存候隨分御自玉專要奉<sub>レ</sub>存候洋夷も當春ハ藩内<sub>ニ</sub>ハ二艘見受候迄<sub>ニ</sub>御坐候七八里迄乘來候<sub>レ</sub>地方之様子覬候体<sub>ニ</sub>相聞<sub>ハ</sub>申候東都御修學中ハ別<sub>ニ</sub>御繁用之御事と奉<sub>ニ</sub>深察<sub>ニ</sub>候若御少間被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>在珍異之事等有<sub>レ</sub>之候ハ<sub>レ</sub>御開示奉<sub>レ</sub>冀度

候也

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟園)

四七

×叔父玉木文之進より

嘉永四年六月七日頃

玉木在萩 松陰在江戸

五月五日七日之両書今日到來 飛脚之者之手<sub>ニ</sub>滯<sub>リ</sub>る哉既<sub>ニ</sub>ニ發書より三日日<sub>ニ</sub>及<sub>ヘリ</sub> 先以御無異之由并賀之至存候當地閭族無事御安心候様存候  
(江戸) 一在都雨勝之由當境近比日和勝<sub>ニ</sub>梅節も相應之潤<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>之候<sub>ハ</sub>共未苦雨<sub>ニ</sub>申上<sub>ハ</sub>無<sub>レ</sub>之候事<sub>今日雨陰雲<sub>ニ</sub>及<sub>ニ</sub>候</sub>  
一麥之実のり都合宜<sub>レ</sub>たりし由弊家及大麥八九斗を得候 見積<sub>ノ</sub>ミ未計<sub>リ</sub>ハ不<sub>レ</sub>得仕候 麥秋熟<sub>シ</sub>稻之植付も都合宜錦袋笠之秧婦ハ不<sub>レ</sub>見位之事<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>之候既<sub>ニ</sub>二万頃綠雲を敷詰<sub>マ</sub>定<sub>ル</sub>農家も競<sub>ヒ</sub>居<sub>ヘ</sub>き豊歎之御案<sub>ニ</sub>先御抛擲候様存候事  
一去年來救荒之御政事<sub>ニ</sub>ハ度支官も給<sub>セ</sub>さる哉既<sub>ニ</sub>固相掾吏共不<sub>レ</sub>遠 未<sub>ニ</sub>定<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>之來月<sub>ニ</sub>出府之由御仕組事と申<sub>ニ</sub>候隨<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub>人<sub>字<sub>小</sub>西三<sub>周</sub>政<sub>等<sub>之</sub></sub></sub> 因<sub>ニ</sub>云武教全書印本二册阿善取歸<sub>リ</sub>早速周政<sub>ニ</sub>相渡候<sub>丁<sub>續</sub>百五十<sub>等<sub>之</sub></sub></sub>出府之上御禮可<sub>ニ</sub>申述<sub>ニ</sub>候得共其うち宜様<sub>ニ</sub>の口演<sub>ニ</sub>  
一良齋<sub>ニ</sub>御入門相濟追々會等<sub>ニ</sub>御出<sub>之</sub>由一段之儀御勉勵御勤學肝要之儀申<sub>ニ</sub>候事 安積<sub>氏</sub>に<sub>候</sub>を<sub>全</sub>笑<sub>ヒ</sub>候儀<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>之候追々承<sub>リ</sub>候<sub>ニ</sub>ハ何分才學共希なる様申候<sub>字<sub>子</sub>啓</sub>仲由從<sub>レ</sub>政、及、由也果、杯之講嘸や面白<sub>ク</sub>説きつらんと遠想仕候何<sub>ニ</sub>大<sub>ニ</sub>都<sub>ニ</sub>ならね<sub>ニ</sub>候追々英物御尋候<sub>ニ</sub>御付合可<sub>レ</sub>然存候事

付素水歎其他<sub>ニ</sub>も兵學之老成有<sub>レ</sub>之哉是又肝要<sub>ニ</sub>候練兵実備之事先書申述候<sub>ニ</sub>其後之御狀<sub>ニ</sub>少<sub>シ</sub>して御許<sub>ニ</sub>之辞相見候愚が見様之惡敷哉<sub>ニ</sub>存候事

一御乘馬不<sub>レ</sub>断之由<sub>ハ</sub>備<sub>ニ</sub>運動<sub>ニ</sub>のため<sub>ニ</sub>よ<sub>シ</sub>く尙丸<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>用<sub>ニ</sub>者<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>之旁<sub>ニ</sub>極<sub>ニ</sub>宜<sub>ニ</sub>敷<sub>ニ</sub>御養生<sub>ニ</sub>を悦<sub>ヒ</sub>申事<sub>ニ</sub>御座候乍<sub>レ</sub>序擊劍<sub>ニ</sub>御稽古御始<sub>メ</sub>之様<sub>ニ</sub>被<sub>レ</sub>存候<sub>ニ</sub>又<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>と養氣<sub>ニ</sub>之便<sub>ニ</sub>相<sub>ニ</sub>成<sub>ニ</sub>候様覺<sub>レ</sub>候<sub>ニ</sub>ま<sub>ニ</sub>し炎暑<sub>ニ</sub>之時<sub>ニ</sub>な<sub>ニ</sub>過<sub>ニ</sub>動<sub>ニ</sub>を却<sub>レ</sub>る惡<sub>シ</sub>く御斟酌<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>之度<sub>ニ</sub>ハ不



レ入申事ニても可レ有レ之哉

一御節約之事被レ仰越御尤之事ニて愚共モ兎角鯨鯢等ニて食ニ有レ魚事多く行詰る儉約とも難レ申其上豚兒獵好ニて當節も多び杯毎々取來度々濡<sup>レ</sup>枯腸<sup>レ</sup>候御旅況之苦味に競ヘ見候得ハ無々ニて候些儉約之思立無レ之るニて候事

一東遊日記御送り之由相見候處今日も御状のミ入手何き之手を以御送り被<sup>レ</sup>下<sup>ル</sup>哉と存候事

(佐々木小次郎) 一佐々木小、平田塾ニて至極<sup>レ</sup>以下關

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟慶)

四八 ×山田亦介より

嘉永五年六月廿日

山田在藏 松陰在江戸

(前文關)……御座候間古賀氏爾後噂も御座候ハ、拙者に取合可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下候御頼仕候何モ其餘御耳ニ觸候事御座候ハ、被<sup>レ</sup>仰聞<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下候様致<sup>レ</sup>御頼<sup>レ</sup>候申も疎<sup>レ</sup>候得共時下雨意玉合專一ニ奉<sup>レ</sup>存候猶追便可<sup>レ</sup>申述<sup>レ</sup>候恐惶諱言<sup>レ</sup>

六月廿日

亦介<sup>レ</sup>花押

尙々幾回も御自重專一ニ存候何モ珍事も御座候ハ、逐々可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>仰様奉<sup>レ</sup>頼候

大治郎先生玉案下

御序ニ中村先生<sup>レ</sup>御宜御致意奉<sup>レ</sup>祈候

(書簡、五一號及び九六號參照、山田は古賀何種著海防臆測を無断出版し、何種の子護一郎を深から毛和藩邸に苦訴され後にはこれがため罪科を得るに到つたが、此書簡は其の経緯の一端を示して居るものと見られる)

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟慶)

四九 兄杉梅太郎に贈る<sup>レ</sup>カ

嘉永四年六月廿二日

松陰在江戸 兄在藏

六月廿二日

一今日午後浦賀行<sup>ル</sup>歸着芳翰直様開拆此行東肥人宮部鼎藏同道ニる道中益多く愉快ニ奉<sup>レ</sup>存候過ル十三日出足今日迄十日か、り申候

宮部<sup>レ</sup>談ニて山陽<sup>レ</sup>前兵兒謠分り申候薩人ノ歌ニ、肥後ノ加藤ガクル時ハエンシヨアラレニ鉛ダゴソレデモイヤダトイフナラバ首ニ刀ノ引出物、又同人話ニ肥前候感懷御作之由ニて

堂々大路久荆榛、天以<sup>レ</sup>蒼生<sup>レ</sup>附<sup>レ</sup>我身、(付カ)腰下常横三尺劍、胸中別蓄一團春、千秋學術推三元嘔、蓋世英雄

視<sup>レ</sup>守仁、寒月寥寥小窗下、焚<sup>レ</sup>香默坐養<sup>レ</sup>精神、

右御聞被<sup>レ</sup>成候哉

一籌海私議増補ノ内陸鬪篇カト覺申候甲冑之事如<sup>レ</sup>細川氏之制ニ有<sup>レ</sup>之ヲト存候付同人に問候處肥後藩ニハ三齋公之御製被<sup>レ</sup>始候分有<sup>レ</sup>之由既ニ此節家老持來り居候付爲<sup>レ</sup>見可<sup>レ</sup>申との事なり同人器械制等ニ至ル迄甚委しく考究仕居諸事申々及び不<sup>レ</sup>申候十日之同行ニ大ニ志を起し居候處ニ御座候

一此行鎌府二階堂於<sup>レ</sup>錦屏山瑞泉ニ一夜宿シ上人ニ逢<sup>レ</sup>十歳之勤<sup>レ</sup>を盡し申候

御無異之段矩方<sup>レ</sup>申上吳候様ニとの御事候宇野<sup>レ</sup>之書髓ニ届申候尙以後御手翰ニても御差出候ハ、江戸<sup>レ</sup>便り之處相成り候付尖<sup>レ</sup>相達可<sup>レ</sup>申奉<sup>レ</sup>存候上人ハ近來筆無用ニて書翰切々さし不<sup>レ</sup>出然し安樂ニ日を消し候と被<sup>レ</sup>仰候事

(以下開)

(美禰郡共和村阿武義一氏藏 校合濟)

五〇 兄杉梅太郎に贈る

嘉永四年六月廿八日

松陰在江戸  
兄在哉

六月廿八日

一 今日芳翰開拆一門御無異放念仕候矩方も碌々旧態之事

一 上覽式之以見分之事初る承知仕候逐々相濟候哉

一 策問之對貞右(彌二)ナドいり哉近來彼輩挫銳氣共ハ不致哉絶る無音(不明)肝要御役人早速相答可申之處左も無レ之

ハ何共不審奉レ存候

一 小次郎(佐々木)宜しく御傳言奉レ頼候

一 日記之烏有之疑御尤之儀失敬之至奉レ畏縮候五月十五日三井善右工門出足之節藤井多吉に頼ミ候間跡を參り本月之中許と御落手と奉レ存候

一 尊稿の氣付可申上之段不致當今朝一覽御詩作妙と奉レ存候

一 私ノ鄙文錄上仕度候間癖文見るべき無御座候稿ヲ草スルノ手間ニ頓着仕候過ル十一日文學 上聽送人登(井上與四郎)富山一

序、良齋課題曹參論、相房漫遊日記等之外格別文無レ之候先達る與(權三郎)小嶋權三書改竄仕候與(井上與四郎)井上父執書御覽被レ遣

候哉此度中村道太書御覽被レ成候ハ、御高論同度奉レ存候 \*第一卷末禁稿、賜題撰得送人登富山一序謹撰曹參  
論與小嶋某書復其父執書復中村道太參照

一 易會も有レ之由一段之事奉レ存候  
右御答ニ當り候矣

六月廿八日

愚弟大百拜

伯教家大兄

案下

(阿武郡明木圖書館藏 校合濟)

五一 叔父玉木文之進に贈る

嘉永四年六月廿八日以後

松陰在江戸  
玉木在哉

平安ノ二字ハ封上ニ有レ之故畧レ之

六月廿八日長井到着御書奉レ拜讀且近日御國文武共至る盛大之様子承り滿腔之客氣輪困(困)トノ難ニ平ゲ御座候矣

○晴雨豐歉之事委細承り大安心仕候尙此余も逐々御教示奉レ祈候國を出テハ國事を忘レ候段御國人之弊哉ニ候處是等ハ第一實意薄き起る事にて大可愧乎且他藩人ニ接シ見候ニ心懸之人ハ國許右等之事ハ委々存居候右を不レ存ハ迂腐之人といふへし

○令省御壯健仍レ旧獵好之由一段之事奉レ存候土作之色致ニ想像候因て相考へ候武士ハ壯健ニソタチ不レ申候るハ物前之用ニ不レ立ハ勿論あり尙亦十余歳ニ成り候るハ根氣強ク物ニ堪へ候様之執行肝要奉レ存候然處堅忍と壯健とハ常ニ相因るものニ付何分其御心得申も愚ニ奉レ存候乍レ恐令省君など之ソダチ様ハ梅阿兄并矩方等ニハ及ふ間しく阿兄矩

方等グツダチハ尊大人丈人などニハ及ハざる多ク候段當時大人丈人得志中之不幸と奉レ存候何分其際御勘考之上  
 安きニ居テ危ヲ忘レズ夫ノ堅忍壯健御求メサセ事一ニ奉レ存候此等之事ハ毎々御高論承リ居候事なるニ今更申上候  
 ハ所謂釈迦之前之説法にて不遜ニも中リ奉レ恐入レ候得共近來右ニ付大ニ感發スル事共御座候テ反覆ニ及申候既ニ  
 肥人浦賀同行仕候處彼人既ニ三十余歳に候得共毎年水ヲアヒ候故三度計リ五休之皮ムケ候由承リ矩方ナドハ膽ヲ寒  
 シ候事大業ヲ成スモ此一條ニ根ツキ可レ申歟

一伊翁最初ノ大分宜敷會日なども餘リ延引無御座候息子之内百合甚志ヲ起し朝夕相與ニ切實之大議論仕候彼人武  
 遍氣も有レ之只今邸中にて第一等之益友ニ御座候歸國之上如何御試被レ成候る矩方ガ鑒識不レ精之処痛ク御詰責奉レ祈  
 候

一兩三年淹留御尤も被レ思召レ候由ニ付彌之処中谷(忠兵衛)に談し候處然ラハ願書壹本出し候様ニと申ニ付爰許にて近日一書さ  
 し出し可レ申奉レ存候永短之得失一心中也実ハ錯亂ニ不堪候間長井・中谷・棕梨等(の)に委曲腹中を相談仕置可レ申候ニ  
 付夫人共歸國之上能々被レ仰合レ候る被レ仰越レ候様奉レ願候事  
 一熊本人之書落手仕候即刻答書相認夫邸人(かの)に頼置候  
 一誰人之嘘(か)一一封落掌仕候  
 一飯田翁之詩邸中之人にも追々見せ候處窮而後工なる之説多ク御座候右次韻之心持にて彼詩之前對整齊ナラざる故古  
 詩(飯田翁之助)と見誤り申候能見候得々律詩らしく候ニ付細節ハ畧し申候着邸已來初テ作(の)にて未レ經烹鍊一拙陋奉レ愧至情不

レ可レ已箇中に認め申候

滿腔丹心報國情、 慷慨空遭海波平、 嚙レ口糜レ足亦何傷、 依然胸中十萬兵、 鮑魚市上狡犬走、 熟菓樹頭黠禽  
 鳴、 君不レ見有レ足有レ口還堪レ愧、 相思深夜對孤檠、

右御一啖之種迄ニ記し置候  
 來書縷々數百千言難レ有奉レ存候

再白

頑倅大百拜具

(阿兄(も)御傳(置奉)頼候  
 山田亦介(も)海防臆測送り遣し吳槌ニ落手仕候尙又先達る聖武記四冊彼方(に)送り候處是又落手之由代銀申越吳候様之  
 事ニハ候得共右ハ僅々ニ拾八匁(あ)れハ必しも不レ求(其)償臆測吳候厚意ニ報候るテウト宜敷候右厚意ノ謝、万々々一同  
 人ハ御相對も御座候ハ、宜敷奉レ頼候派遣にて餘り御對は無レ之哉とハ奉レ存候へ共此度彼人ハ書遣候間無レ之故萬一之  
 爲御頼申上置候必トハ不レ申ナリ云々

玉丈人 案下

(萩市杉相次郎氏藏 校合濟)

五二

×宮部鼎藏より

嘉永四年七月二日

宮部松隆  
在江戸

先時(カ)寛々拜風大慶被レ存候其砌被レ仰聞候儀市郎兵衛申聞候處(有吉)もハ粗製之甲冑ニ御坐候へ共入ニ貴覽候處ハ少も指支不レ申候  
 段申出候然処今日御責臨奉レ願置申候儀御坐候へ共無レ據故障御座候間自然御支不レ被レ爲レ成候ハ、明夕刻御光駕奉レ待度右と折角御

約定御置申上甚失敬千萬被<sub>レ</sub>存候へ共不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>止儀御坐候間先奉<sub>レ</sub>窺申候書外拜容と草々不具

初秋二日

(外封)長州邸  
吉田大次郎様  
用

熊本邸  
宮部鼎藏  
(東京市吉田茂子氏藏 校合濟藏)

五三 葉山佐内に贈る

嘉永四年七月五日

松蔭在江戸  
葉山在平戸

六月五日之華翰本月五日落掌反覆奉<sub>レ</sub>敬誦一候御滿堂樣彌御萬福被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>在候由恭喜之至奉<sub>レ</sub>存候次ニ矩方遊學中碌々たる故態乍<sub>レ</sub>憚被<sub>レ</sub>安ニ 尊念ニ候様奉<sub>レ</sub>祈候 矩方三月五日國許發程仕四月九日着府仕候着府已來既ニ百五拾日ニも及候處一向御起居不<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>伺忽接ニ 芳誨ニ惶懼慙愧之極面熱背汗のミから茫然失措仕候御書中之趣を以相考候得<sub>レ</sub>先般も御書御仕出ニ相成候由國許に共滞り居候哉未<sub>レ</sub>タ落掌不<sub>レ</sub>仕候間何共惶慙此事ニ御座候海岳之高深素<sub>レ</sub>土壤涓滴ニ於て関る事無<sub>レ</sub>之トも奉<sub>レ</sub>察候得共一心之安らさるせん方あく奉<sub>レ</sub>存候孰ま近々一書差上度奉<sub>レ</sub>存候處先御答且暑中御伺旁奉<sub>レ</sub>捧<sub>レ</sub>陋簡ニ候<sub>レ</sub>宜

(山縣太華著國史纂論)  
一纂論御展閱被<sub>レ</sub>成候由御過獎奉<sub>レ</sub>恐入ニ候御詩中ニも略相見候不<sub>レ</sub>敢當之儀ニ奉<sub>レ</sub>存候山縣半七も去冬<sub>レ</sub>病廢<sub>レ</sub>引籠居候間近日少シ快き方之由ニ付御高吟之内右に當り候分寫し指送可<sub>レ</sub>申奉<sub>レ</sub>存候養痾中之一慰不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>之奉<sub>レ</sub>察候万

(太華の通稱)  
一纂論之評ニ代り候御作共出來候ハ、拜誦相願度奉<sub>レ</sub>存候併陋編に類々尊毫を被<sub>レ</sub>勞候儀<sub>レ</sub>何共奉<sub>レ</sub>恐入ニ候<sub>レ</sub>宜

一西遊陋稿蕪鄙鄙俚之上旅中之構思迄ニて練磨も未<sub>レ</sub>行届一 大方之座上に刪を請候段失敬之至深く畏縮仕候得共鄙情之儘呈露仕候ハ却テ乞<sub>レ</sub>教之地と相成<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>考候故草卒ヲ 顧み<sub>レ</sub>錄呈仕候間何卒深く愚衷を御下察被<sub>レ</sub>下候<sub>レ</sub>御改訂之上御返却万々奉<sub>レ</sub>頼候 且此節良齋翁ナドにも參り候得共都下之大家ハ四方<sub>レ</sub>生徒餘分會聚晚生淺學矩方等之如きものハ其説ヲ叩キ候事さへ存分ニ出來兼候位之事ニて況し<sub>レ</sub>詩文之商量ハ別る其教ヲ乞<sub>レ</sub>難く當惑仕居候今<sub>レ</sub>龜生之兎角ト評し候<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>恐入ニ候得共 先生才學優長辞藻華麗ニして名利聞達を天下ニ求<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>恬然退處し晚生淺學矩方<sub>レ</sub>如きものニても御應答を辱<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候段実ニ依歸をべき處 先生之外復誰<sub>レ</sub>らん哉右ニ付る<sub>レ</sub>何卒此情御察被<sub>レ</sub>下先日之稿を始<sub>レ</sub>御叱正偏ニ奉<sub>レ</sub>祈候拙毫難<sub>レ</sub>盡<sub>レ</sub>情意ニ候間萬御推察奉<sub>レ</sub>冀候<sub>レ</sub>宜

(カ)  
一別紙尊製七絶篇々流麗平穩繰返し奉<sub>レ</sub>朗詠ニ候<sub>レ</sub>併御過獎之至請益ニ由<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>何共失望奉<sub>レ</sub>存候何卒前條之鄙衷御推察奉<sub>レ</sub>祈候<sub>レ</sub>宜

一過ル十三日發足シ廿二日迄相房沿海巡覽仕候後鴻委曲可<sub>レ</sub>申上ニ奉<sub>レ</sub>存候<sub>レ</sub>宜

一令省野内君に先日得<sub>レ</sub>接見<sub>レ</sub>寛々清話相伺候情况御推察奉<sub>レ</sub>祈候<sub>レ</sub>宜

一楠本君にも一面仕候<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>し情話未<sub>レ</sub>深後會を期し候<sub>レ</sub>相分<sub>レ</sub>申候

右之外申上べき儀も無<sub>レ</sub>之酷暑中御自重專一ニ奉<sub>レ</sub>存候尤此書尊地に相達候頃ハ大分秋涼可<sub>レ</sub>相催<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>存候何も嗣音<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>期候 恐惶謹言

七月五日

吉田大次郎百拜具

二白幾重も氣候御自玉奉專一候前條失礼之至何共奉恐縮候 以上  
葉山佐内様 下執事

(鹿兒島市葉山萬次郎氏藏 寫眞校合濟藏)

五四 叔父玉木文之進に贈る

嘉永四年七月廿二日

松陰在江戸  
玉木在藏

覚

一伊豆七島圖

右ハ浦賀港口ハ豆州・武州・房總之沿海形勢暗礁淺沙遠近之里程等明細ニ圖シ有之候右絶板ニ相成候由

一八絃通誌三冊

右坤輿圖識正續編ニ漏レ候夏ヲ著シ候書之由箕作玉海カ父ノ著シ候書ニ御座候嘉永三年新刊あり

右二書御國ニ参リ候哉防寇管事ニ共ハ一本有之るも不レ苦ト被レ存候ニ

玉木様

よし田

尙々昨夜土州侯御屋しき御長屋少々火警有之候御郭内之火事初ル見申候土州御屋しきハ大名小路にて此御方御忍  
しき間遠ヲモ候間風穩して早々収り候段一段之事ニ御座候事

廿二日

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟藏)

五五 兄杉梅太郎に贈る

嘉永四年七月廿二日以後

松陰在江戸  
兄在藏

一事斯語三部御送り奉レ頼候是ハ肥後御家老有吉市郎兵衛二部宮部一部貫受度由申事ニ付中忠・長雅ハ相談し候處方方  
ハ懇望之事ニ候得テ私買拜領之道理にて差遣候共不レ苦由決定ニ相成候間何卒後便御送奉レ頼候 \* (毛利齊廣の著述)

一白鹿洞揭示三摺是ハ南部書生江田大之助良齋 塾生 たるもの之願ニ付是亦御差越奉レ頼候

右ニ付小野耕ハ頼み候もの餘り多く相成候ハ、事斯語先一部御贈り被レ爲レ遣後便之節御送りニ相成候ハ、其趣を以

彼方に相斷り置候共可レ然哉と奉レ存候先達方追々申上候内方正学文粹・文章軌範ハ強ク急需ニても無レ之候坤輿圖

識共ハ見度奉レ存候何も御都合宜しき様御取計万々奉レ願候

一書經輯録万一相成候ハ、大誥篇ハ一二冊ニても借用仕度候事

一七月廿二日筑州・飯小・周政着の事

尊大人六月二日之御書翰謹奉ニ拜讀候樹々亭田島立派ニ守護相成候由欣想之至ニ奉レ存候田圃之事ヲ武士たるもの

一日も忘れ間敷事と奉レ存候其説長けまそ畧置候

一伊豆七島圖現地見候處誠ニ虚妄之圖ニ御座候

一四書訓蒙輯疏委々ハ見不レ申候間良齋ナドノ説ト至極よく符合いし候由良齋至極よく出来候由被レ申候事

一武教全書張註(張久右衛門の註)なるも勝テルト申候得共服し難ク奉レ存候胸中之成見を以テ人ヲ壓倒せると申候得テ鳴程尤も相聞

素ハ入々論し候得そ一々負もセズ既ニ素水翁も少々下問之形ニ近日常戰法城築七條大星三重等之會別ニ日ヲトシ

秋元但馬守様内 竹中圖書助内  
每月三度宛宮部鼎藏・三科文次郎・長原武及ヒ矩方ト四人講習切磋可仕申事ニ御座候宮部ハ大議論ニテ好敵

手ニ御座候先達ル主戰客戰先後之論主戰客戰三者之條先後之論人質用捨之論等素水も惶惑して黙し居候様之事

も両三度計有レ之快甚々々、素水旧來之門人ニ長原・三科計ニ御座候長原ハ頗ル讀書之力も有レ之面白ク候此節聖武

ハ乏しく御座候  
記對讀長原・宮部及ヒ矩方更々官邸ハ曳受申候ソレハ扱テ置何分先師以來手沢之存る書多く見せして胸中之

成見ニテ壓倒スルも時有るハ窮る事有レ之候宮部ハ流書ハ大分博ク見居申候

一漢文書翰辭論之至ニ可有レ之奉レ存候間御氣付筋後鴻奉レ待候彼書ハ少々謂レも御座候長井雅樂歸國候は、決る相聞

可レ申候御熟考万々祈々

頑弟大

家賢兄様

(萩市杉相次郎氏藏 校合濟園)

五六 父叔兄に贈る

嘉永四年八月五日 松陰在江戸 父叔兄在萩

庚子游草中村百合藏歸着申候上誰ニあり共御寫させ被レ成御差越奉レ願候當地ニテハ多忙ニテ終ニ得寫不レ申候間奥羽行之爲入用御座候事

漫遊文章も自然好便御座候ハ、當年中ニ御送り奉レ頼候事

七月十七日 家長兄々之書今月四日落手仕候先以秋暑強ク御座候へ共舉族御無異奉ニ珍喜ニ候頑兒姪弟碌々脩学仕候間

乍レ憚御慮安被ニ思召ニ候様奉レ祈候

一此一幅湊川ニる買得當地に参り候る表装仕候表装代三匁八分ニ御座候懸物類を兼ふと飽迄もきらいニ御座候得共此幅と玩物之訳とも違ひ座右之銘ニも代り候故奢り申候幸便ニ付さし送候間御両家間其御志被レ爲レ在候方に御懸被

レ成候様奉レ存候百非・均等ク画トハ並へ懸らるゝものにてハ有レ之間敷奉レ存候

因云、表装代能々御勘合被レ成萬一當地之分手際宜く且下直とも被ニ思召ニ候ハ、私に留中ニ少々御仕立可レ被レ成哉先達テ村田翁カ書テ吳タル類、葉山ニテモライタル一齋ノ書昔ヨリアルヒヤクコク(百谷)カ畫ノ類

又云、方今御取締之諸士中専ら節儉相用候節奢りニ當り不可レ然事とも奉レ考候

一先達る玉丈人ハ被ニ仰越ニ候條件之内御留守ニ相成候るも自然事有レ之候節ハ御國伺ニ不レ及歸らま候様之道之事中谷に話し見候處兼る其道を開け置候事ハ六ヶ敷候併何歟差懸り候有レ之節ハ役ニテ参り居候ものハ支容易可レ有レ之由申候故夫迄ニ致し置候又浦賀行之如く近地に御暇之事ハ話不レ申候既ニ來早春ハ奥羽行を計り候積ニ御座候處十ヶ月之御暇被ニ差免有レ之候へと其上ニ又兼る願置候もと相考差控居候來春末夏初にも歸邸可レ仕候間其後万一蓬桑之心起り候へと御國伺を待可レ申候

宮部詩を見せ候故次韻仕候常例之癖詩御吟柄にも相成間敷却テ御擧眉之種りとも奉レ存候得共夫ハ扱置録上仕候御叱正萬々奉レ祈候

君不見宇宙振古豪傑士、弘量邁志自絶群、渭陽隆中漁農伍、有時赫々雷粉礮、當時蛇伏爲ニ何事、眼透韜略與ニ典墳、方其爲龍興ニ雲雨、入則經國出統軍、昇平節歲息鼓鼓、人傳海外兆妖氛、發言盈庭誰執咎、墩臺礮

策粉々、世間滔々脚口者、吾且無<sub>レ</sub>論狗與<sub>レ</sub>罽、歎<sub>レ</sub>古慨<sub>レ</sub>今世誰有、鞭策警勵獨仰<sub>レ</sub>君、

一國鈔十八匁七分懷中ニ殘居候浦賀行之節雨ニ逢懷底迄濕候故アノヤウニ成り申候

一井上與四郎<sub>ノ</sub>書來り候處不<sub>ニ</sub>敢當<sub>ニ</sub>之<sub>レ</sub>言而已多く嘲弄歟とも被<sub>レ</sub>考答書眞じ先<sub>ニ</sub>てハ相調不<sub>レ</sub>申候故失禮ひし候間折も御座候ハ、宜しく御演述奉<sub>レ</sub>頼候壯太郎事頗る哀情ニ通し居同舍ニ相成候ハ、一入世話相成可<sub>レ</sub>申候此段をも可<sub>レ</sub>然御致意奉<sub>レ</sub>頼候

八月五日認置

大次郎矩方拜具

房相漫遊日記長井雅樂<sub>ハ</sub>らし候處誤る取歸り候付万<sub>一</sub>御目<sub>ニ</sub>ともふ<sub>レ</sub>ま候ハ、御送り奉<sub>レ</sub>頼候別ニ稿本無<sub>レ</sub>之候

家嚴君

玉丈人

家長兄 座下

(萩市杉相次郎氏藏 校合濟<sub>印</sub>)

五七

父杉百合之助に贈る

嘉永四年八月九日

松蔭在江戸  
父在萩

今日仕舞次第中井次郎右衛門手附彌作<sub>ハ</sub>るもの其外爲<sub>ニ</sub>御飛脚<sub>一</sub>御國被<sub>ニ</sub>差返<sub>一</sub>候由に付一書呈上仕候當年<sub>ニ</sub>秋暑強<sub>ク</sub>候へ共彌以 嚴君北堂を始<sub>ニ</sub>闔門御康寧可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>在珍喜不<sub>レ</sub>尠奉<sub>レ</sub>存候<sub>ニ</sub>頑兒無異修學仕候乍<sub>レ</sub>憚御放念奉<sub>レ</sub>祈候扱<sub>ニ</sub>傳介事先達る中谷<sub>ハ</sub>申入置候處此間も被<sub>ニ</sub>仰聞<sub>一</sub>候付又々申入置候間左様被<sub>ニ</sub>思召<sub>一</sub>候様奉<sub>レ</sub>祈候 小田村伊之助弟小倉健作到着同人事英

氣勃々切偲之益<sub>ヲ</sub>得<sub>レ</sub>此節も一入相勵み申候

一貧一富若<sub>ニ</sub>浮雲<sub>一</sub>、短褐長衫亦詎分、任重脩<sub>レ</sub>文兼講<sub>レ</sub>武、業艱審思與<sub>ニ</sub>多聞<sub>一</sub>、良朋偲切鞭<sub>ニ</sub>忘情<sub>一</sub>、疑義推究解<sub>ニ</sub>糾紛<sub>一</sub>、斯會斯機<sub>時</sub>寧可<sub>レ</sub>失、遠遊何曾憶<sub>ニ</sub>鄉粉<sub>一</sub>、

右健作<sub>ハ</sub>詩之韵ヲ次候處如<sub>レ</sub>件御擊眉之種ノミ錄上仕候

此度之御飛脚<sub>ハ</sub>定る御發駕之御日取り<sub>ニ</sub>はり候哉と奉<sub>レ</sub>察候併未<sub>タ</sub>耽<sub>ト</sub>之所承り不<sub>レ</sub>申候孰<sub>キ</sub>之道近々<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候處左候へ<sub>ト</sub>出足人も逐々<sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之故</sub>此書<sub>ト</sub>畧々認置候間此段可<sub>レ</sub>然御思召候様奉<sub>レ</sub>頼候楠公石碑之懸物成就候付石津新藏<sub>ハ</sub>頼み置候其内<sub>ニ</sub>も書狀相添有<sub>レ</sub>之候間左様御承知奉<sub>レ</sub>頼候秋暑御保養奉<sub>レ</sub>祈候

八月初九

頑兒矩方百拜具

又白、御國秋暑<sub>ニ</sub>如何御座候哉爰許<sub>ハ</sub>至る強<sub>ク</sub>御座候<sub>ハ</sub>し御屋敷中<sub>ニ</sub>勿論世上<sub>ニ</sub>も流行病<sub>ハ</sub>と有<sub>レ</sub>之様子<sub>ト</sub>終<sub>ニ</sub>承り不<sub>レ</sub>申候間此段御放念萬々奉<sub>レ</sub>祈候以上

尊大人膝下

尙、差急候内相認草々突々多罪至極恐縮仕候事

(外封裏)御國二千里への狀ニ珍敷畧封万々御赦免伏祈<sub>レ</sub>之

(外封表)家嚴君 膝下

平安

頑兒矩方

(萩市杉相次郎氏藏 校合濟<sub>印</sub>)

五八 × 兄杉梅太郎より

嘉永四年八月九日

兄在萩  
松陰在江戸

(前文關)……剛之由欣悦存候事

一 爰元舉族不<sub>レ</sub>殘無異之事

一 玉木が書翰此度不<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>差出<sub>一</sub>候間迂拙が平安之由可<sub>二</sub>申越<sub>一</sub>様との事

一 前兵兒謠鳴程

一 肥前侯御作初る承り英主之作と可<sub>レ</sub>申物なる可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之と存候事先年ノ歲晩作  
ト同調ト存候

一 鎌倉御止宿之由彼是北堂を始メ宇野・大藤こても大欣悦之事

一 中井手付善次郎も玉木に不<sub>レ</sub>參候事

一 士道要論御會讀之由御快論可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之と致<sub>二</sub>惣像<sub>一</sub>候追付劍槍稽古之人々帰着之上相叩度存候尤要論も未見不<sub>レ</sub>申此度初る名目モ承り候僻郷ノ寒書生可<sub>レ</sub>憐々々

一 兒左・彌次挫<sub>二</sub>銳氣<sub>一</sub>共不<sub>レ</sub>致哉御不審之趣致<sub>二</sub>噲候<sub>一</sub>兒左對こ銳氣も効々少も挫不<sub>レ</sub>申對策も何トヤラ色々申釋有<sub>レ</sub>之候彌次も例之通黙々然たり

一 御日記太吉に御頼之由承知致候其後江向藤井に罷越太吉を尋候処一應歸郷仕其後出萩不<sub>レ</sub>仕之由こる未會面不<sub>レ</sub>得仕候事

一 鄙稿御叱正之儀遠路懇々致<sub>二</sub>御頼<sub>一</sub>候処不<sub>レ</sub>敢當一抔と被<sub>二</sub>仰越<sub>一</sub>甚失望罷在候実ニ朽木糞土不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>雕朽<sub>一</sub>々々不<sub>レ</sub>屑之御教誨共哉と致<sub>二</sub>畏縮<sub>一</sub>罷在候事(第四卷詩文評、杉梅太郎文參照)

一 御賣書辭之由是又御同意之事此節堪忍料取下ケ相成候ニ付右之以<sub>二</sub>心遣<sub>一</sub>金五兩爲替カッセニ<sub>レ</sub>此度小野生に頼<sub>二</sub>差越候間官府御乞合御(耕之助)

取下ケ被<sub>レ</sub>成候る隨分澤山ニ書籍類御賣入相成可<sub>レ</sub>然存候又候及<sub>二</sub>懸誓<sub>一</sub>候ハ、其節之手段可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候事

一方正學四冊文章軌範三冊同人に頼<sub>二</sub>候事

一 御道具辰二郎々書早速宇野に届ケ候事

一 與<sub>二</sub>小嶋<sub>一</sub>、復<sub>二</sub>中村<sub>一</sub>之御二書拜見之儀彼人々ハハ乞置候へ共未々見せ不<sub>レ</sub>申候小嶋に御與之書漢文と申事此度初る承り候事

一 纂論葉山に届キ候段承り大ニ致<sub>二</sub>安心<sub>一</sub>候同人之書狀乍<sub>二</sub>早晚<sub>一</sub>面白ク返復誦讀致候先書と有<sub>レ</sub>之分も御國に參り不<sub>レ</sub>申御親類様と有<sub>レ</sub>之と井上與四郎と申事二候二艘之異國船之事御國こる丸ニ噲無<sub>レ</sub>之御手當方ニテモ同断之由之事

一 中村百合朝夕御付合之由同人帰國之上ハ御學業御氣色彼是之御様子委曲相尋度待居申候

一 二十日前廣が東風颯々數日々強く相成肉食之衆も深く被<sub>二</sub>氣遣<sub>一</sub>候様子なる 御靈社ニテハ六日ヨリ二夜三日宮崎伊與八幡椿社

南明寺ニテ七日が同様風颯御祈禱被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>六日が俄ニ邑宰中不<sub>レ</sub>殘出役被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>候処六日ノ夜ヨリ風颯リ雨降り候処所詮風替し兼

昨八日が少々風立敷至極氣遣申候(後文關)

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟慶)

五九 父叔父に贈る

嘉永四年八月十七日

松陰在江戸  
父叔父在萩

一 筆啓上仕候 殿様益御機嫌克昨日御發駕被<sub>レ</sub>遊恐悦至極奉<sub>レ</sub>存候追々御順行と奉<sub>レ</sub>察候於<sub>二</sub>御國<sub>一</sub>こそ嘸々御競と羨山敷奉<sub>レ</sub>存候爰許秋暑甚敷候處昨七ツ前が一雨を得至る凌好相成候間御地如何哉と遙念仕候

一 伊助固屋も固屋中<sub>二</sub>取込住居申候<sub>一</sub>昨日が壯太も參り候健作・壯太と伊助が舊舎に住候恒太・大は舊<sub>二</sub>居<sub>一</sub>各(栄道)松陰の通稱大次郎

四疊半一間宛に割據此節改革當分にて書冊衣服共整々堂々といふし有<sub>レ</sub>之候間逐々流弊出不<sub>レ</sub>申候様仕度候仕舞揚ケ



候當分暉麗かる事古々然り其情況御察可被成候事埒もなき事一笑

一阿部善七着未タ緩話を得を

一隣局林壽昨日(林壽之進)麻布(麻布長州藩邸)に参り候事

一炊子ハ弊舎四人とも佐々木之僕に相頼候事尤々は費用、上被立下ニ由最初ニも別ニ一僕をも可被立哉之評も

有レ之候へ共却る煩を拵候様之もの且隣壽除き候へ却る淋しく相成候故隣僕も受合候事を好み候由ニ付一僕ハ無

レ之様致しモラヒ候乍然 君恩之重た上ニ又一を添へ候る報する所以のもの一ツも無レ之惶恐仕居候のみ御座候事

一送(第一卷末焚稿參照)中村百合藏(七巻)ニ序、送ニ中谷松三郎ニ詩、無レ據認免遣し候得共意に満さる處多く候故態ト録上不レ仕候他日改竄之上且

々辭理相通候様ニ共相成候ハ、録上可レ仕候

一右御發駕恭悅迄如レ斯ニ御座候追々書翰差出し候事ニ付申上へき事無レ之候是ハ一人御煩務ト奉レ察候拭レ目の事も多

く可レ有レ之承り候る興ニ起情頑ニ仕候様成事も逐々承知仕度奉レ願候

一昨夜武士訓ヲ讀ム其内歌多キ中ニ一首

何事もあらぬといふはなきものをならぬといふ(は股カ)なさぬなりけり

一御發駕後の情思索然滑稽も出不レ申候昨日ハ四人對坐書ヲ讀む始終真じ免なり併邸中鎮靜ニ相成稽古事しみ込候方

も被覺候なり

八月仲七

頑大百拜具

杉様

玉木様

(萩市松陰神社藏 校合濟)

六〇 兄杉梅太郎に贈る 嘉永四年八月十七日

松陰在江戸 兄在萩

一矩方身上之事梨(原梨藤本)藤にも畧話し置申候其趣と愚意ニ先(安政元年)寅之御下向之節迄と奉レ存候まらし父叔兄長尊意如何をも

不レ存事ニ付御在國中ニ叔父等ハ右之趣御相談被ニ成下ニ候様御頼仕候左候る丑(嘉永六年)之御登り之節何分之儀返答承度候間得

も御熟話被下へ候於レ愚と素々天命ニ任せ候事ニハ候得共三年之修業位ニて何も出来申間敷天下英雄豪傑と多きを

のニて其上ニ駕出仕候事ハ中々愚輩之鈍才ニてハ俄ち出来可レ申とも思はれど我往ニ一步ニ寇亦一步ヲユク之道理況

しる愚鈍をのハ人の十歩百歩之間ニ漸々一步ヲ移し候位之事にてハ三年五年ニハ間ニ合申間敷候夫故死而後已を以る

自ら戒免候事ニ御座候まらし是ハ外ニ馳せ人ニ勝を求る事ニ相成深く懲をへき心ニ御座候間一体武士之一身成立ハ

さし候事何共無ニ覺束ニ候故愚劣あらも緩々居候ハ、何れ一つともハ得可レ申哉と存し居候事ニ御座候是藤太に話し

候意ニ御座候間宜敷被ニ仰合ニ候様奉レ頼候

武士之一身成立無ニ覺束ニ誤左之通

一是迄学問進も何一つ出来候事無レ之僅ハ二字ヲ識り候迄ニ御座候夫故方寸錯乱如何ぞ哉

先歴史ハ一ツモ知不レ申此以大家之説ヲ聞候處本史ヲ讀サレハ成ラズ通鑑ヤ綱目位ニてハ垢ヌケ不レ申由二十一史亦浩

澣<sup>(ホ)</sup>ナ<sup>(ホ)</sup>ルカナ頃日トホ<sup>(ホ)</sup>史記ガ始免申候

史論類綱鑑之初免ヲ見候<sup>(節カ)</sup>も多キカナ大家ハ急需トハ不<sup>(ホ)</sup>申候へ共閑暇之説見度存候

兵学家ハ戦國之情合ヲ能々味候事肝要ト奉<sup>(ホ)</sup>存候其情合ヲ味<sup>(ホ)</sup>ハ覺書軍書戰記之類学者衆之埒もあ<sup>(ホ)</sup>た<sup>(ホ)</sup>もの<sup>(ホ)</sup>と被<sup>(ホ)</sup>申候もの、尋思推究ノ功を加へ候ハ、少々自得之處も可有<sup>(ホ)</sup>之歟ニ被<sup>(ホ)</sup>考候今武教全書中ニも其情境茫然せし<sup>(ホ)</sup>得心行不<sup>(ホ)</sup>申候事も有<sup>(ホ)</sup>之候へ共誰ニ問<sup>(ホ)</sup>るも能通し不<sup>(ホ)</sup>申候

此二条志ノミ<sup>(ホ)</sup>ニ未タ得果不<sup>(ホ)</sup>申候

經学四書集註位も致<sup>(ホ)</sup>二讀候<sup>(ホ)</sup>も夫テ不<sup>(ホ)</sup>申候宋明清諸家種々純儒有<sup>(ホ)</sup>之中ニも周程張朱其外語錄類文集類又明清ニも斯道ヲ發明<sup>(ホ)</sup>せる<sup>(ホ)</sup>人何限アラン夫等之論ハ六經之精華ヲ發<sup>(ホ)</sup>し候もの<sup>(ホ)</sup>ニテ皆読へきもの、由

此二条志ノミ

漢唐ヨリ明清迄文集幾許ソヤ皆々全集も見ルヘカラズ候へ共名家ノ分、文粹文鈔モノナト之中ニ就テ尤ナルモノ全集ヲ窺フベシ

輿地学モ一骨折レ可<sup>(ホ)</sup>申

武道ノ書も説ク所

砲術学モ一骨折レ可<sup>(ホ)</sup>申

異同アレ共一部ナラズ

西洋兵書類も一骨折レ可<sup>(ホ)</sup>申

士道要論・武士訓・武道初心集

本朝武器制も一骨折レ可<sup>(ホ)</sup>申

漸此三部ヲミル此外何ソ限リ

文章も一骨折レ可<sup>(ホ)</sup>申

アラン此も一骨折レ可<sup>(ホ)</sup>申

諸大名譜牒も一骨折レ可<sup>(ホ)</sup>申

算術も一骨折レ可<sup>(ホ)</sup>申

七書致<sup>(ホ)</sup>三集訟<sup>(ホ)</sup>ニ候間折訟<sup>(ホ)</sup>ヲ片言ニテハ行不<sup>(ホ)</sup>申候是も一骨折レ可<sup>(ホ)</sup>申

右思ヒ出し次第ニ記し見候得共何一つ手ニ付居候事ハ一つも無<sup>(ホ)</sup>之今<sup>(ホ)</sup>ら思ヒ立可<sup>(ホ)</sup>申候へ共何ト定免諸事ハ棄テヤ

リ可<sup>(ホ)</sup>申事無<sup>(ホ)</sup>之候且人經学アルコトヲ知テ兵学アルコトヲ知ラズ中谷<sup>(松三郎正亮)</sup>・棕梨等逢候度毎ニ經学ヲス、メ別ニ臨テ殊ニ叮嚀

之意ヲ致し候處矩方も兵学ヲハ大概ニ致置全力ヲ經学ニ注キ候ハ、一手段可有<sup>(ホ)</sup>之候へ共兵学ハ誠ニ大事业ニテ經学

之比ニ非<sup>(ホ)</sup>且代々相傳之業を慨興<sup>(ホ)</sup>せる事を圖ら<sup>(ホ)</sup>して願テ他ニ求る段何共口惜次第申さん方もあし方寸錯乱如何そ

哉

体中之骨何本有<sup>(ホ)</sup>之<sup>(ホ)</sup>ら不<sup>(ホ)</sup>存候へ共十本許りも折レ候ハ、跡ハイカチクヒ候猶之様ニ成可<sup>(ホ)</sup>申哉是も一つ之懸念

其他世上一統之人ニ且々並ヒ申度候へ共藝術ニ至<sup>(ホ)</sup>る<sup>(ホ)</sup>数ヲ知ら<sup>(ホ)</sup>を候

詩歌・茶湯・棋・書画・印・立花・能・謠・淨瑠璃、嗟々陋哉厭<sup>(ホ)</sup>へし厭<sup>(ホ)</sup>へし

僕所<sup>(ホ)</sup>レ学未<sup>(ホ)</sup>得<sup>(ホ)</sup>ニ要領<sup>(ホ)</sup>與<sup>(ホ)</sup>、欲<sup>(ホ)</sup>得<sup>(ホ)</sup>ニ言<sup>(ホ)</sup>ニ而定<sup>(ホ)</sup>申斯心之動搖、万祈万祈 <sup>(後文關)</sup>

(この書、本巻口繪所載参照)

(萩市杉相次郎氏藏 校合濟園)

六一 叔父玉木文之進に贈る

嘉永四年八月廿三日

一平安の事

右今八月廿三日朝山鹿會夕方聖武記會讀にて薄暮歸邸明朝筑前殿其外出足に付書翰認候間無之仍如件

八月廿三日

大次郎

文之進様

尙以前書の趣杉・佐々木其外へも御序の節宜様奉頼候孰れ近日御飛脚立可申に付萬一用事御座候は、其方へ申殘候「ツクトイフハミ、ツクノ」不レ入事ながら

一林子平六無歌の内板木なしと有之説承り申候子平海國兵談を著し候て上梓の念無己事候得共家貧にして心に任せ候處一人ありて合力の爲め板下は書遣可申由申候間子平大に喜ひ自ら人に雇はれ使抔仕、夜は按摩をうり候て錢をため拾ふに足り候へは直に一枚宛梓に上せ候との話承り申候六無の歌の由て起る所蓋板木なしに起り可申と奉考候亦以て子平を想ふへし

(松陰先生遺著所載 校合濟慶)

六二 ×兄杉梅太郎より

嘉永四年八月廿八日

兄在萩 松陰在江戸

前文關……ひ有之候ハ、題號被申越被下度候事

付り被書少々謂レと申事未タ聞へ不レ申候事

一來春と奥羽御壯遊之御企御美敷事候諺ニ所謂石龜ノジダンダニ御座候同斷ニ付孔方兄之事被申越致承知候此間五兩差登せ候ニ付二ノ割御切手取相成候節拾兩差送り候ニ可相濟哉尤當年中之費用も可有之ニ付夫計リニ右御路料可乏哉とも存候此時之事御入用ニ候ハ、申合せ如何様成りとも心遣可相成候間無御遠慮何分之趣後便御答可被申越候此條玉木申談ニ申越候事

付り同斷ニ付爲替之事委曲被申越御心入之程と忝存候併サスガノ丸橋其位之事と頼ニ承知ニ其取計いとし候

一事斯語三部輯録白鹿洞過ル廿五日仕舞次第出足にて新道舊塾ニ住居いとし候惣七御荷物送りニ御境地罷登候間頼差送り候處此書之方御落手と相考前便と願不レ能候事 \* (吉田家の持家で元玉木文之進の住居であつた松下村塾の事である) (山田字右衛門)

- 一費用付立致披見候鳴程十兩ソコラノ金ニ可書物も何程不買者（カ）の貴上
- 一士道要論壹本御買得候惣七歸萩之節ニ成り共御送り被下度致御頼候事
- 一御灸治とも如何哉醫師被申合御スエ可然存候何分養生之一儀御忘被成間敷候事
- 一珍書又と珍人も御座候ハ、名目共御申越致御頼候事
- 一此間（赤穴辰之進、白羽壽次郎、高須瀧之允）赤穴・口羽壽・高須瀧、毎夜習讀ニ來り候ハケ間敷候へ共是又難辭事ニ付致誘掖候事
- 一健作切悞之益有之候由是又一段之事ニ候勘介と歸萩仕候由此間も天野謙吉彼ら一生可概と詰罵致候事此と内々後患を可如何

八月廿八日

嘉永四年

七五



大次郎様

梅太郎

今日不<sub>レ</sub>圖<sub>レ</sub>椽梨手付ニ此間飛脚ニ歸リ候を見候ニ付貴況相尋候處夏來至<sub>ル</sub>御無病之由一段致<sub>ニ</sub>安堵<sub>一</sub>候事

(萩市杉相次郎氏藏 校合濟<sub>安</sub>)

六三 ×兄杉梅太郎より

嘉永四年九月七日

兄在萩  
松陰在江戸

(前文闕)

一過ル朔日飯田其外帰着一夜周布を訪致<sub>ニ</sub>閑話<sub>一</sub>御壯健且御出精之由委曲直左右承<sub>リ</sub>申候<sub>政</sub>之助も他日之成業を期し候<sub>ニ</sub>大次郎一人と稱し候事

一昨五日御日記彦九郎傳共漸落手致<sub>ニ</sub>一悶<sub>一</sub>候處御日記面白出来三句之御旅況可<sub>ニ</sub>想像<sub>一</sub>也彦九郎傳慷慨之氣を激スルニ足<sub>リ</sub>申候事  
八月十七日ノ貴札九月四日落手

御身上之事御案之廉書披見候右ニ付<sub>テ</sub>追々大人丈人方も御答可<sub>ニ</sub>相成<sub>一</sub>候處不<sub>ニ</sub>取敢<sub>一</sub>愚意氣付之処荒増左ニ相記申候

(中間闕)

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟<sub>安</sub>)

一知<sub>リ</sub>候人ニ有<sub>レ</sub>之間敷候中ニも光明<sub>ト</sub>文武合一眞ノ王佐ノ才と可<sub>レ</sub>申<sub>ル</sub>本朝ニも能<sub>ク</sub>兵を用ひ候人<sub>ト</sub>道を知<sub>リ</sub>候人少ク道を學<sub>ビ</sub>候人<sub>ト</sub>兵を不<sub>レ</sub>知<sub>ル</sub>と存候處文武一體眞ノ兵學被<sub>レ</sub>致候ハ、君ヲ堯舜ニ致し天下を平治スルモ兵學中ノ事と存候何卒此業ヲ恢興被<sub>レ</sub>致外ハ天下後世をして兵學と申者をまらし免内ニ有<sub>テ</sub>祖先をして地下に匿セシメラレンコトヲ希候

一來論之通りニ骨折<sub>レ</sub>候<sub>ル</sub>鳴程イカヲ喰ひ候猫ノ氣遣御尤ニ候三折<sub>レ</sub>臂爲<sub>ニ</sub>良醫<sub>一</sub>トカ醫スラ然<sub>リ</sub>況<sub>シ</sub>此大業を任<sub>スル</sub>人拾本貳拾本ノ骨<sub>ト</sub>折<sub>レ</sub>も可<sub>レ</sub>申<sub>ル</sub>併恐<sub>ク</sub>ハ折<sub>リ</sub>候日ノ足<sub>ヲ</sub>サランコトヲ夫故緩急之御差引を以御修行肝要ニ候之ヲ要スルニ文武合一ノ一大

兵家ヲナスニ歸スルノミ多端ノ中御取捨ナクテハ大業ハ成<sub>リ</sub>難カルベシト存候

九月七日

梅太郎

尙々玉叔此節多忙ニ<sub>テ</sub>書狀不<sub>レ</sub>被<sub>ニ</sub>差出<sub>一</sub>候間此段申遣候様との事

大次郎様

(萩市杉相次郎氏藏 校合濟<sub>安</sub>)

六四 兄杉梅太郎に贈る

嘉永四年九月十五日

松陰在江戸  
兄在萩

前略

殿様益御機嫌好順々被<sub>レ</sub>遊<sub>ニ</sub>御歸國<sub>一</sub>近日御歸城と遠想恐悅至極奉<sub>レ</sub>存候<sub>ニ</sub>嗚々闔國士民の志氣競可<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>不堪<sub>ニ</sub>欽羨之至<sub>一</sub>候

一本月五日御飛脚着同九日木梨并小野等<sub>ニ</sub>書逐々<sub>一</sub>拆開奉<sub>ニ</sub>拜誦<sub>一</sub>候

一同十一日伏見より來<sub>リ</sub>候御飛脚立同十三日井上壯・永田健吉・井上箕<sub>八</sub>兵衛等出立仕候處御飛脚事急なり旁にて兩度

共寸楮をも不<sub>ニ</sub>差出<sub>一</sub>失禮萬恕奉<sub>レ</sub>希候

本月五日の御書へ當る答

一御國御靜謐舉族御康寧欣慰欣慰

吉田菊は餘り付合不<sub>レ</sub>申候

一御國兩處の火事仰天

一武藝は迎も無<sub>二</sub>其暇<sub>一</sub>に付凡て休み申候且兼常・小笠原歸り候故教て吳候人無<sub>レ</sub>之候  
(未熟稿参照)  
 一復<sub>二</sub>中村道太<sub>一</sub>書大半虚喝論するに足り不<sub>レ</sub>申候流石の大都天下の人畏るへからざるはなし併御高論尤と奉<sub>レ</sub>存候今に當て左様仕候外無<sub>レ</sub>之候

本月九日來の御書へ當る答

小野生へも未だ得逢不<sub>レ</sub>申候夫故書翰只様遅く落手仕候生九日を以て着府昨日御狀落手

一御用狀壹符即金五兩爲替の儀申來候と奉<sub>レ</sub>存候未だ官府へは懸合不<sub>レ</sub>申候此節は懸聲仕居大旱の雲霓呵々(聲カ)

一方正學四冊文章軌範三冊隨に落手

一二十日頃風の事大きにしんきんを勞し候處確報を得掛躍

一乍浦集詠抄二冊上木横山湖山と云詩人抄す湖山は山鹿にて度々面會差たる人物にては無<sub>レ</sub>之徒らに詩商人と被<sub>レ</sub>思候

右集詠宮部か所藏借讀一邊仕候宮部曰慷慨激烈の音少くして悲愁慘愴の意多し所謂亡國之音なりと知言と奉<sub>レ</sub>存候

一奥阿武郡行妙々美へしく三千里外を知るも何の用かあらん近く二邦の地理人情を精詳にすへし

一横井其外又三人來り候由妙々何月何日より何月何日迄居候段相分り候は、後鴻奉<sub>レ</sub>待候東肥人の心懸如<sub>レ</sub>仰可<sub>レ</sub>畏候(小補)

宮部などの事毎度敬服仕候今日同人方にて横井か遊歴中宮部へ遣し候紙面中程少し見申候諸國の事大分論し有<sub>レ</sub>之候

一御發駕後より當地は逐々時候もかんやひに相成り申候尤九月に相成候ても夏服相用候様一應御沙汰相成候處御沙汰

は蛇足同様又候七日より冬服相用候様被<sub>二</sub>仰出<sub>一</sub>候此節は良氣候申分無<sub>レ</sub>之讀書の時を得候事

一同舍齋井上<sub>(鳥山新三郎)</sub>等へ世話に相成申候彼家へ可<sub>レ</sub>然の致意奉<sub>レ</sub>頼候同人衆私より宜敷様申上候様に被<sub>レ</sub>申候事

一鍛冶橋外の隱者方へ近日は毎度参り申候此人は中村百合藏能存し候

一藤堂侯藩中土居幾之助方へ此内参り申候此亦百合藏存し候(土居有格)

今宵も急々に此書相認乍<sub>二</sub>早晩<sub>一</sub>萬々失禮奉<sub>二</sub>恐入<sub>一</sub>候事

一自得奥義 五冊

一事斯語一部なりとも直段御附記し尤御國金子相場にて

右好便御座候は、御送り奉<sub>レ</sub>頼候事斯語の事先書にも申上候通肥人へ遣し候分に御座候間願くは年内に参り候様祈る所に御座候來春か若くは當晩冬よりにても奥羽行を謀り候に付熊府人へは夫より内に一部なりとも附與し置度奉<sub>レ</sub>存候

一奥羽行の事は後便又々申上へく候處先十二月正月の交より正二に三月丈けの事の積りに御座候  
先は勿々略筆

頑弟大

尙、秋冷彌増候間兩慈を始め闔門御保重此事に奉<sub>レ</sub>存候三千里外の遠想不<sub>レ</sub>入事歟

家伯教長兄 玉梧下



六七 父杉百合之助に贈る

嘉永四年九月廿一日 松蔭在江戸  
父在藏

八月念七日の御慈教本月念一日拜受不<sub>レ</sub>取敢<sub>二</sub>奉復の寸楮相認申候先以作方の儀誠に十分にて五十年以來の豐年の由何よりの可<sub>レ</sub>賀事に奉<sub>レ</sub>存候當地に罷居他藩人と應接仕候へは自然と吾公國民爲<sub>二</sub>御取救<sub>二</sub>早御暇御願等の儀は何共御國儲蓄を始め民政向兼て御不行届哉に相聞可<sub>レ</sub>申哉と氣の毒に相考候愚意御座候殊に早御暇に付ては世上區々の評判有<sub>レ</sub>之當年も山潮てやらにて海邊貳拾里計も田地被<sub>二</sub>押流<sub>二</sub>候とやら荒唐の風説専ら有<sub>レ</sub>之由御國に居候は、御早下りを幸とする氣に可<sub>二</sub>相成<sub>二</sub>候處爰許にては左様には得思不<sub>レ</sub>申候就ては年穀大稔慶賀不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>之奉<sub>レ</sub>存候且當年は日本國中總て大豐作殊に奥羽邊尤も宜しく候由乍<sub>二</sub>私事<sub>二</sub>東行の爲にも大にきほひ申候近年連歲穀物不<sub>レ</sub>宜由哉の處今年の豐作誠に可<sub>レ</sub>賀事に奉<sub>レ</sub>存候元來凶と豐とはかはる<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之ものとは申なから凶續き候へは三五年も凶續き又豐へ戻り候へは五七年も豐續き候ものにて候哉左候へは當年より始とし三五年も豐續き可<sub>レ</sub>申哉夫は兎も角も去年の事をいふて鬼に笑はれ候よりは寧<sub>レ</sub>此機に乗し當年より始とし儲蓄の御心組專要に奉<sub>レ</sub>存候是則武士僅なりとも 殿様より知行をもらひ百姓共に養はれ手を拱して美食安坐仕候 君恩國恩に奉<sub>レ</sub>報候寸志迄に相當り可<sub>レ</sub>申哉と奉<sub>レ</sub>存候間千萬無<sub>二</sub>御疎<sub>二</sub>事とは奉<sub>レ</sub>察候へとも一家一族郷黨朋友迄其志ある人々へは被<sub>二</sub>仰合<sub>二</sub>度御事と奉<sub>レ</sub>存候儲蓄の制は阿兄様平生御研究の御事にて妄りに申出候も釋迦前説法か若くは丸橋前爲替の類とは奉<sub>レ</sub>存候得共私には新聞と相考候故下に申上候先達て山鹿會の節守城篇兵糧直様(直)の所にて段々議論有<sub>レ</sub>之候處(も)にて籠<sub>レ</sub>候よりは糶(はしひ)にて籠<sub>レ</sub>候方宜敷よし諸説に御座候糶は碎き粉に致し置くなり即道明寺にて仙臺の名品なり糶よりは寒中に製し候糶は蟲附不<sub>レ</sub>申候よし一の徳、又糶は穀

のみ多く量あかり候て不<sub>レ</sub>宜糶にて置き候へは量あかり不<sub>レ</sub>申二の徳、俄に出陣の節杯尤便なり三の徳、且仙臺其外總て奥羽邊の米は秋霜降らざる内に苜取る事を主とし候故未た青き稻かり候由に付別て糶は蟲附と申事に御座候〔是れ御國にては不<sub>レ</sub>入論には御座候得共會座の話皆させたし申候萬一奥羽買入の事とも有<sub>レ</sub>之候は、亦心得あるへきとか〕豊後岡藩には早晚頃よりの事歟御國中口別とか諸士中口別とか毎年壹升宛糶を造り官庫へ收め候處近年は粒米狼藉なる事の由又熊本に清正公の籠<sub>レ</sub>ひ置れたる糶今以有<sub>レ</sub>之候處少も蟲附損し等無<sub>レ</sub>之由同藩近來の籠<sub>レ</sub>ひは梔子の汁(こ)にて米を浸し梔子の汁にて湯を沸して蒸し候て糶を作り候由是れ尤も蟲不<sub>レ</sub>附よし熊本人會席にて話し申候何分とも如何様になりともして豐熟の時を失はす儲蓄有<sub>レ</sub>之度様奉<sub>二</sub>企望<sub>二</sub>奉<sub>二</sub>企望<sub>二</sub>右の趣玉木其外も早速被<sub>二</sub>仰合<sub>二</sub>候様奉<sub>レ</sub>祈候一粒にても有<sub>レ</sub>之候得は御國の強みと奉<sub>レ</sub>存候吳々も食祿のものは凶荒には百姓を救ひ候心得當然の事に御座候時乎時乎不<sub>二</sub>再來<sub>二</sub>御國にも士人の内有志の人々十輩二十輩も有<sub>レ</sub>之候は、申合候て一社倉建立いたし度ものに御座候悲哉其人なし悲哉悲哉空しく豐年を失はん事悲哉士人の内にて社倉を創建仕候は、誠にいと容易事に可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候何となれば士は祿あれはなり其人なし悲哉

不肖兒矩方百拜具

尊大人 膝下

尚、此書匆匆中相認文言不都合誤脱倒轉簡に溢れ千萬大不敬奉<sub>二</sub>恐入<sub>二</sub>候得共難<sub>二</sub>黙止<sub>二</sub>儀故筆に任せ意を書し蚯蚓幅

を累ね候儘差上候何卒御赦免奉三萬祈一候

(松陰先生遺著所載 校合濟慶)

六八 兄杉梅太郎に贈る

嘉永四年九月廿三日

松陰在江戸  
兄在萩

今朝の書を得候處此條も無益ニ相成候事

○奥羽行金之事宜敷御周旋奉レ頼候夫ニ付一笑 史記張釈之傳、張廷尉釈之者、堵陽人也、字季、有二兄仲同居、以レ蓄積財也 爲三騎郎、事孝文帝、十歲不レ得レ調、無レ所知名、釈之曰、久宦、減三仲之產、不レ遂、欲ニ自免歸ニ云々、矩方レ遊學功を見る所を亦此類ナリ

○重陽之日如何之御暮ニ候哉御作共ハ無レ之候哉回顧仕候へ去年今日崎陽ニ在り今年今日在武昌、遙思兄弟登ニ高処、レ茱萸兩度重陽ニ負キ申候詩を爲ラン欲して聞レあし

九月念三雨天

○先達る之漢文牘可レ取事も有レ之哉被ニ仰聞ニ御獎勵之一術とハ奉レ存レあレら厚辱此事ニ奉レ存候彼文ニ付る中村百合藏一論文ニ著し申候愚論とハ相反し終ニ柄鑿難レ容候る終り申候御一覽被レ成度奉レ存候

○久保生出精ニ御座候哉唐鑑妙々レあレし一夜ニ何拾枚程参り候哉早ク御運せ被レ成候る他書に御移り可レ然奉レ存候相濟候ハ、言行録共宜レるる哉古賀之説レハ史論を讀レ益少しく事実を覺へ候方宜しき由レ古賀ハ本史を甚好はれ私レも讀候様進レ免レれ申候如何様事實之始末成敗を熟覽仕候得レ自ら論を待レさるものニ可レ有レ之候久保生など

年少才富二十一史を讀候様御も、免レ然奉レ存候尤申も疎之儀レニ別ニ卓識も可レ有レ之卓識有レ之候ハ、申聞せ吳候様是亦奉レ頼候二十一史ノ内三史史漢五代史文よろしきと哉尤敷遍讀へし或人云漢唐明代之事最精しく記得レべしと此亦其理レある事なまハ御玩味可レ被レ下様同人に御傳言奉レ頼候且日本歴史軍書類尤力を用ゆべきもの之由或人ニ聞候得共未レ暇レ及其人云御藩之人ハ日本之事ニ暗し私輩と國命を辱むる段不堪汗背ニ候此等之事承りあら火吹竹流直様ニて人ニ讓り人をして大名を成し免レ己其レ爲免レ又鞭を取レ從ふニ至らんを遺憾万々然共朋友之義難ニ默止二仍如レ件

○勸農固本錄二冊 古本舖ニトコレも餘多有レ之ものニ御座候間勿論可レ被レ成ニ御覽ニ候間如何様之ものに候哉

○金ハ如何様足り可レ申候御周旋千万御面倒奉ニ欽謝ニ候

○事斯語之事先日も申上候間此亦丸橋前爲替毎々レ賑々

○桑生近況ハ候哉同人中谷松ハ懇意ニ會共仕候哉二切ニ察し候事も御座候間如何哉松ハ有志之士ニ生等親しく交り候ハ會之様子愉快之御遠想甚迷惑仕候紙面之事ハ仰山ニ聞ゆるものニ其実を質し候へト誠ニ索然たるものニ御座候毎々益レ可レ有レ之候松ハ学力ハ左迄畏レも不レ致候間志ハ迎も久保・淺野諸子の倫ニ非レを毅然成人ニ尤レ学力も淺等ハ勝るへく歟桑生ハ桑原々中谷松ハ其事をいふる嘆候間三千里外へ遊候得レ事々皆虛名を得國ニ歸るニ至るハ人ハ淺失望せし免レ少々得る所も併ニ泥を塗レり候段実ニ悲しむレへき由申候憂懼此事ニ御座候素ハ大丈夫立レ志行レ己レ得レ志弗レ驚レ厄而弗レ憂もの豈區々一毀譽之間ニ念を措レん哉然共聲聞過レ情君子之はつるとレ暴得レ大名ニ古人此ハ不祥と申候得レ矩方ハ憂懼御垂察万々奉レ頼候山田先生之退避ハ常言ハら終身此人之上ニ駕出レる事ハ迎も出來申間敷奉レ存候



○頼と忘レ候ハ一筆啓上以下之數行尤 家君に奉る書中ニ有レ之候故今更書不レ申候御赦有奉レ祈候郷書ニ對せる毎ニ  
思意多して不レ覺累幅憐ニ其愚ニ略ニ其礼ニ万祈候

九月念三日

吉田大二郎矩方(花押)

杉梅太郎様 人々御中

○今年和蘭風説書御覽被レ成候哉都下ニある未タ世間ニ流傳仕さる由世評ニモ當年之儀何故長崎ニ有翻譯之節御奉  
行所ニ通辭被レ召出奉行前ニ有翻譯被レ仰付譯稿を止免候事ハ不ニ差免ニ候由因レ是世間に流傳不レ仕と申事に御座候  
夫ニ付狐疑致居候御國評判いり、哉

○水府公明訓一斑抄今晚寫終り申候

凡六則

仁心ヲ本とすべき事

奢侈茂禁をべき事

諫言淺用ゆべき事

刑ハ刑をき二期をべき事

佛法を信をべららざる事

夷狄を近くべららざる事

通篇御氣象被レ伺感服敬服末篇銃船之論ニも及び武備ニ御心を用る(給)ひ實驗之御論誠ニ奉ニ驚嘆ニ候御覽被レ成候哉御手  
當方ニハ可有レ之ニ付玉丈人(と)に不レ珍歟

送ニ百合藏ニ序御序之節同人に御渡奉レ頼候同人に一書遣し度候得共何り空しく寒暄を述候迄之書ハ斷々乎往と  
復不レ仕約束故無レ據御頼仕候方一ムザト書翰(爰許ニ有大ニ世話ニ相成候事ニ付)し呵ラレ候る(高論無レ之を)と割りニ合不レ申候と申候由御口述奉レ頼候者らし老先生  
へも折節一書如ニ別封ニ此亦御頼仕候 ※第一卷末禁稿、途ニ中村七恭歸國序參照

彦根今侯之御歌

コタビ國入ノ折節領内ノ民共數多出迎ケルヲミテ馬上ニテカク讀侍ル

掩フヘキ袖ノ窄サヲイカニセン行道シゲル民ノ草バニ

惠マデハアルヘキモノカ道ノベニ迎ル民ノシタフ誠ニ

薩摩今侯之御歌

厚襟重テ寐テモ思フカナ貧キ民ノ寒キ夜ナ々々

右二侯之御咏実ニ人君之歌と一唱三嘆感涙ニむせび承り候儘火吹竹仕候御聞被レ成候哉

千万御苦勞奉ニ恭縮ニ候得共先書御頼仕置候庚子遊草之事宜敷様奉レ頼候

(萩市杉相次郎氏藏 校合濟園)

六九 ×叔父玉木文之進より

嘉永四年九月廿四日

玉木在萩  
松陰在江戸

一蓋族平安之事

一石津新藏歸便之書中川宇右衛門同断之書追々披見其外歸着人かも御壯健之由承知大安心之事ニ御座候事

一新藏過ル十五日歸着書中之事承知梅(梅太郎)に委命し置追々差登せ可申候事

付楠公碑銘之懸物荷物未着之由にて落手不仕候事

一中宇一昨廿二日之夜歸着之事

一御尊志御出精之由追々承り大安心死而後已矣勿論可然事ニ候へ共保養之事ハ一大事御疎も有レ之間敷候へ共責馬劍術等相應之運動必々無御油断様肝要ニ候先頃御示し之高山子之傳も其意有レ之とる歟と覺候第一武士之嗜ミニハ養氣之端も相成事ニて昇を廢る譯ニて當るはしく候事

一愚夏分々少々不快之事も有レ之つゞ其後誠ニ強健殘熱も不レ被レ犯當節々冷氣之節ニ候へ共綿入類未膚ニ付さる位にて平年かて別る壯ニ相覺候何卒此分にて精勤仕度所祈候御放念可被レ下候事

一蟹行御学ヒ之由眞田様之御家中何某ニ説付らまゝとる哉と噂申者有レ之候有益無益之論毎々之事にて有レ之とる儀ニ候間いゝ哉其域を不レ伺ものゝ論ニて及間敷候間御益之處御聞せ被レ下度候事

附是迄不レ入事を論し候表推量のミにて何之見識有レ之とる之事にて無レ之候へ何卒実之損益承度候事ニ付本文之通

一宮部之詩之御次韻勃々之氣相歌々面白相調候様覺へ候外ニ送三人登富山ニ序其外深栖ニ承り候へと曹參々論々も其他も有レ之由ニ候間御閑暇共候ハ御示し被レ下度待人候事

一毎々御書中ニ滑稽相見へ則弄難之意も可相當哉至極面白く父母之遠想を慰免御尤ニ存候間時々御書加へ可然候事

一火事笠落手中并書經二冊同断深栖か藤井と未荷物着さる由

一用度之事丸橋が委細申越さるを畧レ之

一御同舍中執も精勤にて可有レ之無世話ニ可相成まゝし書狀之暇無レ之ニ付宜敷致意候様愚叔が申越さるを御噂可被レ下候事

一阿部善に同断

一兒初に同断例之一事爰元にて疎も無レ之心配之心得之段御申聞せ之事

其外替儀も無レ之飛脚差懸り眞之草畧相認不レ及ニ委細候追々之儀も決る無音勝ニ可有レ之候間幾重も御用心專一ニ存候以上

九月廿四日

文之進

大次郎様

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟齋)

七〇 叔父玉木文之進に贈る

嘉永四年九月廿五日

松陰在江戸  
玉木在萩

中村伊助に之狀僕之往來り又杉にありとも御頼被レ成候る相達候様奉レ祈候

百合藏に之送序之事ハ杉に書中にて御頼申上置候事

井上生無異出精之事 ○文曰、贈文を暫く御留置之事(文曰玉木附記して杉へ示したものである)

(小倉健作)

小倉生至る出精仕候まらし稽古之致方田村伊(小田村伊之助)共氣付申候哉ニ相見候間終日終夜孜孜兀々として四書集註に諸本之細

註書入のミ仕候間此を得心不仕候尤此夏ハ毎日相論し候に付面從後言之罪を免ま可申候得共人之惡口ニ當り候故聞た事ハ御聞ざるニ被レ成候様奉レ祈候全く以他に御沙汰御断仕候吳々同舍に不満なる事を三千里外に申越候事ハ内

省して甚恥ケ敷武士道ニ非すと存知あらざるにては無之候

九月廿五日

大次郎再拜

尙、幾回も御氣體御自重御奉公被レ成候様奉レ祈候以上

玉丈人様

又申上候令宵追々進歩と奉レ察候此節ハ詩經トレ程相濟候哉宍道恒太弟と共毎々恒太ハ書狀相遣し候間年輩ニ合せ候ルハ感信のものと奉レ存候何卒彼等ニ負さる様ニ御出精有之らしと所レ希ニ御座候彼等々上ト云ハ志小キ様聞ヘ可レ申ル、ヨリ天ヲツキヌク迄上ニテ 彼等か上に出候様 可レ有レ之候間其心得ニ御座候(細字朱書)

五経讀本長井・藤井・深栖・蜷川等ハ頼ミ候ふさし送り候間逐々御落手可レ被レ成と奉レ存候春秋經一冊留置候間後便ニ送り可レ申候何ぞ御入用之品御座候ハ、金ト一併ニ御申越被レ成候ハ、其處置可レ仕候

不レ入事御繁用中之御妨奉ニ恐縮ニ候併是亦情已む事を得を候

認方之草卒是亦下情御察奉レ希候(朱書)

(萩市杉相次郎氏藏 校合濟)

七一 兄杉梅太郎に贈る

嘉永四年九月廿七日

松蔭在江戸 兄在萩

別符仕出候後兒玉氏之一符被ニ相頼ニ候付又思ひ出し候る左之通申上候

一今日松下村塾之惣七着候りと相聞候得共未得合不レ申候兩三日之内ニ事斯語其外落手相成るくと奉レ存候惣七は萩

松下村塾舎即ち玉木の舊宅に住んで居るものである

一昨廿六日山鹿素行師忌日ニ付素水方ニ祭禮有レ之候但是年々之由肥後(鼎藏)も宮部方ニ有レ之由に御座候事 一金の事別封ニ此後被ニ差越被レ遣候十兩ニ有レ之候併是御羽行相整可レ申様申上置候得共能々相考會計仕候處十兩之金日別一朱宛遣ひ潰し候へそ百六拾日之料有レ之候

一朱ノ錢當地之相場ニテハ三百九十文ナリ旅中一日ノ費ヲ計候處宿料ハ三百文ナレハ餘ルヘクカ晝遣ハ九十文ニテハ足り兼申ヘクは大抵ノ積リニ

奥羽行之日數正二三(朔)三四ヶ月之積ニ御座候尤年内十二月中旬頃ハ出懸ケ常州邊跋涉仕り漸暖漸北候様致度宮部申候處先ハ夫ト決居候左候へそ旅中百三十五日計リニ御座候乍併遊行ハ兎角前方之積リハ日數延勝ニ付丁度百三十五日を積り候るハ其場ニ臨みさし問も可レ有レ之奉レ考候且遊歴中珍書奇冊など有レ之候ハ、時としては食指を動し申間敷も難レ計又人を尋テ候ニも時として少々ノ引出物持候様の事も可レ有レ之勞スリ切ニ有レ之無ニ覺束ニ候事

節季良齋・山鹿・佐久間各一分宛入り申候  
先日之五兩之内書林之り、一兩貳朱程彼内を取り候積りに御座候遊具も笠合羽物入袋地 少々調へ度品有レ之彼是五兩 圖道中記の類之内少し、ちり可レ申候處月別貳拾七匁ニ有レ之償ひ返し難く相見候節季ニそ少々モラヒ候歟も知レ不レ申候得共是ハ歲内ハ立候得と立候節ハ未タ下リ申間敷候就夫今三兩計りも才覺之道御座候ハ、十分仕合申候獨り旅に候得共(はカ)餓候時は乞食仕候も武者修行と申ものニ可レ有レ之候へ共他藩人同道故自然縣磐之節ハ人之厄害ニ相成候ニ至るへきも難レ計其段茂偏ニ懸念仕候右之通ニ候得と十五六兩を吃と耳をそろへ候故右等之案し無ニ御座ニ大ニ仕合申候

此狀相認候内ニ昨夜着惣七参り申候御送り之事斯語三部九本白鹿洞學規三枚書經三冊體ニ落手仕候暮ニ差懸り書翰甚草々仕候時雨聲瀟々鴈語嗷々

九月念七日

大二郎

梅長兄様

玉机下

昨夜史記漸ク卒業通讀可レ愧

(萩市松陰神社藏 校合濟)

七一 兄杉梅太郎に贈る

嘉永四年十月廿三日

松陰在江戸  
兄在萩

九月七日  
兩三日來小春之天氣牢晴可レ愛

御國管刑背を管候哉臂淺管候哉先達肥人ニ問はレ候得共知不レ申候肥人曰弊邑ニある堀原太左衛門仕置ニて臂を管チ候無レ左候る往々死ニ至るもの、由話し候國事を知らざる愧べし々々々々其後少微通鑑を讀候内唐ノ大<sup>本</sup>宗明堂針灸ノ圖ヤラミテ人ノ五臟背ニ連ルヲ知リ背ヲ管ツコト已シコト有レ之様覺申候  
又漢書刑法志、斬左止者、管五百、當劊者、管三百、率多死、云々、衛綰請、云々、當管者管臂、如淳曰、然則毋レ得レ更レ人、畢一罪、乃更レ人、自是管者得レ全、  
漢書を讀ニ依る思ひ出し候間臂と背と之處御教示奉レ祈候兼る之不穿擊振顔仕候

九十 九月十一日祖式縫殿着邸

十月十三日夜漢書蕭曹傳ヲ讀ム因テ一愚案ヲ發ス

日、何獨先入、收秦丞相御史律令圖書藏之、沛公具知天下阨塞戶口多少彊弱處、民所疾苦者、以何得秦圖書也、ト由是觀之レハ秦時、必有二簿、錄各所百姓所疾苦者也、因意本藩既有此等簿乎否、則已、苟無レ是、不レ得レ不レ待其人、長兄願勉之、蓋民所疾苦非一二、兩國郡數凡十數、先以郡爲經、以某所確確、某所租重、或早常爲害、或水常爲災、山少草者、林少薪者、海遠而船不通、路阻而馬難行、乃至民性愚點、民力強弱、民產贏縮爲緯、一々羅列、細大不遺、因論及興利除害之法、著一書、假令無補于民政、用功切鑿、或可爲他日處事之地、向發妄言、幸賜見容、喜幸無已、狎恩又白、不<sub>レ</sub>敢以佛面視長兄也、且白面生之迂論、願有所<sub>レ</sub>就正也、矩方頓首、  
任筆書意、初不<sub>レ</sub>起草、燕酒仍常、

著書之要、不<sub>レ</sub>必求速成、古老之言、田夫之說、官書所<sub>レ</sub>載、野乘所<sub>レ</sub>記、隨見隨聞、登<sub>レ</sub>錄一簿、稍々積成、久而大矣、是有<sub>レ</sub>關係于前事、故及、

中谷翁毎々之話ニて決る御承知可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>在と奉<sub>レ</sub>察候間翁曾て役目を替る時閑は乘して御兩國を廻歴致るをも存附諸本を比較して精しき御兩國圖を製し候處無<sub>レ</sub>間地方手元ニテヤラニ成り其宿志を遂げせ候故諸郡御代官其外の官員ニ合候度毎ニ委敷話を聞き右の圖ニ引合見候様いし候る御兩國の概要を知り候由話し有<sub>レ</sub>之候右御著述も有<sub>レ</sub>之趣

にて精しき地圖一面無之るを矢張茫然として津涯無之様可有之歟と奉存候

十月廿二夜認

隔夜易程傳會讀、同舍中

毎朝言行録同前、同舍人之外兼重讓藏來ル

十月念二夜二更認

劣弟大再拜

家伯教兄 座右

尚、追々寒冷相催最早極寒之裝束ニ相成候間御地いり、哉隨分寒氣御専用專一ニ奉存候臘月中旬ノ東行仕候へそ此書も勝々御答参り可申歟近日之内御飛脚出足可仕ニ付其節万々と申上殘候 (萩市杉相次郎氏藏 校合濟園)

七三 叔父玉木文之進に贈る 嘉永四年十月廿三日

松陰在江戸 玉木在萩

一 九月廿四日之御誨音本月十四日兼重讓藏ノ落手仕候先以蓋族平安奉<sup>圖</sup>拵候事

一 秋來殊ニ御強健被<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>在候由奉<sup>ニ</sup>大賀<sup>ニ</sup>候乍<sup>ニ</sup>此上<sup>ニ</sup>嚴寒<sup>ニ</sup>至<sup>リ</sup>候も御辟易不<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>成候様奉<sup>レ</sup>存候

一 蟹行之事ハ戲謔迄ニ御座候或作或輟取留候事にてハ無<sup>ニ</sup>御座<sup>ニ</sup>候何人ノ歟謬傳仕候と奉<sup>レ</sup>存候

一 詩文之事是亦被<sup>ニ</sup>仰下<sup>ニ</sup>候毎々報顔仕候詩ハ勿論念を絶申候文も未タ取留得學ひ不<sup>レ</sup>申候緒餘之事トハ申候得共各其法有<sup>レ</sup>之事之由にて中々卒尔<sup>ニ</sup>ハ學ハれ不<sup>レ</sup>申候來原良藏頗る意を専らにして文を作り申候大分出來候由佐世ノ家來

土屋彌之助若手ニハ類少き由何様文と一種の才有<sup>レ</sup>之矩方の如きハ終ニ學ひ候も無益と奉<sup>レ</sup>存候事

一 御帰城後別る御繁務と奉<sup>レ</sup>察候

一 學問之目算荒方立居候得<sup>ニ</sup>當<sup>ニ</sup>十二月中旬迄<sup>ニ</sup>ハ前漢書相濟申候中旬ノ奥羽三月ノ末ツ方帰都夫<sup>ノ</sup>一月歴史一月文章

ト隔月之功を致し其明年 御参府頃ノ漢学打舍テ西洋翻譯書ナリ共一年計リ讀可<sup>レ</sup>申候荒積リハ立置候間其時々にて色々ト趣向代り可<sup>レ</sup>申奉<sup>ニ</sup>報然<sup>ニ</sup>候事

一 眞田侯藩中佐久間修理と申人頗る豪傑卓異之人ニ御座候元來一齋門にて經學ハ良齋よりよかりし由古賀謹一郎いへり良齋も数々是を稱を今ハ砲術家ニ成り候處其入塾生砲術之為<sup>ニ</sup>免<sup>ニ</sup>入<sup>レ</sup>候ものにて必ツ經學ヲサセ經學ノ為<sup>ニ</sup>免<sup>ニ</sup>入<sup>レ</sup>候ものにて必ツ砲術ヲサセ候様仕懸ケニ御座候西洋學も大分出來候由會日アリて原書之講釈いとし申候一遍ヤラキ、申候

一 十二月十五日頃奥羽行出足之約定仕居宮部鼎藏<sup>ヲ緒入道 面赤故也</sup>同道常州迄ハ安藝五藏<sup>柳陰ノ怪物トシス 宮部カ名クル所</sup>も同道ニ御座候矩方<sup>仙人トシス何</sup>も連て三人なり五藏カ家主鳥山新三郎<sup>独眼龍</sup>又本藩人來原良藏等常ニ相會ス皆慷慨氣節ノ奇男子あり

五藏文ヲ能ス中村百合藏ヲ知る所井上壯太日々参り會讀仕候五藏去ル後ハ鳥山に相頼候由新三郎なるもの篤実人あり情况御推察之為<sup>ニ</sup>免<sup>ニ</sup>仍<sup>ニ</sup>而<sup>ニ</sup>如<sup>レ</sup>件

十月廿三日

明朝の祖式縫殿出仕候由ニ付此書相頼候事

一兼重讓藏近舍住居此節毎朝卯時の朝餐迄名臣言行録會讀初メ申候同舍人之外讓藏來候事

十月廿三夜

侄矩方再拜

尚々逐々向寒之節御座候間益御自愛奉祈候

玉丈人様

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟齋)

七四

×兄杉梅太郎より

嘉永四年十月廿三日

兄在藏  
松陰在江戸

乱筆御讀難カルヘク御推察

九月廿三日同廿七日之來諭ニ封本月望致披見候

一奥羽金拾三兩此次之飛脚便ニハ必々差送り可申候事

一庚子遊草モ同断

一重陽之事被申越致回顧候へハ鳴程早朝上下を着し致奔走候事有之候重陽と申物ニ有之と今更思ひ出し候俗吏之情

態御察可被下候事

一妻木御番手之事至極御同意玉叔も同断併多人數之頼ミ手可有之ニ付彼人等々手ニ合兼可申哉と存候尤其後未同人に不面會

候ニ付得咄し不候事早速咄可申候事

一中村百合々尊文を讀し候文先達る致一見候処左のミ高論とも不と思ニ付そふくニ見置候事

一久保生(清太郎)へ二十一史を進メ置候事尤此節綱鑑を讀懸リ居候事

一勸農固本録ハ未タ承リ不申勸農富民録ナレハ二冊物荒増見候事

一和蘭風説書之事丸ニ不レ知

一明訓一斑抄始る承り候能聞候へハ越州家來小国某所持トヤラ一閱イタシ度モノ

一彦根薩摩二侯ノ御歌不堪ニ感歎候頓ニ御承知ノ事ニ丸橋ノ前ノ爲替ニ候へ共右ニ付思出し候儘書記ス 吾邦ノ憲公百姓騷

動ノ以後高森ノ驛トヤラニテ讀せ被給

早蕨ノ手ニオガマル、身ゾツラキ行届ク雨ノウルイダニセデ

一此間赤川忠次郎途中同道イタシ奥羽咄ニ及ひ候処彼地方ハ誠ニ寒地ニテ且雪深ク咄ニモ不レ成寒ニテ迎モ御遊歴被堪不レ申ニ付

先苗メ可レ然由縷々説出シ候ニ付色々思案イタシ候処三千里外不レ入世話ヲヤキ過しるを反る御妨と相考差扣居候間何卒彼地邊

之人ニ委細之様子兼る御尋被成兎角常州邊之暖地ニ久敷被滯春半ニモ相成寒地に押被入候様有レ之度存候尙又宮部等之生質剛

堅之人ノ眞似ヲシテ大風之引込杯被致候様ノ事を深く致懸念候忠次郎咄ニ彼地ノ人何ゾト云へハ綿入ノ足袋ヲハクトヤラ是

類ノ防寒ノ具色々可有レ之何分三千里外ヨリハ世話ヤキキラレズ候間功者ノ人ニ得と御相談候る防寒ノ御手當專要々々情思難

レ尽筆頭ニ御推察可被下候事

一御同舍之諸兄方御傳聲有レ之由忝存候愚ガも諸兄に宜敷様御致意御頼之事

一横井其外滯苗之事別番之通

一大人に儲蓄ノ一委曲被申出敬服々々併現ニ作ハ兎角出來兼申物ニ候事尙又愚儲蓄ノ一兼テ致穿鑿居候様被申出甚々迷惑々々



又云飛脚差懸り候故玉木其外にも失禮仕候間よろし御頼仕候

(萩市松陰神社藏 校合濟)

七六 某に贈る

嘉永四年十一月六日(カ) 松陰在 江戸

古人云、儒生俗吏安知ニ事務、知ニ事務ニ者在ニ俊傑、士大夫ノ志ヲ立ツル也儒生モ俗吏モ為スヘキ所ニ非ズ惟俊傑トナリ得ルヲ欲スルハ固言待タサル所ナリ然ルニ書ヲ讀ミ古今通識セサレバ必ズ俗吏輩ニ陥リ又徒ラニ書肆トナレハ即亦儒生ノミ兩者皆俊傑ノ事ニ非ズ因テ窃ニ俊傑ノ学何如ト求ムルニ簡ニシテ要ヲ得ルニアリ明ニ国體ニ察ニ時勢ニ養ニ士心ニ遂ニ民生ニ審ニ古今明主賢相之事蹟ニ洞ニ萬国治乱興亡之機関ニ等ノ数件事ヲ主本トシカテ竭ニ萬卷ノ書羅網セハ儒生俗吏ノ二弊ヲ脱卸スベシ然士大夫官ニ當リ職ニ任スル時頭ヲ埋メテ蠢蠢トナルヲ得サルハ亦必然ノ勢ナリ因テ読書上ニ就テ一簡要ヲ求メスンバアルベカラズ其簡要ト云モ矩方輩ノ寡陋ニテハ確定スルヲ能ハサレ先 皇國ノ道ヲ明ラカニスルノ書及ビ聖經賢傳ハ固ヨリ暫クモ坐側ヲ離スベカラズ除ニ此等書ニ外漢唐宋等ニテ良師友ノ日ニ親炙スヘキモノ数件左ニ列ス

出師前後表諸葛 上高宗封事胡澹 爭臣論韓文 與韓愈論史書柳 上范司諫書歐陽 與高司諫書全 桐葉封弟辨柳 審勢審敵蘇老 送石昌言北使引上策略五蘇東 待漏院記王元 相臣論明季魏 上宰相第三書韓 至言漢賈 拔本塞源論明王陽明 與某人書今泉 錄中ニ 諫官題名記司馬 管仲論老泉 岳陽樓記范希 九二十篇 收ム 此類尚許多アルベシ今偶思出ス儘書付置伏乞ニ取舍ニ扱此類ヲ定メ日課ヲ立テ三篇或五篇ヲ四五回程モ朗誦シ然ル後官

府ニ登リ職事ヲ處スル時ハ事甚簡要ニシテ心氣ヲ養フノ益ハ日深カルヘクカト窃ニ愚考仕リ蛇足ノ事妄言ノ罪ヲ願ミズ區々ノ心左右布キ以テ知己ノ厚意ニ報セント計ル惟 執事野人献芹ノ誠ヲ察セ何幸過レ之

長門 吉田矩方拜書

十一月初六夜燈下草之未レ及ニ淨錄ニ惟執事憐ニ其愚ニ畧ニ其礼ニ至願々々

(訓點振假名は原本の儘である)

(高松宮家御所藏 校合濟)

七七 兄杉梅太郎に贈る

嘉永四年十一月八日

松陰在 江戸 兄在萩

十一月八日夜

一事斯語三部宮部生(鼎藏)に贈り候處一部ハ鼎藏自ら取り一部ハ有吉大夫取り其一部を以若殿様に献上仕候處若殿様にも深く御信仰被レ成座右之銘ニ被レ當候由宮部承り申候此處置有吉忠志出候由 一此節佐久間修理奥平侯の為メニ上總國姉崎(江戸)に六里許 大砲(カ)を免し打方小銃備等稽古ニ参り未タ歸ス候哀 砲 ホ、イツスル モルチール 十二ホントガラナーデ 六ホントガラナーデ 右之通之由

一中谷・日野・井上轉任之由承知仕候學政向定テ振作ニ御座候半と奉レ察候 幸便有レ之由ニ付何ヤラカキカケ候次第夜深ケ睡度成り候故是迄ニ閣申候平安々々



嘉永四年

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟堂)

一〇二

七八 ×兄杉梅太郎より 嘉永四年十一月廿日

兄在萩 松陰在江戸

(前文闕)……同人先達る遠近方之調被ニ差出候事

一 本月九日御役所勤中明倫官へ<sup>(ムシ)</sup>□□藝心懸候面々 御意之旨有<sup>(益田)</sup>レ之候越中殿以下都合貳拾人拙も其人數中ニ加リ居深く寂然々々

一 御遊歴中も御書翰江戸御屋敷迄被ニ差送候ハ、御同舍中<sup>(ムシ)</sup>□□共御國に被<sup>(ムシ)</sup>レ送候様之<sup>(ムシ)</sup>□□も可<sup>(ムシ)</sup>レ有<sup>(ムシ)</sup>レ之哉ニ付折々御音信有<sup>(ムシ)</sup>レ之度候尤

御都合次第是方<sup>(ムシ)</sup>カ<sup>(ムシ)</sup>書狀<sup>(ムシ)</sup>丸ニ差出申間敷候事

一 九月十九日仕出候書狀<sup>(ムシ)</sup>届候哉

一 山縣半藏・岡部半藏・小幡與三<sup>(ムシ)</sup>□□來家六爲<sup>(ムシ)</sup>稽古江戸被<sup>(ムシ)</sup>ニ差登來早春<sup>(ムシ)</sup>出足之由御社中次第賑ひ賑々御鏡ひ<sup>(ムシ)</sup>ニ可<sup>(ムシ)</sup>レ有<sup>(ムシ)</sup>レ之と存候

事

一 庚子遊草寫調相成候ニ付則差送り候事

一 奥義集<sup>(ムシ)</sup>先達る差出候ニ付此節<sup>(ムシ)</sup>御落手と存候事

一 士道要論買得之儀前便申越候所宜敷致<sup>(ムシ)</sup>御頼候事

十一月廿日

梅太郎

大二郎様

尙々何卒水府邊之溫地ニ久敷御滯留候る春半ニも相成北地に押入ラレ<sup>(ムシ)</sup>カ<sup>(ムシ)</sup>しと存候何も三千里外不<sup>(ムシ)</sup>レ入世話要<sup>(ムシ)</sup>レ之命ヲ全フセラレ  
カシト夫而已祈り候事  
(東京市吉田茂子氏藏 校合濟堂)

七九 ×兄杉梅太郎より 嘉永四年十一月廿三日

兄在萩 松陰在江戸

別封庚子遊草相添仕出申候處又候數行如<sup>(ムシ)</sup>左

一 此節表役所向至極多忙加<sup>(ムシ)</sup>レ之懶惰旁先日被<sup>(ムシ)</sup>ニ申越修業も丸ニ打置居申候山園に參り候様の閑暇<sup>(ムシ)</sup>年內ニ共<sup>(ムシ)</sup>迎も有<sup>(ムシ)</sup>レ之間敷と存候事

一 當年<sup>(ムシ)</sup>秋來好天氣相續候故夫に準<sup>(ムシ)</sup>至極暖<sup>(ムシ)</sup>ニ麥守護菜種植付等之便利誠ニ宜敷候此兩三日始<sup>(ムシ)</sup>少シ冬之景色ニ相成候様ニ候事

一 北地之冬征<sup>(ムシ)</sup>前方得と彼地方之様子御閉繕ひ之上<sup>(ムシ)</sup>ら<sup>(ムシ)</sup>ハ無<sup>(ムシ)</sup>覺東<sup>(ムシ)</sup>存候むと被<sup>(ムシ)</sup>ニ差向<sup>(ムシ)</sup>候<sup>(ムシ)</sup>進退究<sup>(ムシ)</sup>り大事ニも立行<sup>(ムシ)</sup>べく哉と致<sup>(ムシ)</sup>

掛念<sup>(ムシ)</sup>候毎々不<sup>(ムシ)</sup>レ入掛念御ヤカマシク<sup>(ムシ)</sup>可<sup>(ムシ)</sup>レ有<sup>(ムシ)</sup>レ之候<sup>(ムシ)</sup>共赤川忠・小幡與惣等之咄<sup>(ムシ)</sup>を聞<sup>(ムシ)</sup>け<sup>(ムシ)</sup>心膽寒<sup>(ムシ)</sup>く相成申候事  
(但北地寒<sup>(ムシ)</sup>可<sup>(ムシ)</sup>畏<sup>(ムシ)</sup>掛念<sup>(ムシ)</sup>可<sup>(ムシ)</sup>有<sup>(ムシ)</sup>之<sup>(ムシ)</sup>存候<sup>(ムシ)</sup>ハ申上<sup>(ムシ)</sup>候事

一 兒玉<sup>(ムシ)</sup>之書御頼申候事

一 追々御學業被<sup>(ムシ)</sup>進可<sup>(ムシ)</sup>申殊<sup>(ムシ)</sup>ニ御東行後<sup>(ムシ)</sup>一等御識見も被<sup>(ムシ)</sup>開可<sup>(ムシ)</sup>申と致<sup>(ムシ)</sup>遠想<sup>(ムシ)</sup>候來夏御歸府之上御高論可<sup>(ムシ)</sup>承と待申候事

十一月廿三日

梅太郎

二 白御用心々々併何モ天命ニ任<sup>(ムシ)</sup>セ候事と存候

大次郎様

(萩市杉相次郎氏藏 校合濟堂)

八〇 兄杉梅太郎に贈る 嘉永四年十一月廿八日

松陰在江戸 兄在萩

一 固本録<sup>(ムシ)</sup>富民録トハ違<sup>(ムシ)</sup>申候古本店ニ<sup>(ムシ)</sup>許多有<sup>(ムシ)</sup>レ之候間後便可<sup>(ムシ)</sup>奉<sup>(ムシ)</sup>送<sup>(ムシ)</sup>上候但有用之書歟無用歟ハ知不<sup>(ムシ)</sup>レ申候

因ニ云穆正大カ讀書之次第<sup>(ムシ)</sup>農桑ノ書ハ元ノ王禎カ農書、後魏ノ賈思勰カ齊民要術・農圃大書・農桑輯要・農政全書・

嘉永四年

一〇三

農事直説・農桑通訣・救荒本草・周禮荒政十二法、明ノ爺汝爲カ荒政要覽同書ノ作・康濟錄・救荒切要等不レ可レ不レ讀、水利ノ書ハ武備志中ニ異域水法ト云者是ニ云々平山子竜云、水工圖説。堤堰秘書、皆吾邦ノ水利書ト有レ之候孰モ迂濶成るものにて可レ有レ之

歟但御電覽被レ成候は、格致之一歟

一奥羽寒地にて遊歴堪間敷之由御遠想御尤奉レ存候乍然十二月十五日爰許出足笠間・土浦邊ノ水府等にて年を迎へ春暖二月頃ノ奥羽之積リニ御座候且安藝五藏江崎五郎も同道之筈に御座候是ノ南部盛岡人なり山鹿素水津輕人ニ良齋も奥人なり就ルオ奥地之形勢追々承知仕候故疎忽之舉有レ之間敷歟

一聲聞情ニ過テ恐レ候段お叱り被レ成候處の實之御論頂門ノ一針不堪ニ感銘ニ候畢竟聲聞我恐モ候モ胸中不レ懽ハル所不脱カノ起る事にてシ不脱カ懽なくんモ何ぞ聲聞我恐まん又懽ハルモ聲聞を共亦愧へし先日言行錄向敏中ノ傳を讀一ノ感發仕候事共御座候敏中除ニ右僕射ニ云々、李昌武徑入見レ之、徐賀曰云々、公但唯々、又曰云々、公但唯々、又歷陳云々、公亦唯々モる由敏中蓋シ不レ懽キ故然り敏中ノ事之如キハ實ニ欽慕に堪へず乍レ併終是及難し退る聲聞を止むる之策不レ得レ已ニ出申候苦心御垂察奉レ祈候

右十月念三日之高教之報ニ

一海防彙議ニ編貸カり候る佐世大夫達七にりし候間彼方にて寫し候由

一赤井嚴三ノ海防論ニ冊兼重讓藏に同斷彼方にて同斷

一言行錄前後集會讀スム但一ツも覺えさせんぞ

一本月十六日 御繼嗣之哀難レ有御意を以被レ仰渡ニ候実大慶事何哀々若レ是先達る言行錄我ヨミ仁宗春秋高、繼嗣未レ立、韓琦・歐陽修数爭、遂立ニ英宗ニ爲ニ皇太子ノ際我毎度危懼仕居候處不レ圖難レ有被レ仰出ニ有レ之不堪ニ感涙ニ候  
右ニ付定る此節ハ御小姓番頭之評判可レ有レ之ト三千里外ニ遠想仕候是亦他日之太平ニ關係仕候哀なれモ其撰不ニ容易ニ事と奉レ存候

一先日ノ御作安藝五藏ニ爲レ見候處致ニ嘆稱ニ候少々評點改竄をも加へ候ニ付さし返申候外藩人ノ交ハ城府を徹し候ても何も丸はたかの付合故詩文を爲レ見候ても愉快ニ御座候御國之交際モ却る上向繕ヒ面從後言多キ様覺申候歸國之上交友之道心得も御座候既ニ御作の評ニるも御想像可レ被レ成遣ニ候五藏モ鳥山新三郎ガ家ニ寓し居候佐世ノ家來土屋彌之介弟恭平も亦茲ニ寓ス宅ハ鍛冶橋外ニ在り御屋敷ノ近き處にて便利よろしく毎々茲ニ會をるもの宮部鼎藏・來原良藏・井上壯太等ニ豪談劇論往々宵分ニ至る亦一時之愉快あり  
一素水著述練兵説畧上梓ニ相成序を被レ命別紙之通起草仕候彼書之儀近日發行ニ相成可レ申候間御國へも追々参り可レ申候處誠ニ可レ愧事ニ御座候素水翁生得粗陋家且文盲人ニる其起草之時ニ當り長原武・宮部鼎藏等主として改竄ハルし矩方ヲ如きも亦議論ニ與る事を得刻苦仕候得共淺学非才之淺猿サ怪敷著述ヲ出來申候幸ニ素水大量人ニる吾輩之云所從ハさるをあし是三人共之幸ニ御座候併矩方其議ニ預り候事ハ同社中へ御深秘奉レ祈候既ニ三人校候由書へ記し可レ申候段議論有レ之候得共矩方宮部ト是を辭し候何者餘り事ヲ急き候故熟思之間合無レ之割普請ニハルし置候事共有レ之中々意ニ満さる事共有レ之勞御深秘奉レ祈候

十一月廿八夜同廿九日晝迄

家伯教兄梧下

此手紙字甚惡し俄ニ愚筆ニ成り候ニて之無レ之候得共筆破レ候故如レ是

(萩市杉相次郎氏藏 校合濟)

劣弟大

八一 兄杉梅太郎に贈る

嘉永四年十一月廿九日

松陰在江戸  
兄在萩

出足前ニて無音先ニ各一書遣し候積ニ御座候間未タ出來不レ申候松本之旧盟臺へも別ニ修書仕間敷ニ付御序之節勉強  
シテ歴史淺讀候様御致意奉レ頼候併胡乱ニ讀過候るも書寐るも同様之段是亦御尊奉レ頼候 念九 大

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟)

八二 兄杉梅太郎に贈る

嘉永四年十一月卅日

松陰在江戸  
兄在萩

十一月卅日之追加 (本文七矣)

一松平羽州侯之家老切腹之由誠ニ美談

一淺草御藏前池田屋何らしと云富商擣られ候由是ハ怪談

右等之事矩方ハ風説書ニと拙をし必ツ他人之書中ニ縷々可有之萩府風説も可有之ト畧レ之

大次郎拜

玉木へも此度も失禮仕候宜しく御斷奉レ希候

(萩市杉相次郎氏藏 校合濟)

八三 山田宇右衛門等に贈る

嘉永四年十二月九日

松陰在江戸  
山田等在萩

矩方再拜、白<sup>(與一兵衛)</sup>山田<sup>(音之進)</sup>山縣<sup>(彌三郎)</sup>先生<sup>(貞右衛門)</sup>工藤<sup>(妻木)</sup>妻木<sup>(小川)</sup>三兄梧下、問聞甚濶、近狀何如、諸位無レ書已久矣、意強勉問學、無<sup>レ</sup>

復餘力及<sup>レ</sup>他事耳、可<sup>レ</sup>喜可<sup>レ</sup>畏、少年俊才之徒、駸々進而不<sup>レ</sup>已與、夫學而不<sup>レ</sup>勉、々而失<sup>レ</sup>道者、天下有<sup>レ</sup>之、実可<sup>レ</sup>

慨也、俊才徒頼<sup>レ</sup>諸位身先<sup>レ</sup>之以誘<sup>レ</sup>掖<sup>レ</sup>之、亦得<sup>レ</sup>幸免<sup>レ</sup>焉、不<sup>レ</sup>勉者之情三、曰、吾年老矣、曰、吾才鈍矣、不<sup>レ</sup>然則

曰、吾才高矣、学成矣、為<sup>レ</sup>学之道、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>概論、譬如<sup>レ</sup>痴人之前、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>說夢、然初学之弊、大要不<sup>レ</sup>過<sup>レ</sup>羈<sup>レ</sup>章句<sup>レ</sup>

馳<sup>レ</sup>定妙、此輩晨夕講<sup>レ</sup>經、無<sup>レ</sup>少益<sup>レ</sup>于心身、何况家國天下哉、是失<sup>レ</sup>道之大者也、宜<sup>レ</sup>誘<sup>レ</sup>俊才<sup>レ</sup>使其歷<sup>レ</sup>覽和漢載籍及

論策、僕茫<sup>レ</sup>乎斯二者而發<sup>レ</sup>此言、自<sup>レ</sup>他人見<sup>レ</sup>之、必曰、瞽者求<sup>レ</sup>明、聾者求<sup>レ</sup>聰之類耳、頼<sup>レ</sup>諸位垂察、不<sup>レ</sup>敢弃<sup>レ</sup>

也、抑此道也、不<sup>レ</sup>特誘<sup>レ</sup>少年<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>然、諸位亦少留意、若<sup>レ</sup>二先生曰、吾年老矣、一兄曰、吾才鈍矣、二兄曰、吾才高

矣、学成矣、僕失望亦甚矣、古人曰、死而後已、諸位固知<sup>レ</sup>之、何待<sup>レ</sup>僕言、但恃<sup>レ</sup>才学、而安<sup>レ</sup>少成、本藩之弊習也、

習必成<sup>レ</sup>風、々習之移<sup>レ</sup>人、雖<sup>レ</sup>豪傑之士、或不能<sup>レ</sup>免、是所<sup>レ</sup>以區々之說<sup>レ</sup>也、多罪海容、頃與<sup>レ</sup>薩摩兵學者肝付七之

丞<sup>レ</sup>交、肝付好論<sup>レ</sup>邊事、向<sup>レ</sup>跋<sup>レ</sup>涉<sup>レ</sup>松前佐渡地方、悉<sup>レ</sup>形勢之梗概、其譚有<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>聞者、曰、近歲西洋船、過<sup>レ</sup>壹岐對馬之

間<sup>レ</sup>而東上、越<sup>レ</sup>松前津輕之峽<sup>レ</sup>而南折者、極多、未<sup>レ</sup>審<sup>レ</sup>其為<sup>レ</sup>何緣故、聞<sup>レ</sup>之水府豊田彦次郎云、距<sup>レ</sup>銚子口二百五十里

許、洋中有<sup>レ</sup>嶋、名<sup>レ</sup>加治加、歐人開<sup>レ</sup>場貿易、北人自<sup>レ</sup>北、西夷自<sup>レ</sup>西、會<sup>レ</sup>于此、西夷自<sup>レ</sup>本國<sup>レ</sup>至<sup>レ</sup>支那浙粵地方<sup>レ</sup>貿

易、又轉至三加治加、而直歸三本國、是以未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>經<sub>レ</sub>壹岐對馬松前津輕<sub>二</sub>而西下者、銚子之船隻、有<sub>レ</sub>曾漂至三加治加<sub>一</sub>者、云、肝付又曰、北國漕船漁舟、為<sub>レ</sub>洋夷所<sub>レ</sub>奪掠<sub>二</sub>甚多、但首<sub>レ</sub>諸官、往<sub>レ</sub>々蒙<sub>レ</sub>嚴責、故自<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>大掠、隱匿不<sub>レ</sub>首、聞<sub>レ</sub>之、渡越船頭云、又曰、松前築城之議、有<sub>レ</sub>二端、蓋松前之為<sub>レ</sub>地、背<sub>レ</sub>山臨<sub>レ</sub>海、々、即夷船通行之路、陸地甚狹窄、進退不<sub>レ</sub>便、奇伏無策、不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>箱館、箱館、形勢為<sub>レ</sub>門、有<sub>レ</sub>守禦之便、宜<sub>レ</sub>築<sub>レ</sub>焉、是一議也、策士論者主<sub>レ</sub>之、松前、祖先之所<sub>レ</sub>邑、士民之所<sub>レ</sub>安、今卒然從<sub>レ</sub>之、勢甚不<sub>レ</sub>便、且所<sub>レ</sub>費該二十萬金、一二年之入非<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>弁、一從<sub>レ</sub>損<sub>レ</sub>國力、不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>姑因<sub>レ</sub>舊構<sub>二</sub>為<sub>レ</sub>便、是一議也、執政有司主<sub>レ</sub>之、肝付之談不<sub>レ</sub>止<sub>レ</sub>此、行裝匆忙、不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>多及、抑僕謂、外夷之姦計、咄々怪事、剝牀日迫、俗吏迂儒、不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>輿論、有志<sub>レ</sub>于兵道<sub>レ</sub>者、其可<sub>レ</sub>漠然不<sub>レ</sub>軫念<sub>レ</sub>哉、諸位以為<sub>レ</sub>何如、

十二月九日

吉田矩方再拜

東行發輒在<sub>レ</sub>本月十五日、行中呈書不<sub>レ</sub>便、契濶將<sub>レ</sub>加<sub>レ</sub>甚、匆々之書、情緒何竭、

(句讀點はすべて原本の儘)

盟臺諸位案下

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟慶)

八四 山田宇右衛門等に贈る

嘉永四年十二月十一日

松陰在江戸 山田等在萩

今曉郷書至、審<sub>レ</sub>小川兄官<sub>レ</sub>替御、理當<sub>レ</sub>疾速奉<sub>レ</sub>書賀<sub>レ</sub>之、然鄙意有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>待焉、故未<sub>レ</sub>敢賀<sub>レ</sub>也、兄幸<sub>レ</sub>哂察、

矩方再拜

又云、此書到<sub>レ</sub>國之頃、歲將<sub>レ</sub>改、想諸位奔<sub>レ</sub>走于俗事、書架塵深幾許、天涯之人窃憐<sub>レ</sub>之、

十二月十一日

矩方再拜

山田先生

山縣先生

工藤兄

妻木兄

小川兄

亡命決し候々十二月晝<sub>レ</sub>此書々其前之事故説及し不<sub>レ</sub>申候

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟慶)

八五 兄杉梅太郎に贈る

嘉永四年十二月十二日

松陰在江戸 兄在萩

十二月十五日、赤穂義士遂<sub>レ</sub>志之日也、吾與<sub>レ</sub>宮部安藝<sub>二</sub>子<sub>一</sub>、約<sub>レ</sub>東行發輒以<sub>レ</sub>是日、已久矣、十五日之前數日、過書之事起焉、自誓曰、官倘不<sub>レ</sub>允、吾必亡命、假令今日負<sub>レ</sub>君親、後來決不<sub>レ</sub>負<sub>レ</sub>國與家、雖<sub>レ</sub>君非<sub>レ</sub>燕惠<sub>一</sub>親非<sub>レ</sub>薛某、樂毅薛包之為耳、既而説<sub>レ</sub>佐世大夫、大夫曰且與<sub>レ</sub>手元議、手元曰、無<sub>レ</sub>過書<sub>二</sub>而越<sub>レ</sub>境、万<sub>一</sub>有事、不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>確乎稱<sub>レ</sub>松平大膳大夫家臣吉田大次郎、口未<sub>レ</sub>開而膽先<sub>レ</sub>緩矣、安得<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>辱<sub>レ</sub>長州<sub>二</sub>乎、縱有<sub>レ</sub>百千故事、非<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>公許、斷不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>擅允、大夫亦無<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>其論確而志堅、遂以<sub>レ</sub>事首<sub>レ</sub>國、而吾則行<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>自誓、非<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>願<sub>レ</sub>負<sub>レ</sub>君親、丈夫之一諾、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>苟也、夫大丈夫者、誠惜<sub>レ</sub>一諾、區々之身不<sub>レ</sub>足惜、待以下辱<sub>レ</sub>國體之罪不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>辭耳、

嘉永四年

辛亥臘十二日

(句讀點は原本の儘)

一一〇

吉田大次郎

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟藏)

### 嘉永五年

#### 八六 兄杉梅太郎に贈る

嘉永五年正月十二日以後 松陰在水戸  
兄在藏

治心氣齋先生に左之通御傳言奉<sub>レ</sub>頼候

先書

三年の遊学之一語被<sub>レ</sub>詰候處之議論反覆忸怩<sub>レ</sub>ちりし一時之言耳矩方がまる所徐々ト御覽被<sub>レ</sub>成下<sub>二</sub>候様奉<sub>レ</sub>頼候 當初

先書肝付説加治加トイ、シハ誤なり「カゼカ」トテ北亞墨加州之地之由平戸ニる寫し候北陸杞憂之後ニ古賀<sub>レ</sub>詩を寫し候分先生に<sub>レ</sub>置候間其中ニ折加と有<sub>レ</sub>之分即彼島ト申事ニ御座候 聞<sub>三</sub>之水府豊<sub>二</sub>田彦<sub>一</sub>二郎 (東北遊日記に、松陰は一月十二日及同十六日同十九日に、豊田彦二郎を訪ふとある)

#### 淺野兄其外へ同斷

宋ノ蘇東坡様説熟讀スヘシ必有<sub>下</sub>所ニ深感不能<sub>二</sub>自禁<sub>一</sub>者、万一無<sub>レ</sub>之、則非<sub>レ</sub>人也、

明時ニ逢候事故文武之藝之鍊磨<sub>レ</sub>と努々此迄ニ減し申間しく候得共是何足<sub>レ</sub>恃哉尤可<sub>レ</sub>恃ハ大丈夫之志氣也近試取<sub>二</sub>杜李陸長古<sub>一</sub>讀<sub>レ</sub>之其所<sub>レ</sub>志皆稷契皐陶等を以<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>期待<sub>一</sub>候様相見申候諸兄所<sub>レ</sub>志何如、杜李陸、後人特以<sub>二</sub>詩人<sub>一</sub>視<sub>レ</sub>之、併堂々大國之武士毛唐人ノ詩人ニ愧候様ニテハ國家之体ヲ可<sub>二</sub>如何<sub>一</sub>哉 況

水府御牀几廻り百人之事ハ孰も承知と存し畧<sub>レ</sub>之

先般選舉之内、(張又三郎・淺野小次郎・八木彌熊・日野英)張・淺野・八木・日野等之諸兄知面之衆ニ候外孰も一時之俊才<sub>の</sub>様承り候間爲<sub>二</sub>國家<sub>一</sub>ニ老婆の絮談 其人不思不孝ニテ

嘉永五年

一一一

も其言可レ取ハ不ニ  
以レ人廢言可也

(萩市杉相次郎氏藏 校合濟堂)

八七 兒玉初之進に與ふ

嘉永五年正月十八日

松陰在水戸  
兒玉在江戶

一筆致三啓上一候餘寒未タ去兼候得共彌御多祥御所勤可レ被レ在珍重不レ斜奉レ存候猶又於三御國表ニ悉皆々様御萬福奉ニ遠  
察ニ候次ニ小生事無異遊行仕候昨冬々水戸邊逗留仕候近日より會津地方に罷越候覺悟ニ御座候乍憚御安意奉レ希候此  
節ニ追々御歸國御仕度可レ被レ爲レ在奉レ察候先ニ殘寒之節御氣体彌御自重專一ニ奉レ存候猶期ニ長春之辰ニ候 恐惶謹  
言

正月十八日

吉田大次郎矩方(花押)

二白幾重も御氣体御自重專一ニ奉レ存候 以上

兒玉初之進様 人々御中

此書狀之儀ニ水戸様御屋敷に來り候と申支ニ候佐世殿家來御屋敷外ニ罷居候者持參仕候と此事來原氏ノ閏二月廿一  
日請取候事(兒玉初之進は松陰の妹千代の婿) (東京市兒玉秀雄氏藏 校合濟堂)

八八 兄杉梅太郎に贈る

嘉永五年正月十八日

松陰在水戸  
兒玉在萩

舊臘十四日亡命已來無レ雨無レ雪一二夜小雨雪ある耳本藩も定る然るへし登ニ筑波山ニ過ニ笠間、十九日至ニ水府、寓ニ水

井政介家、廿四日宮部・安藝二子亦至、廿九日與三子ニ同發ニ水戸・遊ニ西山瑞龍、經ニ佐竹氏舊跡、正月二日還ニ水戸、  
四日與三子並政介子芳之助・遊ニ鹿島銚子地方、十一日還ニ水戸、(東北遊日記正月廿日の條參照) 明後日將ニ發ニ水戸ニ遊ニ會津邊、水戸ニ逢候人ハ皆  
去るものニ永井政介 會澤憩齋 豐田彦二郎 桑原幾太郎 宮本庄一郎  
藤田虎之助・戸田銀二郎は未だ禁錮中にて得逢不レ申候

會澤の書ニ葉さし送り候間篤好之人の手ニ落シ付度奉レ存候

近日旅中ニる往々詩も出來候へ共不レ能ニ悉記ニ其内三首

足跡遍ニ天下、肩上輕ニ一囊、書畫數十葉、詩文幾百章、詳ニ郡國形勢、寫ニ忠孝心腸、可ニ以資ニ膺懲、可ニ以維ニ綱常、  
男兒平生志、蓬桑報ニ四方、誰知汗漫遊、家國豈暫忘、正月四日 孤牀半夜夢難レ成、聽斷四檐點滴聲、回首山河鄉  
國遠、阿兄今夜定何情、遊ニ銚子口、過ニ潮來、宿ニ宮本庄一 書劍飄然滯ニ天涯、志業未レ遂歲空加、一身百感向レ誰說、  
枉借ニ七字ニ發ニ浩歌、嗟吾天賦原劣弱、闕如雄才與ニ大略、慷慨志氣雖ニ空存、讀書未レ得レ涉ニ浩博、文字章句措不レ精、  
經濟實用亦無レ成、舍レ魚遂併ニ熊掌ニ舍、廿年失レ策愧ニ此生、家有ニ父兄ニ鄉師友、期レ我甚重吾空負、送レ我之言警レ我  
書、三復忸怩吾顏厚、今年之日又將レ除、吾心之感竟何如、中宵思レ之眠那得、剔レ燈且觀太史書、君不レ見先主肉髀  
悲ニ歲月、三分功業永不レ沒、丈夫存レ志豈空死、百年勿レ教ニ壯心歇、十二月廿 (松陰先生遺著所載 校合濟堂)  
(以下真蹟) 水府之遊歴ニ大分益ヲ得候様覺申候是より先奥羽地いり、可レ有レ之哉と存候

矩方が一件に付來原良藏身を捨テ働候由武士道之大節実ニ敬服感服仕候併矩方が一身実ニ惜むニ足ラズ矩方の良藏子ニ於ル才學識共ニ二三等ヲ譲リ候人物ニ御座候矩方一事ニ付萬一良藏子嚴責ヲ蒙リ候様ニある何分口惜奉レ存候併武士之義氣ニ付脇より掣臂致候るも承引仕ざるハ必然ニ御座候乍然為ニ國家ニ可レ惜人物之事故誠ニ申上兼たる儀ニ御座候得共身力ヲ御竭レ被レ遊候御救ヒ萬々奉レ祈候國家素ガ典刑制度も定たる事トハ奉レ存候得共良藏が士腹ハ古人之風茂歎羨シ常套ヲ外レ候事ト奉レ察候ヘト父兄様方ニも宋明杯之人物之事乍ニ思召出ニ常套ヲ外シ天下萬世ヲも致ニ鼓舞振作ニ候様之御一着必々奉レ祈候左候ヘト矩方縱令死ニ于道路ニ候るも國家への御奉公人ニ對して愧不レ申候是素ガ年少之客氣書生之空論ガ出候事ト奉レ愧候ヘ共太平之久敷、氣義將レ墜ニ於地、自レ非ニ讀書人、不能ニ眞知之、氣義之事ハ天下萬世へ關係し至大至重窮達禍福榮辱利鈍ハ一身一家之事ニ至小至輕、伏祈仰祈、至為レ之号哭、幸垂ニ下悃察(以下略)

(萩市杉相次郎氏藏 校合濟)

八九 小田村伊之助・林壽之進に與ふ

嘉永五年正月十八日 松陰在水戸 小田村林在江戸

辱書、見レ責以ニ僕連亡、僕之背ニ家國、其罪固大矣、不ニ必為ニ區々緣飾ニ也、然僕嘗竊奉ニ君子之教、天下無ニタレ君之國、亦無ニタレ親之郷、安有下永棄ニ君親、以謀ニ利者乎、但僕出門之日、有レ所ニ竊誓ニ不レ得下為ニ知己ニ不ニ一言之也、夫枉レ尺直レ尋、雖ニ孟子之所不レ取、然忍レ小謀ニ大、則孔門之教也、已枉レ尺矣、安能直レ尋乎、但將下奉ニ孔門之教、自効以贖前罪也、今 二兄乃諭以當速歸、大非所望於知己也、僕雖驚下亦人耳、使僕無ニ成、則誓不復還郷

國ニ見レ故舊也、萬一見レ迫甚急、則僕有ニ刎首刺ニ心謀ニ自贖ニ耳、又安有下永棄ニ君親ニ以謀ニ利者乎、抑林兄歸國、見レ僕父兄師友、為レ僕言、二郎亦男兒耳、願勿ニ過慮、縹緲絮譚無レ益ニ家國、不ニ多及ニ也、

正月仲八

吉田大次郎矩方再拜

二白、滯ニ水府ニ將三十許日、奥羽發軔期二十日ニ矣、

小田村伊之助様

林 壽之進様

(第七卷東北遊日記正月十八日の條参照)

(萩市山根信一郎氏藏 校合濟)

九〇 ×叔父玉木文之進より

嘉永五年閏二月十日

玉木在萩 松陰東北旅行中

荒陬蠻語中定る何如御国于今暖氣催し兼候得共 公臺益御機嫌克被レ遊ニ 御座ニ 国本も御定り万々恐悅至極奉レ存候先以旧冬御東行之次第飛ぬ鳥跡をよふし御国武士之遊學空く流浪之形狀ニ被ニ想像ニ候右ニ付一族親類之殘憾悲愁御案しも可レ有レ之ニ御尤ニ存候愚も到來後数十日引籠片腕モカレ候様相考へ官途も是迄ニ存詰罷居候處井與・山宇等之論ニ詰らき且々出勤ハ仕候へ共其後子レ今氣分相不レ快就ると遊蹤いゝゝ哉と案を計ニて此書狀も早晚ニ何地ニ達し候御披見可レ有レ之哉も渤海もふく氣之毒之事ニ候間(梅太郎)阿梅も縷々申越之由其内之上策下策等及段々有識者之論を經る事ニ候間兼之無骨を以何之御案しも無レ之此地之論之上策ニ御出候る其上をハ九々天命ニ任せ御咎之輕重何之計るニ足らんや是社大夫(こぞ)よせ相考申候何も帰郷一堂上之談ならてハ心懷尽き難く

勿々聞筆候恐惶謹言

閏二月拾日

文之進

尙々其内御用心誠々御專一ニ存候何卒被レ居候所ふり共早々相分度存候以上

大次郎様

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟慶)

九一 父叔兄に贈る

嘉永五年閏二月十五日

松陰在新潟  
父叔兄在萩

正月廿日發水戸、廿五日到<sup>奥州</sup>白川、延留三日、與安藝五藏別、廿九日到會津、延留七日、二月十日到新潟、此間雪甚深矣、然寒不<sup>二</sup>甚嚴、出新潟雪絶無而僅有<sup>三</sup>新潟往來、日野三九郎・中川立菴二人家延留三日、謀航<sup>二</sup>佐渡、々々<sup>一</sup>出雲崎為<sup>レ</sup>便、十四日到<sup>二</sup>出雲崎、風氣不<sup>レ</sup>宜、滯<sup>二</sup>出雲崎、十三日、廿七日至<sup>三</sup>佐州小木港、廿八日至<sup>二</sup>相川、滯三日、閏月三日至<sup>三</sup>小木、又風汎不<sup>レ</sup>宜、滯七日、十日航<sup>二</sup>出雲崎、十一日歸<sup>三</sup>新潟、將<sup>レ</sup>以<sup>二</sup>明日<sup>一</sup>發<sup>二</sup>新潟<sup>一</sup>為<sup>レ</sup>羽州之行、道中大略如<sup>レ</sup>此、

和氣清麿贈<sup>二</sup>從一位<sup>一</sup>之事、昨年三月十五日之事之由水戸にて始承<sup>レ</sup>之、実数千年之盛典而江戸人漠然不<sup>レ</sup>語、其不<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>

京師<sup>一</sup>蓋如<sup>レ</sup>此矣

會津にて志賀與<sup>二</sup>兵衛・黒河内傳五郎・原貢<sup>一</sup>へ會面孰も壯健志賀云當春君侯御不豫一件にて年首狀不<sup>二</sup>差出<sup>一</sup>候間岡部<sup>二</sup>小幡等<sup>一</sup>へ宜敷申吳候様申候間小幡へ御序も御座候<sup>レ</sup>、可<sup>レ</sup>然

二人は  
講の繪師家

四月中ニ江府可<sup>二</sup>罷歸<sup>一</sup>ニ付其節委曲可<sup>二</sup>申上<sup>一</sup>且日記拙吟共併セ差出度奉<sup>レ</sup>存候俄ニ出足思立甚紛然ニ罷居申候程ニ寄る大番連中交替後ニ及<sup>レ</sup>候間殘念奉<sup>レ</sup>存候併來原良藏歸國候<sup>レ</sup>、矩方心事相知<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>申

客中感懷 (此詩東北遊日記には一月十六日の條下にある)

三千里外漂泊身、懷<sup>レ</sup>國思<sup>レ</sup>家感<sup>レ</sup>蒼疎、繪續纏<sup>レ</sup>身辱<sup>二</sup>君恩<sup>一</sup>、定省幾年負<sup>二</sup>慈親<sup>一</sup>、慰<sup>レ</sup>閑時取<sup>二</sup>史乘<sup>一</sup>讀、淚落古來忠孝人、何日應<sup>レ</sup>竭<sup>二</sup>驚鈍力<sup>一</sup>、報効得<sup>レ</sup>與<sup>二</sup>古人<sup>一</sup>倫

宿<sup>二</sup>新潟<sup>一</sup> (此詩東北遊日記には二月十日の條にあり字句多少異なる)

排<sup>レ</sup>雪來<sup>二</sup>窮北陸陬<sup>一</sup>、日暮乃向<sup>二</sup>海樓<sup>一</sup>投、寒風栗烈欲<sup>レ</sup>裂<sup>レ</sup>膚、枉是向<sup>レ</sup>人誇<sup>二</sup>壯遊<sup>一</sup>、男兒欲<sup>レ</sup>遂<sup>二</sup>蓬桑者<sup>一</sup>、家郷更為<sup>二</sup>父母憂<sup>一</sup>、父母憂<sup>レ</sup>子無<sup>レ</sup>不至、應<sup>レ</sup>算今夜在<sup>二</sup>何州<sup>一</sup>、枕頭眠驚燈欲<sup>レ</sup>滅、濤声如<sup>レ</sup>雷夜悠々、

水府自葬祭式一冊寫し井上壯太郎迄送り置候間追々相達可<sup>レ</sup>申候間祭式杯御見合端ニも可<sup>二</sup>相成<sup>一</sup>哉奉<sup>レ</sup>存候

齋藤新太郎御國へも参り候哉追々同人へハ懇意仕候既ニ此遊歴水戸にて永井政介・阿久津彦五郎・白川三田大六・會津井深某・新潟日野三九郎等皆新太郎カ添書あり

閏二月十五日賀

弟<sup>二</sup>侄<sup>一</sup> 兒 矩方

家尊大人

玉叔父 膝下

家伯教兄

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟慶)



九二 × 杉梅太郎より宮部鼎藏に贈る 嘉永五年閏二月十八日

杉在萩 宮部在新潟

(前文略)……一諾を素か可レ惜事ニ候へ共執事水府邊ニ在る年を迎へ春暖は差向奥地に入込候御約束之由ニ候へハ出足暫く見合少し御跡が出懸候る彼地邊ニ追續候とも左程諾違ふと申譯有レ之間敷區々之身惜む不レ足といへども忠孝を廢せると友義ニ背くと執事々重くして執事々軽く候哉甚輕重之取捨を誤り候事と奉レ存候彼是之弁も無レ之不忠不孝之罪ニ陥り矣ニ不レ相濟儀と氣毒千萬奉レ存候然処一應遊學之官許を蒙り居候事ニ付右暇月之内ニ歸り其節之參り懸り丸ニ打出シ候る所申出候ハ君父を跡見亡命仕候筋ニ相當り申間敷候哉と奉レ存候間何卒是迄之御友義ニ被レ爲レ對前條之趣を以御直々被レ仰諭被レ下候様奉レ希上ニ候尙又若又大次郎東國邊に共殘居候る御面會難レ被レ成儀及御座候ハ御傳を以御書中ニ成り共御提醒被レ成下ニ候様偏ニ奉レ希上ニ候國元罷歸り候ハ公よしる國典も相立私よしる先祖之祀も絶ず父母親戚之憂念及解ケ一舉しる不忠不孝之罪を少し成り共償ひ候道と奉レ存候恩惠之程天高海深難レ有奉レ存候尙又業邊成立候上ニて歸參可レ願出ニ申儀も可レ有レ之候へ共萬一其宿志得遂不レ申内ニ死亡等仕候節と遂ニ不忠不孝之罪晴き候期と無レ之方々遺恨奉レ存候間免免角も早速罷歸り候へハ是祈万全之策と奉レ存候間幾應も此段得と落着仕候様御教示奉レ祈上ニ候申上も疎之儀ニ御座候へ共御氣躰御保護第一之御儀と奉レ存候 恐惶謹言

閏二月十八日

杉梅太郎(花押)

尙々幾重發隨時御自重奉ニ專要ニ候千萬失禮之至ニ御座候へ共別紙一封彼者に御渡し可レ被レ遣候右書中ニも略前段之意味を述置候間委曲と 貴公様方入々被レ仰聞被レ下候様奉レ頼上ニ候尙又是非共修業目途相立候迄は歸國難レ仕様之儀ども御座候ハ、重疊御無心之儀奉レ恐入ニ候へ共居所彼是御片楮被レ仰知被レ下候様之御心入共御座候ハ、誠ニ以難レ有奉レ存候萬々御厄害之御儀斗り申上実以奉レ恐入ニ候何卒失敬之段御了簡被レ仰付被レ下候様奉レ希上ニ候 以上

宮部鼎藏様 人々御中上レ之

(熊本市宮部増信氏藏 校合濟)

九三 久保清太郎に與ふ

嘉永五年五月十一日

松陰在山口驛舎 久保在萩松本

不忠不孝の重罪人無恙今日歸着仕候親類内兒玉歎久保歎へ着けと江戸御留守方より相授申候間貴家御差間も無ニ御座候は、御厄介罷成度奉レ存候尤重罪人故平人の御引受にては迷惑仕候間其段御含可レ被レ下候頓首

十二日實は十一日夜山口驛舎にて認

大次郎

清太郎様

(松陰先生遺著所載 校合濟)

九四

× 杉梅太郎より山縣半藏宛に與ふ

嘉永五年五月十二日

杉在萩 山縣在江戸

三月廿九日四月二日兩度之芳翰追々相達奉ニ捧誦候殿様益御機嫌克被レ遊ニ御座ニ恐悅至極奉レ存候將又貴兄様彌以御壯健被レ成ニ御勤學ニ候由奉ニ并賀ニ候ニ私も都合無異消日仕候間乍レ憚御放懷奉レ祈候扱又大次郎儀被レ爲レ懸ニ御念頭ニ毎々御懇切被レ仰遣ニ奉ニ感謝ニ候且又同人此度歸邸一件ニ付るも不レ容易ニ御配慮被レ仰付被レ遣候由誠以難レ有仕合奉レ存候歸邸後も引續キ御厄害ニ被レ仰付ニ候由何分廉々御禮之申上切ラレルヲデハナイゾ偏ニ貴兄様。井上。金山。近藤諸君之御丑裁を以再ひ一弟を得候段々何共心中之欣喜弄筆之尽ス危況ニ無ニ御座ニ候間萬々御推察被レ成遣ニ候様奉レ希上ニ候父共其外も同様御禮申上吳候様申事ニ御座候先々一應之御禮旁草々申上縮候恐惶謹言

五月十二日

梅太郎(花押)

尙々向署之砌別る御気体御自重專要奉<sub>レ</sub>存候

(井上壯太郎)  
一井上壯過ル三日帰着委曲直に承知仕候事

(照藏)  
一宮部<sub>レ</sub>之書狀御届ヶ被<sub>レ</sub>遣同人之返書井上壯子<sub>レ</sub>落手仕候事

一金山子にも一應之禮狀此度差出申候處御存之通り之カタ<sub>レ</sub>交<sub>レ</sub>之書面ニ<sub>レ</sub>る中々御禮申尽し難く候間何卒貴兄様<sub>レ</sub>御序之節私

々心中被<sub>レ</sub>仰解<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遣候様奉<sub>レ</sub>希上<sub>レ</sub>候

半藏様玉机下

(東京市久原房之助氏藏 校合濟慶)

九五 山縣半藏に與ふ

嘉永五年五月

松陰在萩松本  
山縣在江戸

若州小濱疾酒井修理大夫家臣伴洲五郎信友と云ふ國學者義士流芳と名つけ義士對話の類の當時の實説書を集め十冊計

り有<sub>レ</sub>之候由承<sub>レ</sub>候鳥山<sub>・</sub>彌之助等好義の人は定て見候哉輯め方眞實の辨別等善惡の評論承<sub>レ</sub>度候其内に妙海尼か話も

一冊有<sub>レ</sub>之由<sub>レ</sub> (江崎) 吾樓の事は聞えん歎寛齋はいか、兄の嘆病は療治相成候哉語誦嚙流行て有<sub>レ</sub>らう文章は書れるやら御書

狀は二通共安田迄届申候彌之助かのも相届候段御致聲奉<sub>レ</sub>頼候 (山縣の實家)

從行者二人皆精<sub>ニ</sub>研軍書戰記、又通<sub>ニ</sub>天下地形人情、甚爲<sub>ニ</sub>益友、阪港發<sub>レ</sub>舟、同<sub>レ</sub>舟者麻布邸に居候膳宰世良孫槌頗通<sub>ニ</sub>國史

國語、且其人物卓<sub>ニ</sub>立塵外、不<sub>レ</sub>野不<sub>レ</sub>怪眞有爲之人、船中之興不<sub>レ</sub>斜

例の二圓金後便可<sub>ニ</sub>差送<sub>ニ</sub>と奉<sub>レ</sub>存候

不<sub>レ</sub>入事を書くは筆墨紙の費、且讀むもの書くもの容易ならん手間損故に略し候也山鹿の事千萬御面倒奉<sub>レ</sub>畏候

慎中に付近藤・小川・金山等にも態と書簡不<sub>レ</sub>出なり全く八鎌<sub>ヤカマシ</sub>椎故てはないそ

(幾之助)  
土居にとも御出被<sub>レ</sub>成候哉人に附合流儀歎附合ぬ流儀歎

齋藤彌九郎に可<sub>レ</sub>然段馬來先生に御頼可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候 (藤の劍術師家)

半藏足下

矩方拜

(二人は藤の槍術師家)  
岡部・小幡<sub>二</sub>先生より會津へ書狀參り候哉僕か一禮も言れたらうか

此以下彌之助に御見せ

足下視<sub>レ</sub>金如<sub>ニ</sub>糞土<sub>一</sub>といふ評判か甚しひそ僕は頻に回護する積しやか僕素より人に逢ふ事も門を出る事も出來ず且言

たかとして不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>取<sub>ニ</sub>信於人<sub>一</sub>、夫は扱置大行不<sub>レ</sub>願<sub>ニ</sub>細瑾<sub>一</sub>は勿論の事なれ共小事却爲<sub>ニ</sub>大害<sub>一</sub>事もあるなり故は僕や壯太<sub>井上</sub>か

様に追戻されては殺風景てはないか足下先日の話には近年の内に一遍國に歸りて暫くは郷先生でもして父母にも安心

させる様な口振であつたか其旨趣の在る所は知らさつた故聞捨にして置たけれ共今て思へは中村等か存寄ても有つた

かと被<sub>レ</sub>察候何分父母君さへ御安心ならちよつとに戻らん方か善からう戻ると足下か人を目下に見る故學問は上るま

い右中村等か存寄て有たかと云は僕か邪推なれ共若邪推の通ならば足下不<sub>レ</sub>語<sub>ニ</sub>此事<sub>一</sub>心中少し拙てはないか怒るとな

かれ趣あらは御答書被<sub>レ</sub>下たい

彌公足下

大

(松陰先生遺著所載 校合濟慶)

九六

×杉梅太郎より某に贈る 嘉永五年五・六月頃 杉在

〔前文〕…此段大次郎取糺候處亦介儀兼兵學申談し修練仕候事ニ付此度右書物活字板ニ摺立候由ニる去年江戸御屋敷に壹封中ニノ準人便りを以差送り吳尤右符中へ別符ニノ赤川惣右エ門に當有レ之分直様彼方へ相渡シ残一部分私貫受候分ハ追々讀見候所是又〔不明〕ニテ有レ之タル由後日カ様御全儀可レ被レ仰付書物とハ一圓氣付不レ申其後數十冊之書物に相混し等閑ニ差置候内去冬出羽奥州邊遊學仕先達御屋敷歸節取調見候處右書物不レ相見ニ付此内歸萩之上去年以來差送置候書物之内をも種々穿鑿仕候へ共一向不レ相見素より小冊之儀〔以下略〕

〔嘉永五年七月廿五日、山田亦介儀に海防監測上梓の科によりて問せらる、松陰が右の書を山田より貰つた事、五一號玉本文之進宛書簡に見える、此書簡は松陰所持本に就ての取調報告であらう〕

〔萩市杉相次郎氏藏 校合濟〕

九七

×土屋蕭海より 嘉永五年六月十日 土屋在江戸 松陰在萩松本

拙堂來月より一寸來ル由僕之喜可レ知也

品川之別不堪夢想候爾後無異御歸國之由兩度之書問得レ審レ之奉喜雀候幽囚之狀如何千里之才も繩墨之字より入り申候まゝし太平之時節逢レ此罪案可レ賀之至也、所謂時無英雄使堅子成名、俠兒當鞍馬空弓之中、此等之事實不レ足言、兄之得レ此名幸生無事之時也、僕數日前以此語ニ土井氏、々々々拊掌呼レ快曰、男兒到レ此亦可レ以無恨、土井氏平日不レ許可人者、於今許レ兄、兄之知己千里之外豈不レ多乎、眼前之景も回顧して壯志を墜してハふらふいヨ諺曰、蓼蟲嗜辛、僕與レ兄所レ爲不レ同矣、而其志も曾不レ相同也、以其同爲此豪語、亦唯頼、老兄之知己也、唯來原氏之論如何例ノ其ジョイハの一語有レ之哉、抑幽囚中未レ接人欲レ聞其言而未レ聞也、何レ致しても 兄之繩墨よりるる他日巨村を營之兆やらまれんと占しても見よ來書讀レ僕之件々皆能了

レ之まゝし馮鐘之議論中村氏より非レ出也但餘り食無レ魚出無レ興、故出レ此窮愁之語耳、而中村氏數日前之書、嚶鳴社中諸兄皆欲レ僕之歸省ニ深切、玆言亦有理、然僕之尋常 老兄之所ニ熟持、之てハ實も面目無レしてハふらふ何レ致しても少しハ面目を變して歸らふぞれハ込ルよ其故諸君子之高意も叶否猶未レ慮也

兄前書言、欲レ僕之歸出ニ中村氏意乎、邪念乎、則雖ニ邪念乎、囚ニ中村氏書、未レ曾不レ的當也、兄之明眼實ニ燃犀之如シ以此明眼、幽囚中、二十一史研之精レ之、古今之得失、治乱之興敗、聖賢姦邪之進退出處、奇節偉常、山林瑰何之士尙而論レ之、豈不レ一大快事乎、僕今日讀ニ漢書賈誼・晁錯傳、歎ニ時之難、又悲ニ二人之不遇也、文景之賢、尙不レ能レ知ニ二人之才、況於ニ其下者、然文景之不レ知ニ二人、亦當時群有司之責也、世人常言、上賢則下亦賢、僕則以爲不レ然、何者、當今之諸侯雖有ニ才之美、爲ニ之下者、輔導不レ得レ其宜、往々不レ鏡不レ振、前之賢者、遂々措亡泯滅、陽有ニ仁恕之名、而陰養ニ柔軟之性、其國皆向レ之、婦人やら病人やら不レ可レ知之、士人千百狗輩、豈不レ天地間之一事不平ニ哉、其始皆輔導之無人よる諸侯且然り況於ニ天子乎 僕今日大醉、書到レ此、其醉始醒、反覆讀レ之、自不レ知レ爲ニ何等語、文景賈生等之論陳腐、諸侯之事不レ爲レ斥備、然別ニ〔不明〕狀紙之費實甚、是以漫レ致レ之亦頼ニ知己之知レ我也、看了火レ之可

御頼常陸帶七日比よハ持主よりかりる積りと鳥山翁申候間其迄御待可レ被レ成候制外危言・藩祖實錄後便ニ差贈り可レ申候間御安心可レ被レ下候五藏之事于レ今不レ分明ニ大ニ氣遣申候葉居常無ニ隱謀故レクジリハせんかと被レ存候 姦臣々後ニ侯駕ニ十四五日後より出立致し候様子故間違候者哉と被レ存候千住にて姦臣之出立承り候處十四五後レ候も無ニ間違ニと申事ニ候何分氣遣ハし姦事ニ奉レ存候其故他人よハ夢々御洩無レ之様奉ニ願上ニ候今日も急便故略々申述候後便よ々委曲上聞 不一 時候々とふふりととゆひふいよ

六月十日夜

土屋矢之助拜

嘉永五年

吉田楠\*方先生 机下

御一讀之後ハ夏之蟲（半蔵）~~~~~

二圓金一圓（半蔵）ハ山縣兄へ相託シ一圓ハ僕預リ置申候

此書亂雜而無章、幸火レ之、塗抹誤脱措而勿レ問

\*（稿方の意味不明、思ふに當時の戯稱か）

（東京市吉田茂子氏藏 校合濟慶）

九八

×來原良藏より杉梅太郎に贈る

嘉永五年六月廿四日

（來原、杉在藏）

過日ハ御來訪難（駒留めて夕日の影や草の花）レ有奉レ存候御令弟之高文妾ニ冊上ニ塗抹し返壁仕候多罪御宥恕奉レ祈候外ニ愚詩少々有レ之候得共未ダ書調不レ申追日  
（旅夜の燈きへてきり）電覽ニ供し可レ申候間此段可レ然御致意奉レ祈候（不明）頓首

六月廿四日

（外封）

杉梅太郎様

來原良三

拜呈 廿七文 小豆、十六文 木代、八文 米代、（意味不明、反故であらう）

（東京市吉田茂子氏藏 校合濟慶）

九九

×山縣半藏より

嘉永五年六月廿八日

（山縣在江戸、松陰在藏松本）

（前文關）又得念六日伊豆國夷船之報、云夷船一隻（長サ二十七間乗組三十人ト云事シヤ）載紀州漂人十名來泊焉、請レ入之入之者、有レ命曰、送レ之自有其人、受レ之亦自有其地、以不送之人而至不送之地、國有法制、不レ可ニ敢犯、蓋人言ニ阿蘭、地言ニ崎陽也、於是夷人大怒曰、養レ之者三年、枉レ程者万里、護送而至、何待レ之不遇如レ此、居レ間通譯者大困矣、然大者遂不レ了、夷遂知我之不レ肯受、乃以ニ其七名ニ強

欠

# 欠

一一一 谷三山と筆談

嘉永六年四月・五月頃

松陰谷在  
大和國八木

唯用<sub>二</sub>宋註<sub>一</sub>讀<sub>二</sub>四書及詩書等<sub>一</sub>耳、而亦鹵莽之甚、本無<sub>二</sub>足<sub>レ</sub>道者<sub>一</sub>、  
初アリ節齋削<sub>レ</sub>之

西漢藝文志、寅甚服<sub>レ</sub>之如何、

徠翁辨道學則中、大者大成、小者小成、邪正侃侃、仲尼之區域塞焉、綱目之於<sub>二</sub>治國<sub>一</sub>、性理於<sub>二</sub>修身<sub>一</sub>、人與<sub>レ</sub>我皆不  
<sub>レ</sub>堪<sub>二</sub>苛刻<sub>一</sub>、等之說大心服、

さい  
宋覽異言

い  
か、  
（東京市武岡博三氏藏 校合濟慶）

一一二 谷三山と筆談

嘉永六年四月・五月頃

松陰谷在  
大和國八木

所<sub>レ</sub>著新論尤世<sub>二</sub>行<sub>レ</sub>ル

大日本史校正ノ時甚功アリ

氣節識見歴<sub>二</sub>倒<sub>一</sub>藩、

延于ノ子、近著四十七士傳行<sub>二</sub>于世<sub>一</sub>、然其人物ハ前三人ニ及ザル<sub>レ</sub>万々

右四人水藩ノ人物ナランカ

會沢 常藏

豊田彦二郎

藤田虎之助

青山量太郎

（奈良縣谷信藏氏藏 校合濟慶）

一一三 谷三山に贈る 嘉永六年五月八日 松陰在伊勢國山田 谷在大和國八木

又云猪飼貞吉伊賀上野住居ノヨシ

五月八日勢州山田公奉<sup>皇</sup>一書候彌御多吉御起居可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>在奉<sup>ニ</sup>珍喜候二小生無<sup>レ</sup>恙遊歴仕候乍<sup>レ</sup>憚御放慮奉<sup>レ</sup>祈候  
昨日津<sup>ニ</sup>齋藤徳太郎<sup>（拙堂の子）</sup>の一面節齋之書相渡置候併拙堂のハ未<sup>ニ</sup>面會<sup>ニ</sup>尤彼書牘之事拙堂疾<sup>ニ</sup>承知之由扱山田<sup>（權大夫）</sup>にて足代氏  
相尋松田縫殿と申仁<sup>ニ</sup>相會候此御人先生にも曾<sup>テ</sup>一面仕り候有<sup>レ</sup>之ヨシ御盛名得<sup>ト</sup>承知被<sup>レ</sup>致候海外異傳商確之事話  
候處甚一見相願度<sup>（後文關）</sup> （奈良縣谷信藏氏藏 校合濟慶）

一一四 ×安元杜預藏より森田節齋に贈る 嘉永六年五月九日 安元在大和國郡山 森田在大和國五條

一筆啓上仕候薄暮之砌先生道履萬福奉<sup>ニ</sup>南山壽<sup>ニ</sup>候陳者野父藤右衛門義尚三年以來漸く衰勞仕候處昨年六月以來別<sup>ル</sup>神氣衰勞致咳嗽  
甚瀉下甚敷候間小生兄弟默<sup>ニ</sup>禱天地<sup>ニ</sup>延<sup>ニ</sup>諸名醫<sup>ニ</sup>種々療養仕候上異方奇劑相用候得共一向其効驗無<sup>レ</sup>之天乎命乎遂當二月九日長逝仕候  
泣血慟哭不能<sup>レ</sup>如<sup>ニ</sup>之何<sup>ニ</sup>抱<sup>ニ</sup>終身同極之一大遺憾<sup>ニ</sup>候此段御憐察可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下候右之譯故邇來打絶御無言仕候然處本月三日長藩吉田生花  
墨携遠方之處迂路過訪被<sup>レ</sup>致候小生義漸其十四日前家督襲秩被<sup>レ</sup>命候蛸元紛起殊<sup>ニ</sup>四日五日ハ城内當直<sup>ニ</sup>テ漸就<sup>ニ</sup>城下一小店<sup>ニ</sup>會<sup>レ</sup>生  
々翌日仗<sup>レ</sup>劍東行誠<sup>ニ</sup>大失敬仕候其子細者弊藩近年自<sup>レ</sup>非<sup>ニ</sup>姻婭<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>擇<sup>ニ</sup>雅俗<sup>ニ</sup>一切禁<sup>ニ</sup>外交<sup>ニ</sup>而小生亡父トハ家階遙下り所<sup>レ</sup>謂<sup>ニ</sup>大番組也、  
大番有<sup>ニ</sup>番頭<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>隊長<sup>ニ</sup>々々番頭皆没<sup>ニ</sup>字碑<sup>ニ</sup>故以<sup>レ</sup>法<sup>ニ</sup>一切嚴<sup>ニ</sup>禁<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>故小生吉田生<sup>ニ</sup>大失敬之狀如<sup>レ</sup>此<sup>ニ</sup>此段御明察可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下候扱直杖一  
什早速御計音可<sup>ニ</sup>申上<sup>ニ</sup>之處何分忙然トシテ萬事皆抛却之事故右之始末<sup>ニ</sup>及候間向後失敬之條御明恕奉<sup>レ</sup>祈候先ハ御報勞々愚札如<sup>レ</sup>此

御座候恐惶謹言

五月九日

森田先醒 函丈

二百乍<sup>ニ</sup>末筆<sup>ニ</sup>時季御保護奉<sup>レ</sup>祈候

（癸丑遊歴日録には安元訪問の事洩れて居る、この書はその一證である）

（寫本奈良縣安元年彦氏藏 校合濟慶）

安元杜預藏  
秦爲政（花押）  
（別名である）

一一五 森田節齋に贈る 嘉永六年五月十一日 松陰在伊勢國津 森田在大和國五條

五月十一日勢州津公奉<sup>ニ</sup>一書候彌御起居御安靜奉<sup>ニ</sup>抔賀<sup>ニ</sup>候矩方無<sup>レ</sup>恙至<sup>ニ</sup>于此<sup>ニ</sup>乍<sup>レ</sup>憚御休念奉<sup>レ</sup>祈候扱本月六日津ニ來  
り候處七日齋藤徳太郎<sup>（拙堂の子）</sup>旅館へ來り即御書牘并國字匡謬書共相渡申候勿論徳太郎父子疾ヨリ此更承知之ヨシ尤も匡謬之  
事ハ未<sup>レ</sup>聞ヨシナリ拙堂一面ヲ乞候處繁務中之事<sup>ニ</sup>且城内住ナレハ合<sup>ニ</sup>難<sup>ニ</sup>シ尤モ強<sup>テ</sup>逢候積ナレバ十日ニハ休日故山  
莊ニテ逢可<sup>レ</sup>申トノ事ニテ其段約シ置八日ヨリ山田ニ向ヒ一夜宿シ足代權大夫ヲ訪申候足代翁甚奇人ナリ拙堂トハ相  
軌候様子アリ先生之書牘なとも昨七月頃の稿ヲ写シ秘藏仕居候彼地ニ松田縫殿なるものは亦足代ノ同好<sup>ニ</sup>足代急<sup>ニ</sup>呼  
ニ遣シ其詳ヲ語り候處甚愉快カリ申候九日津ニ歸リ十日訪<sup>ニ</sup>齋藤氏山莊<sup>ニ</sup>拙堂<sup>ニ</sup>シニ不<sup>ニ</sup>似合<sup>ニ</sup>甚温々なる事あり是  
所<sup>ニ</sup>以<sup>レ</sup>為<sup>ニ</sup>君子<sup>ニ</sup>歟將所<sup>ニ</sup>以<sup>レ</sup>為<sup>ニ</sup>奸雄<sup>ニ</sup>歟拙堂云、森田所<sup>レ</sup>論甚尤あり近日復書スベク候間足下ヨリモ可<sup>レ</sup>然申遣吳よ一ニ其  
言ニ從ヒ可<sup>レ</sup>申ト存候將又匡謬一事少モ不<sup>レ</sup>苦事ナリ<sup>（賦カ）</sup> 鷗陽公ノ五代史スラ匡謬ノ作アリ況於<sup>ニ</sup>吾輩<sup>ニ</sup>乎尤匡謬致<sup>ニ</sup>發行<sup>ニ</sup>

候ハ、拙堂モ見レ之甚尤ノ事ト申たる由跋中ニ述候様頼み候事ナリモシ其跋カノ方出来不レ申ハ此方ヨリ作リテ贈リモ可レ致トノ事ナリ」此敵モ敗徵ヲミテ早ク降ヲ乞フ智トヤ云ン黠トヤ云ン呵々

○拙堂往々足代ヲ誹リ足代亦拙堂ヲ誹、未知孰是、然足代カ話ニ一奇アリ云、拙堂江戸ニ出候處羽倉ヨリ書ヲ贈リ云、正謙ノ謙ヲ忘レズ、拙堂ノ拙コソヨケレト拙堂大ニ怒リコソツバ旗本め何ヲヌカシナルカトイ、シヨシ然共拙堂ニ逢イシニ謙モ拙モアリ蓋シ為ニ海外異傳ニ退ニ一步ニ歎抑足代の誹未ニ的當歟

○山田ノ松田縫殿ナルモノ大ニ此事ヲ喜ヒ候故谷翁ノ商權ノ事話候處足代兩人共ニ甚一見ヲ願候事故彼地ヨリ三山翁ヘ贈リ候認ニ一書ニ候る松田ヘ與ヘ尙松田ノ委曲申越候由ニテ商權ノ稿一本ヲ八木ヘ向ケテ乞ニ遣し候筈ニ御座候何卒一本彼方ヘ參リ候ハ、足代モ一人物且天下ニ交多キ人柄故甚四方ニ傳播スベク被レ存候

○土居幾之助未ニ歸藩、猪飼貞吉ハ伊賀上野ニ住し候由并不ニ相逢ニ可レ憾々レタ  
拙堂山莊ニる相會スルモノ備中生一人美濃生一人松坂生一人拙堂甚此事ヲ藏匿セズ三人等ノ噂ニモ拙堂甚森田之論ニ服セラレ候ヨシ申候併拙堂怒罵ノ聲ヲ不レ聽遺憾萬々

河村貞藏ヲ訪ふ事再ヒ、為人沈深重厚ニして有レ氣善知ニ 先生ニ者也與ニ拙堂ニ書ヲモ示し候處曰、此非ニ向與ニ小竹ニ往復之比、不レ可レ無之議論ナリト申候

○郡山安元生トハ一夜旅宿ニる談候ヒシニ談緒蜂生甚殘情ニ奉レ存候兼承リ及候通痘痕滿面與レ僕同レ相、津々談レ兵

與レ僕同レ癖、実ニ一見如舊ニ御座候但可レ憐可レ惜キハ父藤右衛門事二月間ニ臥病不レ起郡山ノ一人物を失ひ候のみならず杜預生風樹之感不堪ニ沾巾ニ候且母も為レ之稍氣力ヲ損し在レ床ヨシ加レ之杜預生入ニ大番組ニ勤番モ煩シク又同組并組頭ノ為免ニ左支右吾ノ周旋甚勞候ヨシ慷慨之者も森嚴之制度ニハ千里駒ノ槽檻ニ苦ムニ不レ異との事あり  
\*藤川於菟馬モ一面、京賢録淨録相托シ置候事其他可レ言事も如レ海如レ山ニ御座候得共先後鴻ニ申殘候今日直ニ出立之積殊ノ外紛冗仕候裁書勿々非ニ事レ師之道ニ萬祈ニ海恕ニ

五月十一日

吉田寅次郎

矩方再拜

節齋森田先生 案下

二白、森君此節ハ御地逗留ト奉レ察候此書相達候節若被レ為レ在ニ御地ニ候ハ、乍レ憚可レ然御致意奉レ願候  
堤老臺(孝亭)ヘも書無レ之候梅雨中益御自重為レ道是祈

拙堂門人云、拙堂五話ヲ作ル積ノヨシ 文話 詩話 兵話 史話 經話

\*（此人後に岡村閑翁ニ云ふ、此寫本は此人の筆である、第七卷東征稿終尾註参照）

（寫本奈良縣安元年彦氏藏 校合濟慶）

一一六 兄杉梅太郎に贈る

嘉永六年五月廿四日

松陰在江戸  
兄在藏

上 家伯教大兄案下

劣弟矩方百拜

逐日甚暑相成彌御園門御康寧奉遠想候扱矩方事道中無異明日着府仕候五月朔日大養徳國五條駅所發之書已ニ相達候と奉察候矩方以朔日發ニ五條ニ至田井莊、訪森哲之介ニ宿仕候二日至八木ニ訪谷昌平ニ亦一宿、昌平之學毎逢奇之、二日至郡山ニ訪安元杜預ニ一宿、亦一有志人、四日宿奈良、五日宿伊賀上野、六日至津訪河村貞三、八日伊勢參宮、伊勢之法必御拔ヲ送り來ル大夫ニ宿シ候法故村山へ宿シ申候訪足代權大夫、其人物諄々善談不負所聞也九日津ニ歸ル十日齊藤拙堂ニ其山莊ニ遇フ十一日遇水沼久太夫、山鹿流兵家あり十二日至桑名ニ訪森伸助、遂夜中伸助も同舟まで至美濃國大垣、是夜宿ニエジ大垣にて訪山鹿流兵家山本多右衛門・良齋門人井上莊二郎、十四日宿大田、十五日宿大湫、十六日逢田邊定輔者、村瀬誦輔ノ二男にて頗讀書人なり遂相伴至江戸、是日宿三戸野、十七日福島、十八日洗馬、十九日和田、廿日沓掛、廿一日高崎、廿二日熊谷、廿三日蕨ニ宿申候道中頗健又梅雨中にても雨少ク終日フリ候才カニ兩日ノミ \* (此返點は松陰自筆、他の返點は編者の附記である)

右此迄蕨駅舎にて認置候事已下廿四日江戸着後所認詩ハ拙ク木蘇ノ实景真如レ此

蘇道記事

蘇道梅天不耐涼、山郷風物異他郷、新秧挿後麥猶綠、方是家々蚕事忙、廿四日至江戸一投鳥山新二郎家、上野道ヲ通り候故未タ鎌倉へ不參依レ之明日々彼地へ赴ク積り御座候孰も歸府之後委曲可申上候此書ハ安全着仕候といふ印迄ニ御座候鎌倉へハ五七日も可滯カ  
○今年ハ豐饒ナルベシト到処皆其噂アリ郡都督府ノ悅可レ知也

○今日着懸ケ齊藤劍客之塾まで参り候處井上壯太郎ハ此節御屋鋪に歸り居候由桂小五郎及ヒ松村文祥・赤根才助ニ逢申候文祥不特元腹(スルノミ)乃為劍客矣、其面目甚異前日ニ一笑、此節調點返點松陰自筆

○山鹿素水も無異美濃長原武も又関東へ再來ノヨシ美濃大垣にて聞レ之雖未詳ニ其何如ニ矩方之喜可レ知也  
○水戸ノ天狗党是迄皆々ツラ扶持ナリシガ去冬十二月十九日孰も賜レ祿ヨシ長井政介・會沢其子熊三・藤田其子健二類會る遊候日會面之分ハ皆首尾よろし是亦可喜之事あり此伊勢にて足代權大夫が所にてキク

○治心氣齋先生・來原良藏・久保清太郎等へ可レ然  
○突道・中谷・諫早へもし御會面之節可レ然、三子へ贈レ書積あれ共着カケニテ未暇及、定テ兵要録ハ初りたるらん英氣ハ勃々ナラント申セシヨシ御傳語奉レ頼候猶又中谷老翁へも可レ然と正亮へ御頼仕候 \* (返點松陰筆)

○鳥山宅ニ越後三条ノ一向僧北条秀英ナルモノアリ亦寄士但一昨年々所レ知ノ人  
○村上寬齋歸國社中ノ一奇人ヲ失フヨシ良藏へ御話奉レ頼候  
玉丈人へ無別書候支 (東京市吉田茂子氏藏 校合濟齋)

一一七 兄杉梅太郎に贈る 嘉永六年五月廿四日 松陰在江戸 兄在蕨

五月廿四日江戸着桶町河岸寓居仕候處御悉しき瀨能氏荷物柳行李一・文庫一并四月四日之書入手尊大人并妻木・宮部之書孰も慥ニ受取先以御園族御康寧之御様子承レ之大ニ安心仕候房吉至、又得レ詳ニ其情ニ大喜々々、今日草々件々ニ當リ



候御答ハ他日と申上殘候金ノ亥御國ハ瀬能迄御送被<sub>レ</sub>遣候由相對之上可<sub>レ</sub>渡との申分あり然處大和邊にてハ多クハ人之處ニ寓シ候故多クハ費不<sub>レ</sub>申出足時之金尙二兩不<sub>レ</sub>足ハ囊ニ在り御安意奉<sub>レ</sub>頼候以上

五月廿四日

寅二郎

家大兄案下

(外封) 勿々中略封万々高許

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟慶)

一一八 瀬能吉次郎に贈る

嘉永六年六月四日

松陰瀬能 在江戸

瀬能様

吉田

浦賀ハ異船來りたる由に付私只今ハ夜船ニ參り申候海陸共に路留ニも可<sub>レ</sub>相成<sub>レ</sub>哉之風聞ニる心甚急如<sub>レ</sub>飛々々

五月四日

御國へもし飛脚參り候ハ、此書直様御さし<sub>レ</sub>し奉<sub>レ</sub>頼候左候得<sub>レ</sub>僕壯健ニる英氣勃々之様子も可<sub>レ</sub>相分<sub>レ</sub>候事急別に手紙を認ル<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>能 (瀬能は當時江戸藩邸吏である) (乃木院長記念録所載寫眞 校合濟慶)

一一九 道家龍助に與ふ

嘉永六年六月六日

松陰在浦賀 道家在江戸

僕四日之夜船ヲ發候處甚遅シ且風潮共ニ不順五日朝四ツ時漸ク品川ニ到リ上陸仕夜四ツ時浦賀ニ着仕候今朝高處ニ登

リ賊船之様子相窺候處四艘 二艘ハ蒸氣船、砲二十門餘、船長四十間許、二艘 陸ヲ離ル、一十町以内之處ニ繫船<sub>シ</sub>船之間相 距ル<sub>レ</sub>五町程ナリ然ルニ此方ノ臺場筒數も甚寡ク徒ニ切齒耳、且聞ク賊船ノ方、申分ニハ明後日晝九ツ時迄ニ願筋之事

御免無<sub>レ</sub>之候得<sub>レ</sub>船砲打出シ申出たる段相違無<sub>レ</sub>之候 船ハ北アメリカ國ニ相違無<sub>レ</sub>之願筋ハ昨年ハ風聞之通ナルベシ然<sub>レ</sub>ヘ直ニ持參ルヘク申ヨシ願筋ノ外ノコニテハ日本ヨリ舟ヲヤリテ 佐久間并塾生等其外好事之輩多ク相會シ議論紛々ニ御座

候濱田生近澤<sub>也</sub>も參り居候事 モ一向ニ舟ニ乗セ不<sub>レ</sub>申候朝夕賊船中ニテ打砲イタシ禁ス<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>聽 此度之事中々容易ニ相濟申間敷孰<sub>レ</sub>交兵ニ可<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>る併船も砲も不<sub>レ</sub>敵勝算甚少ク候御奉行其外下曾禰氏おとも夷人之手

ニ首ヲ渡シ候ハ切腹可<sub>レ</sub>仕とて頻ニ寺之掃除被<sub>レ</sub>申付<sub>レ</sub>候佐久間ハ慷慨シ事斯ニ及<sub>レ</sub>ハ知タ<sub>レ</sub>故先年ハ船と砲と之事

ヤカマシク申たるニ不<sub>レ</sub>聞 今ハ陸戰ニテ手詰之勝負外手段無<sub>レ</sub>之もの事ナリ何分太平ヲ頼み餘り腹ツ、ミチウチナルト事コ、ニ至リ大狼狽之體可<sub>レ</sub>憐々々且外夷<sub>ハ</sub>對シ失<sub>レ</sub>面目<sub>ニ</sub>之事不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>之併シ此ニテ日本武士一<sub>ハ</sub>ヘコシメル機會來リ 申候可<sub>レ</sub>賀亦大矣

佐久間ハ江戸へ飛脚ヲ立候故此一書相認申候御國へ別ニ手紙不<sub>レ</sub>差出<sub>レ</sub>候間玉木文之進迄此手帛直様御送可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候

六月六日

吉田寅次郎矩方

私事も今少シ當地ニ相止リ事之様子落着見届歸ル積ナリ

道家龍助様  
人々御中

御やしき内瀬能吉次郎・工藤半右衛門に此事一寸御聞せ可被下候

(萩市松陰神社藏 校合濟)

一一〇 宮部鼎藏に與ふ

嘉永六年六月十六日

松陰在江戸 宮部在肥後

久不接華翰、渴望日甚、五月廿四日、抵江戶、投梁山伯、即日得家兄書、開封則貴書在焉、喜幸扑躍、急展讀之、未數行消魂者數、豈兄大故、相踵至于此、風樹之感何如乎、至痛々々、向僕疑兄無二書、今讀此書、不覺失聲、但兩尊共高齡、加以兄平生誠孝、無憾、別亦可或少慰矣、僕屏居中、無可言者、昨年十二月八日官裁下、削藩籍、早春間呈書言其詳、料已達覽矣、僕雖瘦鷲、有為之時至、幸勿勞高念、(公文書には十二月九日あり松陰の誤)

梁山伯主無恙、有二生從焉、僕居所未定、假居、尊藩佐分利君亦居未定、自九月來江戶、徒在旅店、僕以昨日始相見、恐其旅店闕便、急引之梁山伯、々々々光景頗覺繁假、佐分利君有志于洋文、僕甚同、心、將相與謀之不少、濱田ノ生一人僕所會知、此節兵學為修行來江戶、素未熟ナレ人物子介、立志甚說、亦有學之志、濃人長原生、亦先僕十數日來府、交友不尠、獨恨少老臺耳、然見老臺所善、亦可少慰也、

老臺所善三四君、三四月之交弊國へ御立寄被下候由僕發程後ニて甚殘念ニ御座候家兄内々得拜顔ニ種、御高話拜聽仕候ヨシ且不容易御厚情之御傳言も有之恐入候事之由家兄委悉家兄申越候僕雖放廢之身、幸有父叔兄弟、得下轉溝壑、而為所素志、願放念焉、扱四君之内佐分利君之外未タ御到着無之候併近日御着と相待居申候

水府之事御同慶奉存候一昨年所接之人物も皆々芽ヲ出シタルヨシ尤可喜也

藩人村田ヲ書之事奉敬承候水府老公上書得と穿鑿之上可申上候

僕以正月廿五日發過大和、訪森田謙藏・谷昌平新助事 改名・安元村預三、留及兩月、與森田遊河泉之間、森田、

頃廢酒讀書甚勉強仕候有詩云、落魄江湖卅歲餘、放浪詩酒費居諸、慨然今日碎盃去、欲著人間有用書、過伊勢訪齋藤拙堂、美濃ヨリ中山道通りて五月廿四日達江戶、廿五日夕至鎌府、六月朔日歸江戶、四日乃聞浦賀之咄々怪事、其夜ヨリ至浦賀、視其様子、當今列藩之士氣奮起スルモ甚多シ無奈閣老ノ犢鼻ナク此度ノ一事失三國體者甚多、有志之士、豈堪慨嘆之至哉、委曲之様子定御承知可被成候扱尊藩御軍備ノ整タルノ聲名噪都下、其他越前侯・岡崎侯ナド令名アリ佐久間修理・羽倉外記頻ニ幕吏へ苦心セシヨシ然遂不用修理其藩侯ノ為ニハ大ニ用ヲナシタル趣僕日夜至其家、其詳ヲキク中々長鬚生も慨慨ヲ起シ申候僕以二十日歸江戶、是ヨリ兩三日江戶尤噪シ九日浦賀ノ隣津栗濱まで兩奉行出張夷ノ圖書受取ノ次第僕細カニ見之誰不為之泣憤哉カノ話聖東國ナルモノ新造ノ陋邦乃以堂堂天朝屈而下之如何々々、唯所待春秋冬間又來ヨシ此時コソ一當ニテ日本刀ノ切レ味ヲ見セ度モノナリ此度ノ事列藩ノ士及策士論者決ニ打拂者十二七八噫惜哉

六月十六日

又有故改名

吉田寅次郎矩方

宮部鼎藏殿

山鹿素水安全無異、僕先書甚無稽之妄說申上甚赧然仕候然都下亦有此風說ヨシ

此已下一覽火之（江崎五郎）通高之事僕來江戶一始聞其詳、鳥山ノ所へモ其後兩三次ハ來りし由併昨年失機ヲ甚悔、人ニ接スルヲ欲セス鳥山モ亦甚氣毒ニ存候大事ヲ成ス迄ハ暫ク聲息ヲ絶シ交友間へモ所在ヲ隱ス位ノコナリ併英氣益勃々タル様子ニ下妻辺ニ徘徊スルヨリ僕欲ニ訪レ之然春時以來遊テ日ヲ過セシ故未レ暇及候鳥山并大淵鼎三・和田修義等ノ周旋千苦万辛甚可レ感事（節書）森田ヘ書ノ一事僕訪ニ森田一日委曲申たる事なとハ必シモ事結局ヲ待ザルカ僕初訪ニ森田一旨トシテ老兄御出アリタルカト問候處御出無レ之ヨシニ付僕甚疑レ之江戶ニテ堅約仕たる様子相話候處森田大ニ怒ル僕因思兄決無ニ此失レ信之事一料ルニ兄江戶御發迄五郎之事不レ聞故再議論有レ之タルコナルベシト存し森田ヘ其故ナルベシト申候處森田も鳴程夫等ノ事ナルベシト後ニハ心解申候當時兄重來ノ御事ハ夢ニも不レ知共僕所レ料即兄ノ所謂大事結局迄五郎ノ書モ案頭ニ可レ閣と申ニ符合仕候然とも右之通僕已言レ之タレバ鷄肋集五郎書ヲ兄ノ賜レ僕書ト合併ノ僕ヨリコノ故ニテ遲達ニ相成タル段ヲ森田ヘ申越スハ如何御同意ニ御坐候へは差急候コニ付不レ及共僕迄御遣可レ被レ下候已上

二白

南部侯ハ當秋登府奸臣從レ之ヨシ

（江崎五郎の兄春庵を謀訴して、謀死せしめた田鎖左膳を指す）

（寫本熊本市石原醜男氏藏 校合濟）

一一一 兄杉梅太郎に贈る

嘉永六年六月廿日

松陰在江戶 兄在萩

五月廿四日江府到着、屢次之尊教拜誦仕候然處一寸之書相認候る瀨能氏（吉次郎）ヘ託候迄ニテ廿五日ハ赴ニ鎌府候江戶至ニ鎌府二十三里中山道已來練熟之脚ニテ安々と朝辰時ニ發、日未レ没達候扱上人御事堅剛倍ニ昨年一段之御事奉レ存候黍粉

呈レ之候處山海數千里之處拜味も無ニ勿體一由之挨拶有レ之矩方亡命一事出羽源八ハ御承知之由頗被レ悉ニ其詳候流石禪學之功其甲斐アリテ其論甚獲ニ吾心者ニ御座候自後之處名聞利祿之念を断候ト之事逗留中甚殷勤ニ御教誨有レ之候故矩方尤其志ト拙作長篇を出候處朗誦一過大ニ被レ喜候上人御學力之處昨年ハ左程ニ不レ思候處此節寛々相伺大ニ感心仕候詩文之論ナト致候處禪理ニ引合タル高論も出テ脩身之工夫、死而後已之説なとニ及候間禪説も亦不レ外レ此ヨシ昌黎所謂外ニ形骸ニ以理自勝之思ヒヲナシ申候又德隣寺小僧惠純なるものも圓覺寺へ參り居此亦詩作をと心懸候人ニテ時々出會仕候杉家之事能知居候廿九日上人惠純其他雜僧二人ト遊ニ繪嶋申候五月朔日歸ニ江戶一申候二日御屋しき道（龍助）家・瀨能ヲ訪フ三日訪ニ佐久間（象山）初メテ會ニ石州濱田生近澤啓藏、四日麻布工藤ヲ訪フ新山忠右衛門も麻布ニ引取居候是日晚方聞ニ浦賀之警夜ハ舟ニテ彼地ニ赴キ候積ノ處風順不レ宜漸五日朝四ツ時ニ舟品川ニ達候是ハ陸行ニテ是日夜四ツ時達ニ浦賀、浦賀之事ハ委敷達ニ御聽ニ可レ申候間、幕吏腰脱賊徒膽驕國體ヲ失候事千百不レ可レ數佐久間及ヒ近澤生其他慷慨之徒「舊知之人ナトも有レ之」多ク浦賀ニ會し日々賊之様子幕府浦賀奉行四藩（彦根・會津・河越・忍）之守備なとヲ見彼ヲ惡ミ此ヲ悲、々憤兼至、九日迄逗留仕候御やしきハ北條源藏・井上壯太郎參り委細彼此之様子穿鑿仕候二人高才加レ之深重用レ心ルコト非ニ矩方輩所ニ能及ニ二人ノ見聞書定テ御國へも疾ク達シタルコト存シ矩方が如キ淺陋ノ所見ヲハ不ニ申上ニ候浦賀之守備ハ一昨年矩方與ニ宮部論レ之曰、幕府以ニ虛備ニ唱ニ天下、天下孰敢不ニ響應、トイ、シ所ニ今日ニ到リ虛備之所ニ以爲ニ虛備、天下人初開レ眼而視レ之、九日於ニ栗濱ニ兩奉行出張四藩ノ海陸軍備ヲ設ケ夷書引受之次第國體ヲ失スルノ甚シキ海外新話中ニ圖有レ之、琦善與ニ逆將義律ニ對面ト同日之話ニテ口ニ上スモ尙心ヲ痛ム夫ハ扱置吾陣ノ備方何と

も無紀律ノ極、目ニ視ル尙魂ヲ消ス此争カ不レ招ニ醜虜之侮哉此等之事も二子之論定テ備リツラン九日暮方夷船退出之  
 等之處直ニ内洋ニ駛入セシ故暮方ハ江戸ヘ向ヒ走り回り申候横須賀ト云地ニテ井・北ト同道(井上壯太郎・北條源藏)相成十日午時櫻田邸ニ  
 達シ申候是ハ江戸ノサワキ尤甚シ十三日賊船退帆迄ハ別邸甚混雜ノヨシ十一十二日ニハ邸ニ至リ(秋良敦之助)明良敦ニも合申候井  
 上・北條銃隊ヲ司リ手厚ク致ニ心配ニ候道家ガ心配ニテ佐久間ニテ大砲貳門買得ニ相成申候本藩一ノ手之備方故都下聲  
 名籍々肥後藩先手物頭都築四郎打拂之事ニ付手強ク公邊ヘ入り込ミ候趣是亦甚高名ナリ其後本藩之様子絶る不レ承近  
 澤生為ニ其藩ニ起ニ操練ニ候其他諸藩起ニ操練ニ鍊ニ砲銃ニ無ニ家無ニ之此類之事書ケハ不レ覺累レ幅候故先打置候矩方居處暫時  
 ハ鳥山ニ居可レ申候佐久間入塾之事冗費多クシテ實効無レ之段近澤生杯頻ニ止メ申候已ニ近澤も入塾未ニ兩月ニ退塾仕リ  
 甚不平ノ條條歴舉仕候事ニ御座候夫故先カヨイテ參リ候積ナリ  
 肥人等詳言(常吉)與ニ大兄ニ快論狀上  
 肥人四人分レ來リ第一ニ佐分利來ル矩方引ニ之鳥山家ニ同居仕候永鳥・末松も來り度度出會仕候國友も來り候ヘ共未ニ面  
 話ニ異變中甚繁雜ニ御座候前三日ハ蟹行漸初ハ申候今日得ニ寸暇讀ニ高教、乃為ニ之答ニ曰、少瘡再發絶無ニ其患ニ万祈ニ放  
 念ニ書物類逐一落手良哉書讀レ之然レとも此騷擾中未レ能レ答  
 業餘漫録外冠議、今未レ有レ用  
 阿武行愉快奉レ察候銅山國益民益事、成ヲ仰ノミ  
 四圓金瀬能レ受取  
 朝議稱ニ木原ニ可レ賀

宮部ノ書懇復數百言、先日託ニ佐分利ニ為ニ之答、

先般河州富田林ノ所レ發ノ書今以不レ達候哉甚惜敷事ニ御座候封中ニ森田與ニ拙堂ニ論ニ海外異傳ニ書有レ之其論甚雄快ナ  
 リ

都下近日之事ニ付浮説甚盛、總不レ足レ言、但來夷ノ事先日ハ話聖東國ニ決シ居タル處又一説ニ「新カルホレニヤ」ト云  
 此國未三十一州ノ會盟ニ不レ與因テ此度本邦トノ互市ヲ初メタレバ其功ヲ以テ會盟ニ交ヘ可レ申ヨシ共和政治ノ總督ヨ  
 リ命シタルヨシ風説有レ之佐久間象山取ニ此説、然未レ知ニ何如、夷國書ニ通有レ之ヨシ一係ニ漢文、一係ニ蘭文、一係ニ英文ニ  
 ヨシ此亦風説

佐久間云、西洋鑿云、病有ニ近源、有ニ遠源、今有レ疾、平日血脉粘着スル如キハ遠源ナリ此頃ノ暑氣ニキケ疾起ル如キ  
 ハ近源ナリ外夷之輕侮我邦、何亦異ニ于此ニ哉、蓋吾本無ニ巨艦、夷侮レ我之遠源也、今夷來、砲臺失レ法、砲門不レ備、  
 凡百處置、皆失ニ其當、是夷侮レ我之近源也、欲ニ夷不レ侮レ我、宜ニ注ニ意于此、

六月廿日認

頑弟

吉田寅次郎

矩方再拜

家大兄案下

杉・玉木御轉宅之事御安心奉レ察候

治心氣先生・來原・中村・

(約八字は一たび書いて後に切去つた痕跡がある)

其他有志諸兄、近日為ニ何狀、浦賀之事、古今未曾有之大變、國威之衰頹

至此、其由果何在焉、僕以ニ文化蝦夷之事、比ニ之今日、彼在ニ荒陬、此在ニ府下、彼後有ニ悔過之言、此後有ニ益レ侮